

緋弾のアリア K・O・H リメイク

上平 英

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

以前書いた『緋弾のアリア K・O・H』のリメイク版。

以前の小説との違いは、オリ主が金次の同学年になつていて、性格が変わつてゐる。ライカとの幼なじみ設定も薄まつてます。

志乃ともどうなるか不明。

別作品と思つて読んでくれたら幸いです。

目

次

プロローグ

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

112 92 81 58 35 13 1

プロローグ

時刻は午前7時。俺こと『霧島 レオン』が日課である早朝トレーニングでかいた汗を冷たいシャワーで洗い流していると、風呂場の外から慎ましいドアチャイムが聞えてきた。

その慎ましさを感じさせるチャイムの音に、俺の頭のなかでチャイムを鳴らした相手の姿が浮かび上がる。

腰まで伸ばしたつやつやの黒髪に、ぱつりと切りそろえられた前髪。雪のように白い肌に、優しげな目つきと長いまつげ。まるで絵に描いたような大和撫子。

俺はため息を吐いてシャワーを止める。風呂場から出て手早く体の水気を拭き取り、トランクスにズボン、グレーのTシャツを着て首にタオルをかけてから脱衣所の扉を開ける。

脱衣所の扉を開けると、一緒に住んでいる同居人（先ほどまで寝ていた）が来訪者——予想していた通りの大和撫子を連れてリビングへと向っているところだつた。

「おはよう、キンジ」

「お、おはよう、レオン」

俺の挨拶に口元をひくつかせながら返したのは、朝っぱらから辛氣臭い雰囲気を纏っている同居人で同じ高校2年の遠山 金次。

こいつとは現在俺たちが通っている東京武蔵高の入学試験で初めて出会い、トータルで半年間ほど同じ寮の同室で生活している、日本で1番仲がいい友人である。

「おじやましてます、霧島くん」

「ああ。いらっしゃい、白雪さん」

金次の後ろから来訪者の大和撫子、星伽 ほとき 白雪 しらゆき が丁寧に挨拶していく。

俺はそれに大人の対応（微笑み）で応えたあと、金次に視線をやる。

「このリア充野郎め」

「……そんなんじやねえよ」

迷惑そうに言葉を返す金次だが、同い年で幼なじみの大和撫子（本物の巫女）が、中身は朝食だと予想される重箱を抱えてわざわざ男子寮まで着てくれただぞ？　これをリア充と呼ばずになんと呼ぶんだ。あーあ、羨ましいなあ。春休みの間は一緒にコンビニ弁当や弁当屋の弁当を買いあさって過ごしてたのに。これから金次は白雪さんの手作り弁当かよ。いいなあ。白雪さんつて料理上手で使ってる食材も高級品だからめちゃくちゃ美味しいんだよなあ。

——と、これ以上考えるのはよそう。目の前のリア充野郎を殺したくなるから。

「じゃ、俺は自分の部屋で着替えてくるから」

2人にそう言い自室へ向う。ハンガーにかけているの武偵高校の制服である防弾仕様のズボンに履き替え、白のワイシャツと学ランをTシャツの上から羽織る。

ひと通りの準備が出来たところで、机のなかにしまっている拳銃を取り出して手に取った。

——S & W M 1 9。

アメリカの銃器メーカーであるスミス&ウェッソン社が1955年に開発した回転式拳銃で、通称——コンバット・マグナム。アメリカの警察官が携帯する銃としてよく映画などにもよく出ているピュラーナ銃だ。

コンパクトなため携帯しやすく、それでいて拳銃のなかでも高威力を誇るが、装弾数6発という少なさとサプレッサーなどが取り付けられない点から武偵が所持する銃としては相応しくない代物なんだが……俺は気にいつているため、武偵になつてからずっと使用している。ちなみに通常のM19がKフレームのところをLフレームに改造しているため、357マグナム弾の強装弾も問題なく撃つことができる。

俺はいつものように安全装置と弾薬の確認を行つてからベルトに取り付けたホルスターに帶銃させ、次に竹刀袋を肩にかける。

こちらの竹刀袋だが、中身は竹で出来た竹刀ではなく本物の日本刀が入つている。

通常の日本刀とは違つて歯が背の部分に付いている『逆刃刀』と呼ばれる代物で、ある名匠に特別にオーダーして打つてもらつた、頑丈さがウリの名刀である。全長は1メートルほどで、一応打撃武器という扱いになつてゐる。

防弾制服に拳銃と日本刀を装備するという、一般人では考えられない登校準備だが、これは校則——『武偵高の生徒は、学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づける』で決められていることだ。

もちろん、これも普通の高校ではありえない校則だということは理解しているが、武装探偵——通称『武偵』を育成するための総合教育機関である『東京武偵高校』に通つてゐる俺たちにはこれがいたつて普通のことなのだ。

ちなみに『武偵』とは凶悪化する犯罪に対抗して新設された国際資格で、武偵免許を持つ者は武装を許可され逮捕権を有するなど、警察に準ずる活動ができる。

ただし警察と違つて武偵は金で動く。金さえもらえば、武偵法の許す範囲内ならどんな荒っぽい仕事でも下らない仕事でもこなす。つまり、『便利屋』のようなものだ。

そんな武偵という職業には常に危険が付きまとつたため、制服が防弾仕様になつていてたり、帶銃や刀剣を常に所持するように校則で決められている。

そして、さらに言うと武偵高では通常の一般科目に加えた、武偵の活動に必要な専門科目が14科目あり、その専門科目によつては毎日のように銃を発砲したり、刃物で斬りつけあつたり、肉弾戦を行なつたりといつた物騒な勉強が毎日のように学校で行なわれるのだ。

「さてと……じゃあ行くか」

部屋を出てリビングへ向う。ドアノブを回して開けると、座卓に座つた金次が朝食を食べているところだつた。

ちなみにメニューは玉子焼にエビの甘露煮、銀鮭に西条柿などといつた豪華食材が惜しみなく使われた、見るからに美味しそうな和風の弁当で、しかも美少女で巫女である幼なじみの手作り&世話付だ。まつたくもつて羨ましいヤツめ。……憎しみだけで人が殺せたら

いいのに……。

そんなリア充金次の向かい側には白雪さんが座つていて、食後のデザートだらうミカンを金次のために一生懸命にせつせと剥いていた。
……ああ、ほんとに羨ましい。つーか、殺意が湧く。なんだこのリア充野郎、白雪さんのお手製弁当を当然のごとく食べてやがる。

「あつ、霧島くん」

金次の向かい側で丁度ドアのほうを向いている白雪さんと目が合つた。白雪さんに次いで金次がこちらを振り返る。

俺は白雪さんのために（決して金次のためではない）、これ以上このリア充空間を壊さないよう出て行こうとするが――

「霧島くんはもう朝食済ませた？」

白雪さんが床から和布に包まれたモノを机の上に出して訊ねてきた。それは金次が今使つてているヤツと同じ形状をしていて――

「喜べ、レオン。白雪はおまえの分の朝食も作つてくれたみたいだぞ」

「……俺の分？　え、あ……いいのか？」

「うん、もちろんだよ」

笑顔でうなずく白雪さん。嫌な顔ひとつしないで、金次の隣に重箱を置いてくれる。あー……白雪さんはほんとにいい子だなあ……。好きな男（金次）以外の分まで作つてきてくれるなんて。うれしい反面、なんだか申し訳なくなつてしまふ。気を使わせちゃつて悪いな。本当はこのまますぐにでも重箱へと飛びつきたいが、これ以上白雪さんの邪魔をするわけにはいかないだろう。ここは気を使うべきだ。「あー……白雪さんの美味そうな朝食はマジで食べたいんだが、実はこれからすぐにでも登校しなきやいけないんだ。――だから、学校に持つていつて食べてもいいか？」

あとで弁当箱を回収しなければいけない手間を承知の上で、白雪さんはうなずいてくれる。そんなやさしい白雪さんに俺は続けて言う。「食べ終わつた重箱は洗つてキンジに渡しておくから、今日の帰りにでも家に――

「はい！　キンちゃんの家に取りに来ます！」

俺の言葉に手を上げ、元気よく返事を返す白雪さん。金次の家に来れる大義名分をもらつてうれしそうだ。

一方の金次は「なんで俺が……」なんて迷惑そうに息を吐いているが、そこは黙らせておく。こいつは色々と俺に貸しがある。金次も貸し1つが弁当箱を返却するだけで消化できるなら願つてもない話だろう。

俺は机の上に置かれた和布に包まれた重箱を取り、もう一度白雪さんに感謝の言葉を述べ、

「俺は今日も帰りが遅いから——頑張れよ」

と小声で白雪さんにつぶやく。

「——つ！ ありがとう、霧島くん！」

バツッと深く頭を下げてお礼を言つた白雪さんと、何のことだかわからないと首を傾げている金次に苦笑し、俺は部屋をあとにした。



白雪さんのお手製弁当を手に部屋から出た俺は、寮の近くにあるコンビニへと入つた。コンビニでサンドウイッチを3袋とアメリカンドッグに鳥のから揚げを1つずつ、肉まんとカレーマンを1つずつに、新発売のスライムまんを1つ、飲み物としてお茶とこれまた新発売のバブルスライム味の缶ジュースを1本ずつ購入した。

大きなビニール袋いっぱいに食料を購入した俺は武蔵高行きのバスに乗り込み、朝食を食べ始める。朝食のメニューはコンビニで購入したものだ。白雪さんからもらった弁当は昼飯に回し、午後から始まる専門科目のためのエネルギーに変える予定である。

ケチャップとマスタードをたっぷり付けたアメリカンドッグを頬張りながら窓の外を眺める。

レインボーブリッジの南。まるで海の上に浮んでいるような東京のビル群。ここ、東京武蔵高校は南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人工浮島^{メガフロート}の上にある。

学園島とあだ名されるだけのことはあり、人工浮島に存在している

ビル群のほとんどが武偵に何らかの関わりがあり、武偵の活動や教育に必要な設備が充実している。

景色を眺めながら朝食を食べ続けること十数分。武偵高校の校舎前に到着した。運賃を払い、バスから降りて校舎へと向う。

今日は始業式なので玄関前に設置された掲示板を見て、自分の新しいクラスを確認してから教室へと向つた。

自分の教室となる2—Aのドアを開け、「おはよー」と挨拶しながらなかへ入るが、まだ誰も着ていなかつたようで、自分の声だけが空しく響いた。

「…………」

小さく息を吐いて事前に決められている自分の席に鞄をかける。そしてまだ何も入れられていない自分用のロツカेに白雪さんからもらった弁当を入れて、席につく。コンビニのビニール袋を漁つて朝食の続きを始める。

サンドウイッチを食べ、肉まん、カレーまんと食べて、最後に残したスライムまんとバブルスライム味の缶ジュースに手を付ける。

おお、スライムまん、意外といけるな。皮はラムネ味で中身がストロベリーソースと見た目はグロいが味はいい。一方のバブルスライム味の缶ジュースは普通のソーダ味だつた。ラムネ味の肉まんとソーダ味の飲み物。味の変化が微妙すぎて合わないな。

…………。

……それにしても誰か登校して来ねえかなあ。広い教室にひとりはあまりにも寂しすぎる。

◆

寂しい朝食が終わり、生徒たちがぞろぞろと登校し始めた。無人だった教室ももうすでに半分近くの席が埋まっている。

「おお、今年も一緒のクラスだな、霧島」

「ああ、そうだな。おはよう、武藤」

俺に挨拶してきたのは、車両科の武藤 剛氣。身長190近いツン

むとう

ごうき

ツン頭の大男で、荒っぽい武偵高の生徒らしくノリのいい陽気な男だ。

武藤は席につくと、きよろきよろと周りを見回して、

「キンジの野郎も同じクラスだったと思うんだが、まだ着てねえのか？」

「ああ、着てないぞ。そろそろH.Rが始まるから着てもおかしくないんだがなあ……」

来る気配がない。もしかしたら朝食後のデザートと一緒に白雪さんも……なんてまさか。金次は女嫌いっていうか、常に女を避けてるし。そもそもあの朴念仁は白雪さんの好意にも気づいてないようすだった。そういう展開にはどう転んでもならないだろう。

——しかし、なんでもないのなら、なんで金次は遅れてるんだ？ 体調不良でもなさそうだつたし、何か他に理由でもあるのか？

「みんなー、おつはよー！」

教室全体に向けた元気のいい挨拶。む？ この声は……。

覚えるある声と挨拶に思考を中断して声のほうに顔を向けてみると、黒板側の入り口で手を振つてる女子生徒を発見した。

ツーサイドアップに結つたゆるい天然パーマの金髪に幼さが残る整つた顔立ち。武偵高の制服である純白のブラウスと、えんじいろ臙脂色の襟とスカートに、ひらひらとしたフリルをふんだんにあしらつてゴスロリっぽく改造した制服を着込んだあいつけ——峰みね理子りこ。

俺と同じ探偵科に所属している女子生徒で、明るい性格とアホっぽさからクラスのマスコットのような位置にいて、男女共にかなりの人気がある。

その人気は新しいクラスでも変わらないようで、理子の周りには人だかりができていた。

理子はひと通り挨拶を終えると俺の席へ近づいてきて、元気よく片手をあげて挨拶てくる。

「おはよー、レオポン！」

「おはよ、理子」

理子の手に軽く手を合わせてタッチする。ちなみに『レオポン』と

は理子がつけた俺のあだ名である。1年前から呼ばれているあだ名ではあるが、この前ゲーセンで同じ名前のぬいぐるみを見つけたので、急ぎ別のあるあだ名に改名して欲しいところである。

理子はにんまり笑い、笑顔でつぶやく。

「今年も一緒のクラスだね、レオポン」

「そうだな。今年もよろしく頼むよ、理子」

「うん、よろしくー！ 今年こそはレオポンにパソコンの使い方をマスターさせてあげるね！」

「……ああ、ありがと」

「せめて簡単なHPぐらい作れるようにならなきゃねー、ふふふ」

俺を見上げながら口元に手を当ててニシシと笑う理子。こいつとは去年の入学試験からの付き合いで、同居人の金次を除けば1番行動を共にしていた相手である。

お互に強襲科の入学試験で武偵高を受験し、2学期から探偵科に転科した俺とほぼ同時期に同じ探偵科に転科したという共通点があり、一部の趣味が合うことからよく話したり、クエストと一緒に受けたりする女子では1番仲がいい相手だ。

ちなみに武偵ランク——S↑Eまである武偵としての格付けは、理子が探偵科のAランクなのに対し、俺は下から3番目のCランクで、探偵科では理子に教えを請う側だつたりする。

現在はさつきの会話であつた通り、俺は理子からパソコンの使い方を習っている最中だ。……探偵科に転科する前から俺も自分のパソコンを持つてて、よくネットゲームしたり、ネットサーフィンしてたんだが、HPの作成やプログラムの解析、ハッキング等のやり方はさっぱりで、ネット中毒患者でパソコン機械に強い理子にパソコンの使い方を1から習つてるわけだ。もう半年近くもマンツーマンでレクチャーを受けてるのに未だにHPが作れないんだよなあ……。
——と。

現代機器にいまいち対応できていない自分の残念さに嘆いている
と、とうとう予鈴が鳴つてしまつた。

予鈴の音色を聞いて理子は自分の席に腰を下ろす。つーか、隣の席

だつたのかよ。

チャイムの音を聞いて今まで席を立つて談笑していた他のクラスメイトたちも次々に自分の席へとつき始めるが、

——金次の席は未だに空席だった。

窓の外を見てみるも、金次の姿はどこにもない。

……あいつ、一体どうしたんだ？



闇討ちや拳銃の誤射に気をつけ防弾制服を着用しようという注意以外、普通の学校とあまり変わらない始業式を終えて教室に戻つてみると、姿の見えなかつた金次が机に顔を埋めて座つていた。見るからに疲れてるから話しかけるなというオーラを体から放つていて、なにやら焦げ臭い。爆薬や硝煙の臭いもすることから、大方何かの事件にでも巻き込まれたんだろう。

クラスメイトたちも俺と同じく気づいたのだろう、机に突つ伏して金次を気遣い、最低限の挨拶だけして自分の席につく。そんななかでガサツの定評がある武藤だけはしつこく金次に話しかけていたが結局金次は何も話さず、たかまはがら担任の先生がやつてきてしまつた。

俺らの新しい担任は、高天原 ゆとり。武健高では珍しい、笑顔を絶やさない穏やかな性格した女性教諭で、年も22歳と若く、それでいて美人なので教師の中でかなり人気のある先生だ。

教壇に立つたゆとり先生は、自分の自己紹介と「1年間よろしくお願いします」という普通の挨拶を行なつたあと、

「うふふ。じゃあまずは去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらつちゃいますよー」

などと前置きしてクラスの自己紹介へと話を移す。

ゆとり先生の言葉を訊いて自分のことだと気づいたんだろう、後ろ側の席からひとりの生徒が立ち上がり、教壇へ向う。

堂々とした足取りで教壇へ向うのは、長いピンクブロンドの髪をツインテールに結わせた幼児体型の女子生徒——

「——神埼・H・アリア。あいつとも同じクラスだつたのか」

強襲科のSランク武偵であり、去年の3学期にロンドン武偵局から編入してきた99%という脅威の検挙率を誇る問題児、神埼・H・アリアだつた。

あることから俺は彼女に目を付けられていて、自由履修で強襲科の授業に出ると毎回のようにヤツは俺に絡んできては模擬戦しろと命令してくるので、正直言うと同じクラスにはなりたくないがつたヤツだ。見つかっては面倒なので、周りの気配と同化させて自分の存在を希薄にする。これで気づかれにくくなるはずだが……もう遅いか?

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

——つ！　自己紹介もまだだというのに、そう言つてアリアが指を指した場所は——

青い顔で教壇を、教壇の前に立つてゐるアリアを見ていた遠山金次だつた。

アリアの発言にクラスの生徒たちは一瞬絶句して、それから一斉に金次へと視線を向け、わあーっ！　と一斉に歓声を上がつた。

教室を震わせるような大歓声を聞いてずりつとイスから転げ落ちる金次。

俺は気配を同化させて自分の存在を隠したまま、内心で安堵する。よかつた、俺じやなくて。どうやらアリアには同じクラスだつてことはまだバレてないようだ。

「な、なんでだよ……！」

わけがわからないと金次がつぶやく。アリアに向つて警戒するような視線を送るが、

「よ……良かつたなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！　先生！　オレ、転入生さんと席代わりますよ！」

金次の右隣の席に座つていた武藤が、選挙に当選した代議士の秘書のようすに金次の手を握り、ブンブンと振りながら席から立ち上がつた。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤くん、席を代わつてあげて」

ゆとり先生は何だか嬉しそうにアリアと金次を交互に見てから、武藤の提案に即OKでした。

わーわー。ぱちぱち。

まるで漫画やドラマのような展開にクラスの連中が拍手喝采をする。おめでとー、金次。おめでとー。アリアはものすぐしく面倒くさいぞ。がんばれー。

「キンジ、これ。さつきのベルト」

クラスの皆と一緒になつて2人を祝福していると、アリアが金次に向つてベルトを放り投げて渡していた。

なぜアリアが金次のベルトなんて持つてるんだ？

そんな疑問を感じていると、

「理子分かつた！ 分かつちやつた！ ——これ、フラグばつきばきに立つてるよ！」

俺の右隣で、金次の左隣の席でもある理子が、ガタン！ と席を立つた。おいバカやめろっ！ 俺の存在が気づかれるだろ！

「キーくん、ベルトしてない！ そしてそのベルトをツインテールさんが持つてた！ これ、謎でしょ謎でしょ!? でも理子には推理できただ！ できちやつた！」

……理子、たぶんその推理はこいつ相手には言わないほうがいいぞー……って、今さら遅いか。

理子は変な踊りを踊りながら推理を披露し始める。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！ そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！ つまり2人は——熱い熱い、恋愛の真つ中最中なんだよ！」

理子が教室中に響く声でぶち上げた能天気な推理を聞いて、今でも大盛り上がりだつたクラスが、さらに盛り上がる。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!」「影の薄いやツだと思つてたのに!」「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを!」「キンジ×レオンはどうするのよ!」「フケツ！」

新学期なのに、息が合いすぎだろお前ら。さすがバカの吹き溜まり、武僧高だな。皆バカばつかだ。

あと、俺と金次をかけた女子生徒！　金次はともかく、俺にはそんな趣味なんてねえよ！　ふざけんな！

「お、お前らなあ……」

盛り上がりまくるクラスメイトたちに金次が呆れて机に突つ伏したとき――

ぎゅぎゅん！

鳴り響いた2連発の銃声が、クラスを一気に凍り付かせた。

――顔を真っ赤にしたアリアが、2丁拳銃を抜き様に撃つたのである。

「れ、恋愛だなんて……くつだらない！」

翼のように広げたその両腕の先には、左右の壁に1発ずつ穴が空いていた。

チンチンチリーン。

拳銃から排出された空薬莢が床に落ちて、静けさをさらに際立たせる。

理子はおかしな踊りを踊っていた途中だつたらしく、変なポーズで固まっていた。そのままの体勢で、ず、ずず、と着席する。

……武偵高では、射撃場以外での発砲は『必要以上しないこと』となっている。つまり、してもいい。銃撃戦が日常茶飯事の武偵を目指す武偵高の生徒だからこそ、発砲に対する感覚を軍人並みに麻痺させておく必要があるからだ。

しかし……。

新学期の自己紹介でいきなり発砲したのは、コイツが初めてだろう。

「全員覚えておきなさい！　そういうバカなことを言うヤツには……」

それが、神埼・H・アリアが新しいクラス……いや、武偵高のみんなに発した――最初のセリフだった。

「――風穴あけるわよ！」

……理子、無言でこつちを見るな。俺にはどうすることも出来ないぞ。

第1話

自分の存在をアリアに気づかることなく、何とか午前の授業を終わらせることができた。

現在はもう昼休みの時間となつており、怒涛の質問責めにあい始めた金次に同情しつつ、俺は素早くロツカーから楽しみにしていた白雪さんの手作り弁当を取り出し、学食へと向う。

学食のおばちゃんにカツ丼を大盛りで頼み、料理を受け取つてから空いているテーブルに座る。弁当を包む和布のなかに入れられた箸箱から箸を取り出して、まずはカツ丼を食べ始める。

うむ……。さすが武偵高が誇る学食だ。量も味も申し分ない。

最後までカツ丼を味わい尽くし、食器を片付ける。もう一度テーブルに戻り、白雪さんの弁當に手を付ける。

「さあ、いよいよだな」

本日のメインディッシュ、白雪さん特製弁当！

元々は金次のために作つた弁当のついでに作られた品であるのだが、それでも美少女の手作り弁当には変わりないっ！

ワクワクしながら蒔絵まきえつきのフタを開けると、キラキラと輝く高級食材たちが……！　ああっ、すげー美味そう！　思わず涎が出ちまう。

今朝金次が食べてていたものと全く同じメニューの弁当であること、白雪さんの優しさを感じる。キミはほんといい子だなあ！

弁当に向つて改めて手を合わせ、白雪さんと高級食材とまたまた白雪さんに感謝して「いただきます」と頭を下げる。

ふんわり柔らかそうな玉子焼きを箸で掴んで口へ運ぶ。

「ああ……うめえええ……」

塩加減や焼加減が絶妙すぎる。こんな玉子焼き食べたら他の玉子焼きなんて食べれなくなるんじやないかって心配になるぐらい、美味い。

「おお、霧島じやねえか。ずいぶんとまあ、美味そうな弁当だな」「む？　むほうか」

学食のメニューにある『大盛りカレー』を抱えた武藤が話しかけてきながら、空席だった正面の席に腰掛けてきた。

「霧島君。僕もいいかな？」

武藤に続けて眼の覚めるようなイケメン面の男が、話しかけてきた。

ニコツ。

と優男スマイルをしたコイツは、強襲科の不知火しらぬい りょう亮。

去年の3学期まで強襲科にいた金次とよくバーティを組んでいたクラスメイトだ。

武偵ランクはA。このAにも色々あるのだが、不知火はバランスがいい。格闘・ナイフ・拳銃、どれも信頼がおける。拳銃はLレーAザMサイトつきのSOCOMソーコムとこちらも信頼性抜群だ。

不知火はクラブサンドを乗せたトレイをテーブルに置き、俺の隣の席に腰を下ろす。

……ちなみにこの不知火だが、かなりモテる。

とんでもないイケメンなことはもちろん、武偵高には珍しい人格者だからな。女子にかなりの人気がある。……一部の女子や後輩の女子にしか人気がない（この場合付きまとわれるという意味で）俺には何とも羨ましいヤツなんだが――

不知火ってカノジョとか、そういうのはいらないらしいんだよな。

俺の同居人の金次も、白雪さんや後輩で戦兄妹の風魔つていう美少女たちに好かれてるっぽいのに、無反応どころか異性全般を避けてい るような素振りを見せるし……。

まさか、ホモじやねえだろうな？

正直、異性を避け続ける金次に関しては前々から疑っていたが、ここにきて新たに不知火にもホモ疑惑が……。よし、これからこいつにも気をつけよう。どうか杞憂であつてくれ。

「おまえが弁当だなんて珍しいな。しかも、めちゃくちや美味そ うじやねえか」

「ん？ まあな」

武藤の声に思考を中断された俺は、不知火&金次に浮かび上がつて

いるホモ疑惑を一旦忘れることにして食事を再開することにした。

ピンと立つてゐる米を箸で掴み、感謝しながら食べる。ああ、美味いいい……。コンビニ弁当の米とはまるでものが違う。

「手作りみたいだね。誰かに作つてもらつたのかい？」

不知火の言葉に、武藤が弁当を見ながら推理を始める。

「見るからに高級そうな食材が使われてるとこを見ると……これ用意したの、去年おまえの戦兄妹だつたあのお嬢さまだろ？　あいつ、お前にだけは懷いてるつぽかつたからなー」

「勝手に確信してるとこ悪いが、はずれだよ」

そもそもあのお嬢さまは弁当を作つて渡すタイプではなく、高級店に連れて行つて一緒に食べることを選ぶタイプだ。

「じゃあ、火野……はねえな。おまえが面倒見てた後輩の女子ではないとする、同級生が年上……。かといって年上に親しい女子がいるなんて聞いたことねえし、あの理子がそんな弁当作るわけないからなあ……」

むむむ……と考へる武藤。結局この弁当を作成した人間が思い浮かばず、両手を上げて降参してきた。諦めが早いな。それでは立派な探偵にはなれないぞ。まあ、運転が主な仕事の車両科ならあまり関係ないか。「乗り物ならなんでも操縦できるぜ」が売りの車両科のAランク武僧だし。

俺はお茶を一口飲んでから、教えてやつた。

「白雪さんだよ、これ作つたの」

「なんだ、白雪さんが作つた弁当だつたのか。通りで美味そ……ん？　どうし——

「白雪さんが作つた弁当だとおおおおお！」

「うおつ！　ど、どうしたんだよ、武藤。いきなり大声なんか出して」「てめえ……！」

怒りの形相を浮べた武藤が、いきなり両手で俺の胸ぐらに掴みつかつてしまがつた！

胸ぐらへ伸ばされる武藤の手を、俺はほとんど無意識で掴んで捻り上げる。

「あだだだだだ……!? い、いてえ!? い、痛いから早く……離してくれ!」

「ああ、すまん。勝手に体が動いちまつた」

パツと手を離す。

「けど、いきなり襲い掛かってきたおまえが元々悪いんだからな」
腕を折られなかつただけよかつたと思え。

「ぐつ……それはすまん。——つて、それよりなんでおまえが白雪さんの弁当食つてんだよ!」

「説明してやるからこれ以上大声を出さな、武藤。周りに迷惑だ。この弁当は今朝白雪さんから貰つたもので、キンジに渡すついでに渡されたモノなんだよ。——まつ、同居人の特権みたいなものだな」

そう言つて煮物を食べる。どれも美味しいな、ちくしょー。

俺の説明を訊いて納得したのか武藤は黙り、俺の弁当を見て——がん見してゐる。

「……欲しいのか?」

「——つ! いいのか!?

うわあ……すげえ食いつきの良さ。ほぼ一瞬で反応しやがつたよ、こいつ。

「しかし、ただではやれないな。白雪さんお手製の弁当以前に俺の昼飯でもあるから、おかげ1品の代わりに……カレージやおかげ交換もできないか。まあ、今回は諦め——」

「ちよつと待て! これをやる! 俺が食後のデザートに用意していいた武蔵高売店1番人気のデザート、ロイヤルプリン(430円)をやるから! 1品! せめてひと口だけでも食わせてくれ! 賴むツ!

!」

ビニール袋から取り出してテーブルにドドンと置く武藤。その必死さに少し引く。どんだけ食べたいんだよ? いや、絵に描いたような優等生で大和撫子な星伽白雪さんの手製弁当だからな。欲しがつて当然か。学校に存在してゐる白雪さんのファンならおかげ1品に数万円ぐらい出しそうだし。

「わかつたよ、武藤。どれか1品な」

「恩に切るぜ、親友！」

涙でも流さんばかりの勢いで銀鮭を攫つていく武藤。遠慮ねえな、おい。メインじゃねえか。

「不知火は？ おまえも食うか？」

「いいのかい？」

「ああ。クラブサンドじやおかげ交換はできねえから、あとで飲み物でも奢つてくれ」

「わかつたよ。じゃあ、玉子焼きをもらつていいかな？」

「おう」

「ありがと」

ニコツとイケメンスマイルを浮べる不知火亮。武藤とは違い、取る前に確認するんどういったマメなところが女子に人気がある理由なんだろう。

「うつんめええええ！」

「ほんとに美味しいね」

叫ぶ武藤と笑顔を浮べて静かにつぶやく不知火。リアクションも対照的だなあ。

そういうや金次のヤツはどうしてんだろう？ まだ質問責めにでもあつてんのかな？ 昼休みが終わつちまうぞ。

「霧島……いや、レオン！ もう1品！ 今度昼飯奢るからもう1品恵んでくれ、頼む！」

わかつたからこれ以上叫ぶな、武藤。



武偵高は午後からそれぞれが選択した科目に分かれ、訓練や授業、クエストなどを受けたりして進級や卒業のための単位を稼ぐ。

俺は去年の2学期から強襲科から探偵科に転科しているため、本来であれば探偵科用の施設に行かなくてはいけないのだが、

「ねえねえ、レオポンレオポン！」

「どうした、理子？」

「これ！ このクエスト受けよーよ！」

理子がA4サイズのプリントを両手で持つて見せてくる。

「えーっと、なになに？ ……ああ。この前逮捕された暴力団の残党狩りか。所属していた組員の洗い出しと強襲逮捕で、募集人数は20名。期限は今月いっぱいまで。……おい理子、おまえなんづークエストを持ってきてんだよ？ 推奨武僧ランクこそA～Cつて低いけど、かなり面倒臭いクエストじやねえか」

「でもでも、その代わり報酬はいいでしょ！」

「まあ、確かにそうみたいだけどよ……」

このクエストで狩らなきやいけない残党つて、かなりメンバーがいたような気がするんだよなあ。

「理子とレオポンが組めばさいきよーなんだからまったく問題ないしそう！」

「問題ありまくりだ。2人でこなせるわけないだろ、こんなクエスト」「もー、いくら理子りんでも2人だけでやろうなんて考えてないよおー。他に何名か集めるつもりだし、作戦も考へてるからさ。理子りんと一緒に受けよーよおー。ね？ お願ひだよお、レオポン」

駄々っ子のように体を揺すつてくる理子。おいコラ、止める。胸がら、胸が揺れたり当たつたりして困っちゃうじゃないか。

「ああもう、わかつた。わかつたから。受けてやるよ、そのクエスト」「ほんとに!? わーい！ ありがとーレオポン。愛してるぜ、こんちくしょー！」

「はいはい。俺も愛してる愛してる」

「ふふつ、そうしそーあいだね、理子りんたち」

ニッコリ笑つてぐつと拳を突き出してくる理子。……おいコラ、人差し指と中指の間に親指挟むな。

呆れる俺を置いて、理子はその場でくるりとターンする。ゴスロリに改造した制服のスカートの裾が捲れてパンツが見えそうになるが、見えない。……こいつ、計算でやつてやがる!?

「じゃあ理子りんは教務科に提出してくるね！ レオポンは前衛、強

襲担当だからよつろしくー！」

「はいはい、りょーかい」

うなずいた俺に理子はもう一度微笑むと、アラレちゃんのよう両手を広げ、「キーン」と言いながら理子は教室から出て行つた。
——さてと、じゃあ俺は自由履修の申請して強襲科の訓練施設に向うかな。

自由履修を行なうための申請書を書いたり、強襲科の訓練で使用する弾薬や武器を用意するのは時間がかかるが、俺は度々自由履修を利⽤して強襲科で訓練してるので、申請書を書き溜めがある。武器に関しても弾薬以外問題なしだ。

丁度探偵科の授業を受けに行こうとしていた、いつもよりだいぶ疲れ顔の金次に白雪さんの弁当箱を渡し、俺は強襲科の訓練施設にむか……おい、お前も俺に話があるのかよ？

「なあ、レオン。強襲科に行くなら神埼についてちょっと調べてきてくれないか？」

女のことを調べてくれという、女嫌いだと自称し、公言している金次には珍しい頼み事だつた。

「なんだ、キンジ。武藤が言つてたみたいに春でもきたのか？」

「んなわけないだろ。俺は、女嫌いなんだから。これは色恋沙汰とは全くの別件だ」

「……そうかい」

ほんと消えねえな、こいつのホモ疑惑……。むしろ1年前より益々強くなつてんじやねえか？ 夜中俺の尻を襲つてこないか心配だぜまつたくよお……。

「わかつた、調べといでやるよ。資料にして今週までにはまとめて渡してやるから」

「別に資料にしなくても口答で十分だぞ？」

「ま、俺もそれで十分だと思うが、今の俺は探偵科で勉強してるからな。一度パソコンの使つて調べて資料作成みたいなことしてみたかつたんだよ」

「……勉強熱心なヤツだな。素直に感心するよ」

「そういうおまえは不真面目だけどな」

「…………」

俺に言われ、苦い顔で黙る金次。金次は、去年までは強襲科の生徒として一応眞面目に取り組んでいたヤツだったが、去年の3学期に起つた事件がキツカケで武偵を志す気持ちをなくしてしまっている。気持ちは硬いようで、すでに武偵高から普通の学校に転校するための書類を書いて提出を待てるぐらいだ。

まつ、辞めるのは人の勝手なので俺は引きとめたり何か言つたりしないけど。

金次が武偵を辞めたがる理由も、気持ちも。俺自身、わからなくてないんだから。



教務科に自由履修の申請書類を提出して、やつてきたのは強襲科の訓練施設。

体育館のようなドーム型の屋根が特徴的な施設で、ここでは主に格闘術やナイフ術、模擬戦に加えて筋力トレーニングなどが行なわれている。この建物の近くには同じく強襲科の施設である射撃場や実戦形式の模擬戦ができるトレーニングルームがあり、その他にも様々な訓練施設が隣接している。

俺と同じように強襲科の訓練場に向う人の波に紛れてなかへ入る。
「おう、浅井！　まだ死んでなかつたのか！」
「おまえこそよく生きてるな茂山あー！　てつきりもう死んでることかと思つてたぜ！」

「おまえより先に俺が死ぬかよ！　知つてか？　ここではマヌケから先に死んでいくんだぜ！」

「だつたら、俺らより倉持が死ぬな！」

「何言つてやがる！　おまえらのほうがマヌケなんだから死ぬのはおまえらだろうが！」

……ふむ。さすがは強襲科の生徒たち。いつもながら挨拶からす

でに物騒だ。いたるところで死ね死ね言い合つてゐる。

まあ、卒業時生存率97、1%の『明日無き学科』とも呼ばれてる強襲科の生徒だからな。死亡フラグに死亡フラグを重ねることで、生存フラグに変えようとしてるんだろう。

俺もソレにあやかろうと見知った顔を見つけ、挨拶をする。

「おう不知火いー、まだ死んでなかつたのか、おまえ」

「え？ ああ、うん。霧島君も死んでなかつたんだね」

一瞬首を傾げたあと、すぐに強襲科特有の挨拶だと理解して笑顔で言い返してくれる不知火君。……なんだろう、いつもは嬉しい気遣いが今は逆に辛い。

「霧島君は、今日は強襲科なんだね」

「さつき教室で理子からクエストに誘われてな。強襲を担当することになつたから訓練しに着たんだよ」

「まつたく……。アイツのやることはいつも唐突すぎる。

「へえ、そなんだ。そいえば、霧島君はよく峰さんと一緒にクエストを受けているけど、2人は付き合つているのかい？」

「いや、別に付き合つてないぞ」

「そうなのかい？」

俺が否定すると、意外だと言わんばかりの表情を浮べる不知火。「まつ、前衛と後衛の相性がいいからクエストはよく一緒に受けてるけどな。付き合つたりとかはないから」

そう言つて俺はS&W M19、通称——コンバット・マグナムをホルスターから引き抜き、改めて弾薬を確認する。

安全装置は大丈夫。弾薬は……足りなくなつたら購買で買えばいいだろう。

「ちよつとレオン！」

突然背後から特徴的なアニメ声で名前を呼ばれた。この声は……。
「神埼か……」

声のほうを振り返ると、新学期始めの自己紹介で発砲するという珍事を起した神埼・H・アリアが立つていた。

「あたしのことは『アリア』って呼ぶよう言つたでしょ！」

怒りながら、なぜか偉そうに言つてくるアリア。

「じゃあ、アリア。俺に何か用でもあるのか？」

「あんた、去年の入学試験でキンジと戦つたんですってね？」

「…………。まあな。戦つたぞ」

「そのときのキンジはどんな感じだつた？　試験の結果は？　使用してる武器や特異な戦術……ああもうつ、とにかくあんたの知つてること全部教えなさい！」

いきなりなんなんだよ……。突然話しかけてきたかと思えば怒鳴り、怒鳴つたかとおもえばいきなり話を振つてきて、金次のことを訊ねたかと思えば、突然切れて命令していく。高2で16歳なのに、オツムは見かけ通りのお子様だなあ。情緒不安定な上に説明不足とか……。相変わらずせつかちを絵に書いたようなキヤラだ。

「話してやるから少しは落ち着けよ、アリア」

俺はなるべく優しい口調で言う。アリアは見て分かるとおりものすごく怒りっぽいので、逆に怒り返せば面倒になる。アリアと会話がしたい場合は、まずは落ち着かせることから始めなくてはいけないのだ。

ふんつと鼻を鳴らしてそっぽを向くアリア。

「早く教えなさいよ」

態度は変わらず偉そうで少々鼻につくが、小さな子供を相手にしていると思えば怒る気も失せる。

「じゃあ、まず名前から順に説明するぞ？　——遠山　金次、17歳。入学試験で強襲科のSランクを取得し、1年の3学期に探偵科へと転科。探偵科に転科してからは進級や進学に必要な単位しか取得しないため、探偵科として最低のEランク扱いとなつてている。好んで使用している武器はマットシルバーのベレッタ・M92Fとバタフライナイフだ」

「……他には？」

「他に、か……。そうだな。将来性はともかく、普段はSランクを取得できるような実力者には見えないんだが。たまに……あいつは別人のように強くなることがある」

「——っ！」

赤紫色の瞳を大きくするアリア。どうやら強くなつた金次を見たらしい。これは……上手くいけば俺からアリアを離せるか？ 自由履修でも訓練に付き合つてゐるのに、強襲科に転科しなおしてまで毎日自分の訓練に付き合つて付きまとわれて、少し迷惑してたんだよな。

俺は日本刀の確認をするように見せかけながら、平然と話を続ける。

「別人になつたあいつは強いぞ。なにせ、俺でも倒しきれなかつたらな」

「——っ！ 嘘……。キンジってそんなに強いの？」

赤紫色の瞳を大きくし、とても信じられないと訊いてくるアリア。クククク……上手くいってるようだな。

思わずニヤけそうになる顔を引き締め、俺はゆっくりとうなずく。そんな俺を見てアリアは黙り込み、しばらく俯いて考えるような素振りを見せると――

「ねえ、レオン。キンジの家がどこにあるか知つてる？」

「あ？ それなら探偵科の寮にあるぞ」

「部屋の場所は？」

「そこは尾行でもして自分で調べろよ。武偵なんだからさ」

「うつ……。わかつたわよ。……あと、教えてくれて、あ、ありがと」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながらお礼を言つたアリア。普段からそれが出来ていれば、周りから敬遠されなくて済むんだろうがな。

アリアはさつそく金次の尾行に向うつもりなのか、「じゃあね！」と言ひ残してアリアは訓練場から風のように走り去つていく。相変わらずの猪娘だ。前しか見てない。

俺は風に揺れるピンクブロンドのツインテールを見送りながら、「……計画通り！」

デスノートの主人公ばかりに片手を顔にあて、悪い笑顔でつぶやく。俺の情報提供によつてアリアの意識は完全に金次へ向いたことだ

ろう！ これでもう強襲科に来る度に付きまとわれて模擬戦を申し込まれるなんてこともなくなる、はずだ！

「霧島君」

「なんだ、不知火」

やつとあのチビから解放されて喜んでるところなんだから邪魔を

「遠山君の部屋つて、霧島君の部屋でもあるんじやなかつた？」

「……あ」

そ、そうだつた。今年の初めからあいつ、強襲科から探偵科に移つてまた俺と同室になつたんだつた！

「忘れてたのかい？」

「……忘れてた。け、けどまあ、いくらアリアだからつて尾行して部屋知つたその日に突撃なんてことはしないだろ？ キンジに追い返されるかもしれないんだしさ」

「でも、あのアリアさんだよ？」

「そ、それを言われると……」

マジで何を仕出かすか予想がつかない。さすがのアリアでもドアを爆破したり、発砲して乱射して部屋を荒らしたりなんてことはしないよな？

……。

……不安だ。かなり不安だ。しかし、だからといつてここで俺が出て行つて止めるのも無理だ。そんなことをすればせつかく金次に向つていた意識がまたこちらに向けられてしまふ可能性だつてあるのだから。

どうしよう……。今日はホテルにでも泊まるか？

「レオン先輩」

「ホテルか……。でもキンジから頼まれた調べ物あるし——」

「レオン先輩つ」

声に気づいて振り返る。

「……む？ ああ、麗か」^{うつく}

ふんわりカールがかかつた長い金髪に、細く整えられた眉。猫みた

いなツリ目と長いまつ毛。唇には赤い口紅が塗られており、おまけにスタイルもずば抜けてるという、文句なしの美少女、高千穂 麗が立っていた。

麗は1年後輩で強襲科を専攻している強襲科のAランク武僧。こいつは去年、戦徒^{アミカ}と呼ばれる年上が年下に戦闘技術や武僧としての心得をマンツーマンで教え込むという制度を利用し、俺の戦妹だつた後輩だつた。

麗はいつも持つてゐる扇子を腹の前でパタパタと開いたり閉じたりしながら、こちらを見上げてくる。……普段のこいつは誰に対しても強気な振る舞いをしてゐるんだが、今は見るからにソワソワとしていて落ち着きの無い。

「どうしたんだ？」

「れ、レオン先輩。以前、戦徒期間^{アミカ}が終わるときに 私^{わたし}と結んだ約束は覚えておられますか？」

「約束？」

戦友契約が終わるときの約束ねえ……。ああ、思い出した。戦徒契約が終わつても、暇なときは強襲科の訓練に付き合つて約束してたな。

「ま、まさか覚えていらつしやらないんですか？」

扇子をギュッと握りながら不安げに訊いてくる麗。普段は本当に、アリアと同じぐらい偉そうなのだが、なぜか今は弱々しい。

そんな麗の姿に俺は戦徒契約を結んでいた頃、よく手を焼かされたことを思い出し、ちよつとだけ意地悪をしたくなつた。顎に手を当てて麗から視線をはず——

「なんの約束だつたか……ああ、すまん。嘘だ。ちゃんと覚えてるよ。強襲の訓練つけるんだつたな」

——さすにうなづく。

「覚えていてくださつたんですね！」

パアアつと明るい表情を浮かべる麗。

「もちろんだろ。今日は何の訓練がしたいんだ？」

「では射撃でお願いします！」

「わかつた。じやあ、強襲科の射撃場に向うぞ」

「はい！」

いい返事を返して俺のあとに続く麗。

——ほら、これでいいだろ？

意地悪するの止めたんだから、もう物陰から拳銃向けてくるなよ、
麗の取り巻き隊筆頭の双子コンビたちよ。



強襲科Aランク武偵で元戦妹だつた高千穂 麗を連れて、強襲科専用の射撃訓練施設へ向つた俺だが、実を言うともうこいつに教えることなんてほとんど無かつたりする。

不知火と同じく、麗は総合的なバランスの良さで強襲科でAランクを取得しているし、今さら俺がマンツーマンで教える必要はないな……、「レオン先輩。今すぐ射撃レーンを開けさせますので、しばしお待ちを」

「おい、ちょっと待て麗」

「はい？ どうかなさいましたか？」

「一応聞いておくが、どんな方法で開けさせるつもりだ？」

「もちろん、コレを使つてです」

万札の札束を手に微笑む麗。『それがどうかしましたか？』とでも聞きたそうだ。……教えること、まだあつたな。

ため息を吐きつつ、麗に言う。

「麗。おまえが戦徒アミカだつたときにも注意していたが、なるべく金の力には頼るな」

「で、ですが先輩。私は今までお金以外の力はあまり……」

不安げな表情で見上げてくる麗。俺は麗の頭に手を置いてポンポンと優しく撫でる。そして、幼い子供に言い聞かせるようにつぶやく。

「これまでおまえが金の力を上手く使って自分の生活を築いていたことは知ってる。——けどな。いつまでも金の力ばかり頼っていたら

ダメだろ？ 金の力ばかり頼っていて、いざ金の力で解決できない状況に陥つた場合、今みたいに戸惑つていたら何もかも手遅れになるかもしれないし、この国のことわざにもある通り、『金の切れ目は縁の切れ目』なんて状況になつた場合、困るのはお前自身なんだから。なるべくいいから、金の力以外の方法で解決することを覚えよう、な？」

「……はい」

俺の話を分かつてくれたか、素直にうなずく麗。

自分より格下だと定めた相手には見下した態度を取つて偉ぶる麗だが、年上や自分より上と定めた相手には素直で礼儀正しい子だつたりする。

麗の頭から手をどけてやると、麗は深呼吸を2回繰り返し、射撃レーンに視線を向ける。端から端まで見て——キラツと目を光らせる。

ハイヒールで床を鳴らしながら、まるでランウェイを歩くファッショントモデルのような優雅さと気品を漂わせながら、使用されている射撃レーンのひとつに向かう。丁度弾切れで新しいマガジンを取り出そうとしていた女子生徒に向つて——、

「そこのあなた。私にその場所をお譲りなさい」

愛銃であるスターム・ルガーのスーパーレッドホークを向けながら麗はそう言い放つた。

「……え？ ええっ!? い、いきなりなんなんですか⁈」

案の定、射撃訓練中に後ろから突然銃をつきつけられた女子生徒は麗に困惑している。取り出したマガジンを銃に装填することも忘れ、銃を両手で抱きしめて震えていた。

そんな女子生徒の姿に麗のもうひとつ悪クセが出てしまつたようだ、

「あら？ 聞えなかつたの？ 私は、その場所から『どけ』と命令したのよ」

「な、なんで？ ここはあたしが使つてる場所で……」

「そんなこと知つてるわ」

「だつたら他の場所でも……。今はあたしが訓練してゐるんだから」

「訓練？」 一体なんの訓練をしていると言うのかしら？ 少なくとも
私には壁に向つて撃つているようになか見えたわ。もしかして
的に当たらない訓練をしていたのかしら？」

「う、うううう……」

ぎゅっと拳銃を握りしめて俯く女子生徒。麗はそんな女子生徒の
ようすを上から見下ろし、ニヤニヤと、何ともサディックな笑み
を浮かべている。

はあ……。

「おい、麗」

「——はっ！ セ、先輩っ！ も、もう少しお待ちください！ 今すぐ
この子をどかして——」

もう一度女子生徒に愛銃のスーパー・レッドホークを向けようとしたところで止める。親猫が小猫の首根っこを噛んで持上げるように、首の後ろの襟を掴んで自分の近くに引き寄せる。

「なんで金以外の方法が脅迫になるんだ？ まあ、強襲科の生徒らしきけどよ。せめてそれは最後の手段にしどけ」「す、すみません……」

しゅんとして謝る麗。わかつたら、その物騒な拳銃はしまつてくれ。

「あ！ レオン先輩！」

射撃訓練中に突然麗に絡まれたかわいそうな女子生徒が俺の存在に気づいたようだ。顔を上げてこちらを見て——

「ああ、間宮だつたか」

高1にして低身長（しかもアリアより低い）で幼児体型。茶髪を白いリボンでツインテールに結つた、強襲科所属のEランク武僧、間宮あかり。

あー……こいつが麗に絡まれた理由、わかっちゃったよ。麗の好みにぴったりだもんな、こいつって。

「すまないな、間宮。このおバカが迷惑かけちまつて」「おバカ!? 先輩つ、私はおバカなんかじゃ……」

「いや、おまえはおバカだ。いきなり銃をつき付けて脅迫するような

ヤツをおバカと呼ばないで他になんと呼ぶんだ?」

むしろ『お』を付けてやつてるところに感謝して欲しいところだ。

「うつ……」

言葉につまる麗。まつたく、こいつは……。アリアに似てクセのある思考回路と性格を除けば文句なしのAランクなんだけどなあ。

「ほんとにすまなかつたな、間宮」

「え……あ、はい。あたしもあんまり気にしてないから大丈夫です」

「そうか。そう言つてもらえると俺も助かるよ」

麗の襟を掴んでいないほうの手で間宮の頭を撫でる。相変わらず小学生みたいに小さいから頭を撫でやすいな。

「うー……子供扱いはやめてくださいよ、先輩」

文句を言いつつも頭を好きに撫でられる間宮。俺は撫でるとき、毎回こいつのアンテナみたいなアホ毛を直そうとするが、間宮のアホ毛は形状記憶合金でも出来ているかのように一瞬で元に戻る。これをむしり取つたら闇落ちでもするんだろうか?

ああ、それと間宮。子供扱いされたくないならもう少し色々発育させような。今のままじや小学生にしか見えないから。……コラ、麗。気づかれないと思って拳銃に武偵弾をつめるな。1発百数十万の破裂弾なんて、撃たれ相手はトマトにみたいになつて即死するぞ。

「レオン先輩、今日は^{強襲科}こつちなんですか?」

「ああ。今月いっぱいまでのクエストで強襲を担当することになつたからな。クエストが終わるまでは強襲科で訓練を受けるつもりなんだ」

「そうなんですか? だつたらあの、また訓練に……」

間宮が言おうとしたところで、麗が叫ぶ。

「何を言つてるんですか、あなたは! 先輩は私のです! そもそも射撃訓練で碌に当てることもできていないのに何をおっしゃつてるんだか」

扇子を開いて口元を覆い隠し、見下した視線で上から見下ろす麗。様になつてんな、おい。

「つーか、誰がおまえのだよ?」

「それは当然霧島レオン先輩がですわ。何せ私の戦兄なんですから！」

背を後ろに反らし、バン！　と言い放つ麗。続けて『おー、ほつほつほつほつ』とでも高笑いしそうないきおいだ。

「お兄さま!?　この人ってレオン先輩の妹なんですか⁈」

ビックリしてマガジンを落とす間宮。俺は床に落ちたマガジンを拾つて渡してやりながら言う。

「落ち着け間宮。こいつが言つてるのはあくまで戦友契約上での話だ。俺に妹は最初から存在してねえよ」

「ええつ!?　先輩の戦妹つてこの人だつたんですか⁈」

……なんでまた驚いてんだよ、間宮。まあ、こいつは去年の途中から編入してきた元一般中出身者だからな。戦妹がいると知つても誰かは知らなかつたんだろうが……

俺と麗に交互に見ながら、顔を引きつらせるな。

言いたいことがあるなら聞いてやるから。

とりあえず、このままでは麗の印象是最悪以外のなにものでもなくなるので、元戦兄としてフォローをしておく。

「改めて紹介すると、こいつはお前と同じ高1で強襲科を専攻している高千穂 麗。見ての通り性格にクセがあるヤツなんだが、根はいいやツだからできれば仲良くしてやってくれ」

「あたしと同じ1年……」

……間宮の視線が麗の体に向かれてるがそこは気づかないフリをしよう。世界の理不尽に負けるな、間宮。頑張れ、間宮。今は30cm以上の差があるが、いつかは縮まってくれるさ。あ、牛乳飲んでも大きくならないから気をつけろよ。飲みすぎは腹壊すからな。「麗。こいつは間宮　あかり。元一般中出身で去年編入してきた強襲科を専攻してる武僧だ。見てくれば幼児……いや、小さいがこれでも立派な16歳だ。インターの生徒じやないから間違えるなよ」

「ええ。わかりましたわ」

わざわざ胸を強調させてうなづくな。谷間を見せ付けてんじやねえよ。間宮がかわいそだろがつ。

「……先輩？ その紹介の仕方は酷いんじゃないですか？」

「ゴゴゴゴゴゴ……」

ニコニコ笑顔を浮べたまま、背後から怒氣を放つ間宮。……ふむ。豊満なスタイルを見せ付ける麗の態度もあれだが、確かに俺の紹介も悪かつたな。

「すまん。今度好きだけ奢つてやるから許してくれ」

「えっ！ ほんとですか!? なら許しからやります！」

わーい、おどりだー！ なんて大喜びして間宮は飛び跳ねる。毎回思うが諜報科の風魔並みに安いヤツだよな、お前つて。

「フフフフ……」

……おい、麗。そのサディステックな笑顔は止める。そのうちR指定されるぞ。

間宮の容姿や子供のような思考回路に高千穂 麗の悪癖、チビ専のサディストが誘発しやがったな。

間宮あー、これから麗には気をつけろよ。陰険なイジメこそしないが、正面からなら堂々とイジメてくるからな、こいつは。

「じゃあ、俺たちはこれで行くな。射撃訓練の邪魔して悪かつた。訓練には今度付き合つてやるから」

「はい！ ありがとうございます」

ニッコリ笑顔で頭を下げる、間宮。1回メシを奢るだけで喜びすぎだろ。まあ、常に兵糧が不足してゐる間宮家なら分からぬ話でもないけど。

「麗。行くぞ」

麗の制服の襟から手を離して振り返る。麗は「はい」とつぶやいてぴつたりと後ろについて歩きだす。

歩きながら、後ろを振り返らずに話しかける。

「射撃レーンがいっぱいだから、今日のところは諦めろ。射撃の訓練以外の訓練なら何でも付き合つてやるからよ」

「何でも!? で、でしたら先輩。ぜひ私の自宅でCVRの実技を……」恥ずかしそうにつぶやきながら、後ろから制服の袖を掴んでくる麗。そんな麗に対して俺は長いため息を吐く。

こいつが言つたCVRとは、諜報科でも手こするような相手にハニートラップを仕掛け、潜入調査したりする、一定の基準を超えた美少女だけが専攻できる科目であり、麗は優れた容姿と天性の女王様（この場合、SM嬢のこと）の素質の持ち主であるため、以前スカウトされたことがあつた。

その ^{ハニートラップ}CVR の実技の訓練したいということはつまり……あれだ。思春期真っ盛りの高校生男子が泣いて喜ぶエッチなことを訓練という言い訳で体験することが出来るわけなんだが……

「冗談でもそういうことを言うな、麗。いくら戦妹だったからって、しまいにはマジで襲うぞ」

「それこそ大歓迎ですわ！」

無言でチョップを落とす。

「わつたい!？」

チョップされるとは思つてなかつたのか、麗の口から鳥取弁が漏れだ。確かに『わつたい』って驚いたりしたときに使う方言だつたよな？

「う〜〜……何するちやあ」

頭をさすりながら抗議してくる麗。語尾に『ちや』や『だつちや』とか付けるのも鳥取のなまりらしい。個人的にはお嬢さま口調よりも方言使つてるときのほうがかわいらしくて好きだつたりする。麗自身は田舎臭くてお嬢さまっぽくないから滅多に使わないけど。

「もう俺が決める。……確かに、2階の徒手格闘専用の訓練場が空いていたはずだから。今日のところは組み手するぞ」

「う……。徒手格闘のみでの組み手ですか……」

嫌そうな顔をする麗。^{サディスト}ここまであからさまに嫌な顔されると逆にイジメたくなるよな。こいつじゃなくても。

「強襲科で1番お前が苦手なことだからな。苦手克服のために訓練つけてやるよ」

「うう……ありがとうございます」



徒手格闘の訓練を終えたあと。

訓練の疲れから訓練場の隅に座りこんでいる麗に、強襲科の施設内にある休憩所に設置されてる自動販売機で購入したスポーツドリンクを渡す。

大きく呼吸を繰り返しながらも、ちゃんとお礼を言ってからスポーツドリンクを受け取つた麗。キャップを開けようとして――

「あ……」

どうやら上手く手に力が入らないようだ。

「ほら。開けてやるから貸せよ」

「はい、ありがとうございます」

スポーツドリンクを受け取り、キャップを開けて再び手渡す。ゴクゴクと喉を鳴らしながら喉を潤していく。麗の側で、自分用に買ったスポーツドリンクを飲む。……俺のは麗とは違う、新発売のスポーツドリンクだが、酷い味だつた。よくよくラベルを見てみると……武蔵高の救護科と装備科が一緒に作成したオリジナルドリンクだつた。しかも試供品。真っ黒な背景に赤文字という個性的なラベルのスポーツドリンクだつたから買ったが、失敗してしまつたようだ。

味は酷いものだが、残すのも勿体無いので我慢して一気に飲み干す。……うげえ。まじい。

「そういうえば、先輩

「……なんだ、麗」

「先輩が受けたというクエストとは、いつたいどのような内容のものなんですか？」

「あー……あまり詳しくは言えないが。ある暴力団の残党狩りだよ。推奨ランクはA～Cの」

「A～C……」

「ああ、そういうや麗は強襲科でAランクの武蔵だつたよな。おまえも受けてみるか？」

「わっ！　いいんですか！？」

「一度、大規模作戦を経験しておいて損はないからな。おまえのいい勉強になるはずだし。もし受けるなら明日にでも用紙を持ってきて

やるぞ

「はい！ 受けます！」

深く考えもせずにうなずいた麗。常に警戒心を持たなければいけない武僧としては減点ものの対応の早さだが、まあいいだろう。

「じゃあ、今日のところはこれで終わりだな」

「はいっ、ありがとうございました！ レオン先輩」

……ほんとに各上だと定めた相手にだけは礼儀正しいんだよな、こいつって。

第2話

日が沈み始め、下校時刻からだいぶ時間が経つた武偵校。今日が始業式だつたこともあり、校舎に残つてゐる生徒の姿はほとんど見られない。

そんな無人に近い武偵高の強襲科の施設に存在する、映画のセットのようなものが組まれた訓練場で、男が女を組み敷いていた。

男は女の下腹辺りにドガツと腰を下ろし、両脇の下に足の裏を押しつける。

両脇の下に足を挟まれていて、満足に腕を動かすことができず女は歯噛みする。鋭い犬歯をむき出しにしながら怒氣を込めた眼光で男を睨みつけ、顔とは逆に冷静になつた頭で男の下から脱出する方法を考える。

愛銃でたるS & W M500は男によつてすでに奪われ、訓練場のどこかへ投げ捨てられた。

自分の最大の武器である自慢の怪力と培つてきた格闘技術は、男には通用しない。

腕も足も封じられ、武器もない。

そんな自分に対して、男の手にはコンバット・マグナムが一丁、弾薬を残して握られている。

誰の目から見ても女より男のほうが有利な状況にあることは明らかだ。有利な状況から生まれる油断を上手く利用し、状況を開しようと考えるが、男に油断は全く無い。

静かに引き金を引き、女の眉間目掛けて銃口をつき付ける。

「クソがっ！」

このまま何もせずに終われない。女は豪快に悪態をつきながら両足に力を込めた。コンクリートで出来た地面を自慢の怪力使つて蹴りつけ、その反動によつて腹の上に乗つた男を強引にどかそうとするが……

「くつ……」

——巧みな体重移動によつて勢いを完全に相殺される。

最後の賭けも徒労に終わり、女は大きく息を吐く。男の銃口は完全に自分の額に標準が定められている。もはやこの状況下で銃弾を避けることは不可能に近い。

「ちつ。…………。あー…………まいった。降参だ」

苦虫を踏み潰したような何とも嫌そうな顔でつぶやく女。そんな女の顔に銃口を向けたまま、男は訊ねる。

「以前のように嘘とかじやないですかね？」

「……今さら嘘なんかつくかよ」

吐き捨てるようにつぶやいた女。しかし以前、負けたと宣言したあとに「油断してんじゃねーよ！」と背後からブレーンバスターを受けたことがある男——霧島 レオンからしてみれば、イマイチ信用できない。

まつたくもつて信用できないのだが……、

相手は仮にも教師。

19歳と17歳という2歳ほどしか離れていないが教師である蘭豹らんぴょうに言われれば、自分は素直に銃を下ろし、上からどく以外に選択肢は無い。

せめて油断だけはしないよう気をつけながら、蘭豹の上から立ち上がりつてホルスターに拳銃を収める。

「あー……クソッ。これで94戦8勝76敗12分けかよ。教師が生徒に負けっぱなしとか、マジでへこむじやねえか」

レオンの拘束から解放された蘭豹は手足を地面に投げ出し、大きく息を吐いた。



強襲科担当の先生である蘭豹との模擬戦を終えた俺は、模擬戦の中に奪つて投げ捨てた蘭豹の愛銃であるS & W M500を回収し、未だに地面に仰向けになつて休んでいる蘭豹の元へと向つた。

「先生、どうぞ」

「おう」

俺から拳銃を受け取った蘭豹は、それをホルスターに収め、飛び上がるよう地面から起き上がる。首を振つてゴキゴキと音を鳴らし、腕を組んで全身のコリを解すように腕を真上に上げる。

「んー……」

その状態で気持ち良さそうに蘭豹が息を吐くと、黒のタンクトップに包まれた巨大な双球が強調され、

「……はあ」

腕が解かれるのと同時にブルンと上下に跳ねる。

さすが教務科の巨乳三人衆のリーダー、蘭豹。ものすごい重量感だ。正確なバストサイズこそ不明だが、あの大きさからいつてEは堅い。しかも蘭豹の服装がヒョウ柄のジャケットに黒のタンクトップという組み合わせで、おまけに汗をかいてるから、肌に服が張り付いてこれがまた何とも……。

「おい、なにガン見してやがんだよ？」

「いえ。俺は別に何も見てません」

蘭豹の胸から顔を逸らす。前もって買っておいたスポーツドリンク（普通）を2本取つて、片方を蘭豹に渡す。

「ちつ。酒じやねえのかよ」

「未成年が酒を買えるわけないでしょ？」

つーか、いい加減酒を控えたほうがいいんじゃないか、あんた。強襲科の訓練中でも酒瓶片手に飲みながら指導したり、アルコール中毒に……は、もう手遅れか。

蘭豹はスポーツドリンクを半分まで煽ると、残りを頭の上からぶちまけた。黒の混じつた赤髪から滴る水滴を顔を振ることで飛ばしこ……

「あの、せめて俺がいないところでしませんか？ スポーツドリンク混じりの汗がかかりまくつてるんですけど」

「ハツ、おまえにはご褒美みてえなもんだろ」

「汗をぶつかれて喜ぶ特殊な趣味はないです。ていうか、透けて見えますよ、色々と」

顔を逸らしながら蘭豹の体を指を指す。スポーツドリンクにより、

さらに水気を含んだ黒のタンクトップから浮かび上がるレース状の模様。薄い生地で出来ていて、注意して見てみると乳首の位置が勃起で分かる。おいおい、結構工口以下着穿いてんない。

そんな俺の指摘に普通の女子だつたなら胸を隠して怒つたり、恥ずかしがつたりするんだろうが、目の前の女は普通とはかけ離れた存在だ。むしろ俺に見せ付けるように胸を張り、ニカツと男前な笑みを浮べてアームロックを仕掛けてくる。

「ハハハハ、うるせえんだよ、このクソ童貞っ！」

「ら、蘭豹先生、苦しい……以前に胸が当たつてますつて。あと童貞とか言わないでくださいよ」

「ああん？ 童貞を童貞って呼んで何が悪いんだよ」

「ぐつ……。俺だつて好きで童貞でいるわけじゃ……」

「より取り見取りのクセしやがつて。意氣地がねえのか、おまえは」

「は？ より取り見取り？」

ぐぐぐ……と締め上げられる。顔に押し付けられてる感触は最高だが、ベルトが邪魔だ。いや、服が邪魔だ。やるんだつたらせめて素っ裸でやつて欲しかつた。下着姿でもうれしい。

「おまえの元戦妹はもちろん。よく面倒見てる強襲科の後輩たちに、強襲科1番の問題児でチビガキの神崎。探偵科の峰とより取り見取りじやねえかよ」

蘭豹はセクハラ親父のような下品な笑みを浮かべ、拳を頭にぐりぐりと押し付けてくる。

「戦妹に手を出せるわけがないだろつ。後輩たちもただの後輩だし。理子は……好みだけどそういう関係じやねえし。アリアなんて端から候補にねえよつ！」

「酷いやツだな、おい。……あー、そーいやおまえつて巨乳好きだつたもんなあ？」

「……いや、それだけの理由じやないデスヨ？ 性格とか立場とかで神崎さんはNGなだけで。決してぺたんこだからって理由じやないです」

「ハツ。下らねえ嘘ついてんじやねーよ、霧島。單なる巨乳好きだか

らダメなだけだろ。現に今もあたしから逃げようともしてねえし。
美人のお姉さんに乳押しつけられてうれしーんだよなあ、おい？ ほ
れほれ

「……否定は、しない」

いや。むしろ肯定しよう。汗で濡れたタンクトップとブラ越し
の乳押し付けられるとか、サイコーフスよ！ ランラン！

「見境の無いヤツ。これだから童貞は……」

童貞は関係ない。男なら誰だつて喜ぶはずだ。……金次や不知火
みたいなホモじやねえ限り。

「わざわざ『なごじょ』に送つてやつたのによお。まつたく成長してね
えじやねえか」

やれやれだぜ、とため息を吐く蘭豹。

『なごじょ』とは名古屋武偵女子校の略称で、武偵を志望の女子が集ま
る女子校。そこは軍人養成校なんて呼ばれ方をしていて、所属する生
徒の9割が強襲科という、日本一物騒な女子たちが集まる女子校であ
る。

去年俺は教務科からの依頼で、なごじょへ戦闘訓練の教導へ行かさ
れたんだが……

「勘弁してくださいよ……。あそこ、本当に大変だつたんですよ……」
依頼である戦闘訓練の教導自体は問題なかつた。あちらの強襲科
の先生と事前に話し合い、Sランク武偵の実力をわからせるのと、強
大な敵を相手にどう立ち向かえばいいか考えさせるために模擬戦す
ることを決めていて、模擬戦でもきちんと強襲科の生徒全員を倒し、
個人個人で問題点や改善点を教えたから、教導自体には何も問題がな
かつたわけなんだが……、

そのあとに、問題が起こつたんだ。

名古屋武偵女子校に存在する校訓。

——第8項、『他者の下に敷かれる事まがりならず』

ただし、例外として16項、『配偶者の下になら敷かれててもやむな
し』

中学までアメリカの武偵局に所属し、世界各地を飛び回っていた俺

は、そんな校訓が名古屋女子校に存在する事なんて知るわけもなく、強襲科の模擬戦に参加した生徒たちを全員、完膚なきまでに倒してしまったんだ……。

その結果——俺は……『なごじよ』の生徒たちから何度も同じような告白されることになった。

その告白を簡単に表すと、

私、負けた。

お前、勝った。

お前、強い。

私、自分より強い相手と結婚する。

嫁にしろ。

…………。

あいつらは現代に蘇つたアマゾネスなのだろうか？ いくらなんでも男に飢えすぎだろう。武偵校でも変人率・危険度共にナンバーワンを誇る強襲科の生徒が9割もいるせいだろうか？ はたまた女子校という環境がそうさせるのか？

最初の教導で生徒たちを伸してから、クエストが終わるまでの2週間。俺はずつと襲撃され続けた。心休まる時間なんて存在せず、用意されたマンションにも度々強襲かけられて。突如スタングレネードと煙幕弾をぶち込まれ、ゴムスタンダードを装填した拳銃を乱射される。通学途中には不良漫画ばかりに待ち伏せされて、突然のエンカウントバルが始まり、昼食や休憩時間ですら隙を見つければ襲つてきて。

最後のほうでは、俺に自分の力を認めさせた者が、俺『を』嫁にできるルールがなごじよの間では出来ていたようで、ものすごく大変だつた。

「なごじよの制服は過激だからな。相当いい思いしてたんじゃねえのか」

豪快に笑いながら訊ねる蘭豹。……まあ、確かにいい思いはしたよ、視覚的にはな。なごじよの制服は半制服というか、『弾丸なんて端から当たらないぜ！』だから私には防弾制服なんて必要ないんだぜ！』とかいう、ものすごい精神理論でヘソだし＆超ミニスカが普通だ

し。そりやあ、いい思いもするだろう。特にC以上の胸となると、少し動いただけで丈が異様に短いセーラー服やミニスカートの下から下着が覗けるんだから。健全な男子高校生なら、喜ばないわけがない。

「……突然強襲かけられたりしなければ、もっと素直にうなずけていたんですけどね」

魂まで抜けていつてしまうかのような長いため息を吐く。あの100人を超える女生徒たちから求婚という名の襲撃されていた状況のなかで誰かを気に入り、俺がサルのように何も考えず生徒に手を出していれば……あれだぞ。色んな人の血の雨が降ること確定してるだろ。ひとりを選んだ場合でも物騒なキヤツトファイトが始まることは違ひ無しだし、むしろ手を出せない状況で迫られて苦しんでいたよ……。

——と、少々名残惜しいがそろそろ抜けるか。蘭豹の腕をタップして、外してくださいという意思表示を行なうと、蘭豹はあつさりとアームロックを解いてくれた。

俺は立ち上がって制服のシワを伸ばし、ネクタイを直す。赤い髪をいつのもポニーテールにセットしなおしている蘭豹に向い、頭を下げる。

「今日はありがとうございました」

「いいってことよ。生徒の訓練に付き合うのがあたしたち先生の仕事だからな」

そう言つてくれる蘭豹。だけど、それでも俺はあなたに感謝する。世界的に、人類的に規格外の部類に入つてる俺の戦闘訓練に付き会える数少ない人間だから。

「さてと、じゃあシャワーでも浴びにいくか。結構汚れちまつたし」

「そうですね」

蘭豹に同意して模擬戦場から出る。強襲科の施設に設けられた大浴場……は、時間的に使えないでの、シャワールームのほうへ向う。

「……おい、霧島。まさかとは思うが、あたしと一緒におまえもシャ

ワーラビの氣か?」

「? そうですが。それが何か?」

入つたらダメなのか? 僕だつて汚れたまま帰りたくないんだが
……。

俺の一歩前を歩いていた蘭豹が顔だけを振り返えさせる。苦虫を踏み潰したような苦い顔で、こつちを見てくる。

「何か?」

「……ちつ、なんでもねえよ。それより、あたしに何かしようとしたら
ブツ殺すからな」
ガチャつと愛銃を抜いて見せてくる蘭豹。……何をしろつてんだけよ。

とりあえず両手をあげて降参の意を示す。俺の気持ちが伝わったのか、蘭豹は愛銃をホルスターへしまい、歩き出した。

男女別に別れたシャワールーム。女性用の扉に手をかけた蘭豹に続いて、俺も隣にある男性用の扉に手をかける。……おい、なんでこつちを見るんだよ、蘭豹。

「なんだ、一緒に入らないのか?」

手をかけたまま訊ねてくる蘭豹。……一緒に、そういう意味なのか。

俺は内心で小さくため息を吐き、蘭豹に言う。

「何もできないんでしょ?」

「…………」

おい蘭豹、そこで沈黙するなよ。怖いだろ。

「……もしかして。何かしていいんですか?」

この場合の『何か』って、あれだよな?

ギヤルゲでいうところの覗き。

エロゲでいうところの教師と生徒の背徳青姦セックス。

おいおい、いつの間にフラグ立つたんだ? まさかの蘭豹ルート突入か? しかもこんなエロゲみたいな展開で。

「——なわけねえだろうが」

まあ、そうですよねー。そんなうまい話があるわけがない。ほら、

もうわかつたから銃を仕舞おう、な?

「まつたく、おまえは……」

やれやれだと息を吐き、シャワールームの扉を開ける蘭豹。

このすぐに拳銃を抜いたり暴力を振るう蘭豹だが、巨乳美人教師というカテゴリーにいながら19歳と若いので、強襲科の一部男子にはかなり人気があつたりする。個人的にクセのある赤毛をボニー・テールにしてるところもポイントが高い。

「……蘭豹と一緒にシャワー浴びるなんてことになつたら、性欲抑えられる自信ないからな」

「――つ」

「かなり惜しいけど、我慢するさ」

「…………」

自分にそう言い聞かせ、俺はシャワールームのなかへ入つた。



時間も遅いので手早くシャワーを浴びて外に出ると、まだ蘭豹はシャワーを浴びているようだつた。

……あれ? 風呂は長い割りに、シャワーはいつもカラスの行水かつてレベルですぐ浴びて出てくるのに。

小さな疑問を抱きつつ、このまま帰るのも悪いのでシャワールームの前に設置されたベンチに座つて蘭豹を待つ。

ケータイを取り出して、今朝届いていた周知メールを読み返す。

『武偵殺し』の模倣犯が武偵を襲撃ねえ……

周知メールの内容は『武偵殺し』に対する注意喚起だつた。

ちなみに『武偵殺し』とは連續殺人犯の呼び名で、その名の通り、武偵を狙つて殺す犯罪者。そいつはターゲットが乗つた乗り物に『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールしながら武偵がどう動くのかを見ながら殺すという方法を好んで今まで犯罪を繰り返していた。

『武偵殺し』の犯人は捕まつたというニュースが流れていたが……冤

罪らしいんだよな、どうにも。

犯人（？）にかけられた刑罰とか、異例の刑期とか。証拠もそこまでそろつていたわけでもなしに刑務所にぶち込まれてすぐに終身刑確定は、客観的に見て明らかにおかしい。アリアも冤罪だと声を大にして叫んでいたし、俺が世界でもっとも信用してる探偵も『冤罪』だと断言していたからな。

「だとすると、こいつは模倣犯じゃない可能性もある。犯行時刻は朝の8時前後？」

8時前後……。被害者を含めて怪我人もなし。狙われた生徒は武僧高の2年生。

この条件に当てはまつてるヤツを、俺は知っている。

始業式に出席せず、机に突っ伏していた、あいつ。

そういうや、爆薬と硝煙の臭いしてたなあ。

アリアも、よく思い出してみるとあいつも始業式には出ていなかつた。

周知メールには、被害者を同じ武僧高の生徒が救出したと書いてある。

探偵科に転科して約10ヶ月。ちよつとはマシになつたオツムが答えを導き始める。

「……被害者はキンジ。キンジを救出したのがアリアってことなのか？　だけど、それだけなら今朝と俺にキンジのことを訊ねてきたアリアの態度に説明がつかない。アリアがキンジに興味を抱いた理由……」

目を瞑つて壁に背中を預け、推理を深めていく。

アリアは、パートナーを求めている。

Sランク武僧の自分と吊りあうような、自分と周りとの架け橋になれるようなパートナーを。

イ・ウーという、世界でも名の知れた国際犯罪者集団を逮捕するために、パートナーを探している。

そんなアリアが、探偵科Eランクの金次に興味を持つた理由。「キンジを救出したあとに、キンジが別人のように強くなつたのか？」

そしてそこでキンジの強さを知ったアリアが、キンジに興味を持つた

そう考えればアリアの行動に説明がつく。今朝の自己紹介の前にアリアが金次に返却したベルトも、あいつらが今日の朝に出会ったのを照明している。

——謎はすべて解けた！

「けど、だからどうだつていう話だよな……」

頭は大人、体は子供の少年探偵なら、ここで一筋の閃光と共に推理を披露したんだろうが、あいにくと今は蘭豹ぐらいしかいない。蘭豹相手に推理を披露したところで、強襲科担当教諭である蘭豹は褒めてくれないどころか「強襲科に帰つてこいやつ！」などと怒るのが目に見えている。

そもそも推理してわかつたからといつても、どうということはない。金次とは同室なんだから直接訊ねればいい話だし。

「はあ……」

まあ丁度いい暇潰しにはなつたか。目を開けて前を向くと、丁度蘭豹が出てきたところだつた。

首にタオルをかけた蘭豹が、こつちをみて驚いたような顔をする。

「まだいたのかよ、おまえ」

「……先に帰らなかつたことを喜んでくださいよ」「ちつ……」

なんで毎回のように舌打ちするんだ、この先生は……。
小さくため息を吐いてベンチから立ち上がる。

「じゃあ、帰りましようか」

「……そーだな」

うなづくが歩き出さない蘭豹。先に俺が出口へ向つて歩き始める
と、蘭豹は俺のあとに続いて歩き出した。

……いつもは前を歩くのに、なんで今日は半歩後ろを歩いてるんだ
？



武偵高前から出る最後のバスに乗り込み、探偵科の寮へと帰つてきた俺は、近くのコンビニで夕食を購入してから自宅へ向う。

マンションの玄関ロビーを過ぎてエレベーターに乗り、上へと昇る。自室がある階に到着し、エレベーターの扉が開くと、

「あつ」

巫女さんがいた。ぱつたり切りそろえられた前髪に、艶やかな黒髪。ぱつちりした瞳に整つた顔立ちの。

「霧島くん。おかえりなさい」

「あ、ああ……」

俺にぺこっと頭を下げて挨拶してくる巫女さん。つて、白雪さんがよ。そういえば今朝、金次と「よろしくやれよ」つて発破かけてたなあ。こんなすっかり遅い時間に帰る途中つてことは——、「少しば進展した?」

「——つ! ……そ、それがね。私、授業で遅くなつちやつて……キンちゃんにお夕飯届けたかつたから、着替えないで来ちやつて……。で、でも、キンちゃんは着替えなくともいいつて言つてくれてね。それで、今朝出てた周知メールの自転車爆破事件に巻き込まれたのがキンちゃんのか心配になつて聞いてみたら、やつぱりキンちゃんが巻き込まれてて、手当てしようとしたら怪我してないからいらなつて言われて、キンちゃんを巻き込んだ犯人は八つ裂きにしてコンクリ……じやなくて、逮捕するの!」

……え? 何? 何だつて?

金次は巫女服のままのほうがいい以外、ほとんど聞き取れなかつたんだけど……。

「と、とにかく。白雪さんは今着たばかりなんだね?」

それで相変わらず進展もなかつたと。

「あ、うん。そうだよ。……ごめんね、霧島くん。せつかく2人つきりしてくれたのに」

「別に気にしなくてもいいよ、白雪さん。俺の分まで朝ご飯作つてもらつたんだし。いつもこれぐらいの時間に帰つてるからさ」

「それでもありがとう、霧島くん」

腰を折つて丁寧にお礼を言つてくる白雪さん。そこまで畏まられると、こちらも恐縮してしまう。

「じゃ、私はこれで帰るね。タケノコご飯、霧島くんの分もあるから良かったら食べてね」

「マジで!?俺の分もあるの!? タケノコご飯！」

思わず涎が出てしまいそうになるのをぐつと堪えてお礼を言う。

「ありがとう、白雪さん。——つと、もう時間も遅いし、送ろうか?」

「うん。大丈夫だよ。ありがとう」

「そつか。じゃあね、白雪さん」

「うん。じゃあね」

エレベーターに乗り込んで下へと降りていく白雪さんを見送り、俺は自室へ向う。いつものようにカギを開けてなかへ入り、

「キンジー、帰ったぞおー」

奥にいるだろう金次に呼びかけながら廊下を歩いて行くと、脱衣所の扉が開いていて、そこから光が漏れていることに気づいた。

「風呂入つてるのか、キンジ」

声をかけながら俺が脱衣所の扉を開けると、

ツインテールを解いてロングヘアになつていた全身つるつぺたのアリア嬢が、風呂場のドアを開けて出できただところだつた。

さらに脱衣所の床に視線を向けて見ると、アリア嬢の衣服が入つてると思われる洗濯力ゴに手を突っ込んでる金次^{変態}がいた。

……。

流れる、沈黙。

見つめ合う、アリアと金次。

見つめ合う、俺とアリア。

見つめ合う、俺と金次。

俺と金次の姿を確認したアリアは、

「へ……ヘンタイ……」

ばつ、と右腕で胸を、左手で……あー……うん、へその下を隠した。

そして、アリアは自分の洗濯力ゴを漁つて いる金次を見て、全身に

鳥肌を立てる。

「ち……ちがッ……！」

金次が何かを抱えて立ち上がる。持上げたモノはアリアの武器である2本の刀のようだが……

右の刀に、ひらり。

左の刀にも、ひららり。

まるで手旗信号のように、アリアの上下の下着が引っかかつていった。ちなみに引っかかる下着は、小さなトランプのマークがいっぱいプリントされた、ガキっぽい木綿の下着だった。

……俺の同居人はいったいアリアに何がしたいんだろう？ 巨乳で今時珍しい大和撫子タイプの美少女である白雪さんを帰して、アリア嬢の衣服を手に入れたかったのだろうか？

「くくく死ね！」

どごつ！

「ぐつ!?」

真っ赤になつたアリアが金次を蹴り飛ばす。シャレにならない角度で入つた前蹴りが、金次の体を「く」の字に折る。

そのままアリアは2本の刀に引っ掛けられた下着をもぎ取り、反対側の足で、飛び膝蹴りを叩き込んだ。

アリアの強烈な2連撃に、強襲科でも打たれ強いと定評があつた金次も耐え切れなかつたようだ。完全に意識を飛ばして床へと沈んだ。……とりあえず、アリア嬢。マツパでの蹴りはおススメできないぞ。色々モロで見えてしまつたから。ツルツルもいいと思うよ、うん。口リ体型の女の子らしい。

「れ、れれれレオン！ あ、あああんた、なんでここにいるのよ!?」

キンジが手放した刀を1本掴み、その切つ先を俺に向けてくるアリア。とりあえず俺は、自分に攻撃する意思がないことを示すために両手をあげて訊ねた。

「……それはこっちのセリフだ。なんでお前が俺の部屋にいるんだよ？」

「——つ。まさかキンジが言つてたもうひとりの同居人つてあんたな

の!?

相変わらず会話のキャッチボールができないヤツ……。俺がアリアに「そうだ」とうなづくと、

「な、なら丁度いいわ！　あんたも、私のドレイになりなさい！」

アリアがそんなことを言つてきた。

「この前は断わられたけど、やつぱりあなたの力が……その、必要なものよ。だから、キンジと一緒にあたしのば、パートナーに……」

俺から顔を逸らしながらつぶやくアリア。

そんなアリアに、俺は――、

脱衣所の引き出しからバスタオルを取り出し、アリアへと放つた。「まずは服を着ろよ。話はそれからでもいいだろ」

「――っ！」

俺の言葉に、自分の現在の姿（つるつぺたの全裸さらし中）を思い出したアリアは、タオルをキャッチして急いで体を隠す。……バスタオル1枚で全身が隠れるとか、マジで小さいんだな、こいつ。

バスタオルで体を隠してなお、警戒し続けるアリアに小さくため息を吐いてから、床で気絶している金次を担ぎ上げる。

「こいつがいたんじゃ着替えられないだろうし、リビングのほうに持つて行つとくぞ。俺もリビングにいるから、着替えたたら来いよ」

「う、うん……。わかったわ」

アリアがうなずいたのを確認して、俺はリビングへと向う。……よし、何とかこの場は誤魔化せた。事故で金次の二の舞になるのはさすがに嫌だからな。

……さてと、金次はソファに寝かせるとして……。

制服のネクタイピンに付けたカメラ（襲撃時、証拠写真を撮るためにもの）で思わず撮つちまつたアリアの全裸はどうしようか。

このまま消すのはもつたいないし、あいつの土産にでもするかな？　あいつはアリアの身内になるんだし、同性だから別にいいだろ。何枚か撮つた内、モロに映つてない画像をプリントしようつと。



気絶している金次をソファに寝かせ、頭に氷嚢を置いたりして看病していると、薄いピンク色のネグリジェに着替えたアリアがやつてきた。

……は？ ネグリジェだと？

「アリア。おまえまさか……こに泊まるつもりか？」

「あら、よくわかつたわね。そのつもりよ」

男子寮に泊まるなどを、なんでもないことのようにうなずくアリア。

「……わかつたもなにも、この時間にネグリジェなんか着てきたら誰だつてわかるだろ……」

それにリビングの隅には、お泊りセットのようなトランクが置いてあるし。

「う……だ、だつたら！ なんであたしがここに泊まることになつたのか、その理由がレオンにはわかる？」

こっちを見上げながら訊ねてくるアリアちゃん。こうして見ると本当に同じ年とは思えない。ちなみに俺とアリアの身長差は30cm以上ある。

俺は口元に手を当てて、考える素振りをとり、

「キンジだな」

前もつて推理していたことを、あたかも一瞬で推理して見せたかのようにつぶやいた。

アリアは俺が考え出した推理を訊いて、ニヤツ、と獲物を見つけた猫みたいな笑みを浮かべた。

「さすがレオンね。その通りよ。あたしはキンジをぱ……ど、ドレイにしようと思つて來たの」

……わざわざパートナーからドレイに言い直さなくともいいだろ。さすが天然のツンデレ娘。

「それでね……。レオン。さつきも言つたけど、あんたも……あたしのパートナーになつてくれない？」

「……それは前にも断わつただろ。俺は、おまえの求めているような

パートナーにはなれないって」

「——つ」

ショックを受けたような顔をするアリア。俺はアリアの頭に手を伸ばし、

「あの理子つて子がそんなにいいの?」

——かけて止める。

「……は? おまえ、何を言つてんだ?」

「探偵科のAランク武偵、峰 理子。その子がレオンのパートナーなんでしょう?」

「パートナーつて……。まあ、この武偵校でいうならそうだな。あいつとは前衛と後衛で1番バランスが……」

「や、やつぱり胸なのね……」

「おい、話聞けよ」

「あの子、すごく大きいものね。あたしと身長はほとんど変わらないのに……。バカみたいに脂肪の塊2つもぶら下げちゃつて……」

ギリツ、とアリアが歯を鳴らし、真っ赤になつた顔を俯かせる。わなわなと体を震わせて自分の胸に手を当てた。

アリアと理子は同じ口りでも、アリアは正統派の口りであり、貧乳。一方の理子は口りだが巨乳という、ハッキリとした違いがお互いの体に現れていて、アリアは理子の豊満な胸が羨ましがつているのだ。

以前、俺を呼びに強襲科の施設へとやつて来た理子を見て、アリアは自分のぺたんこな胸と理子の歩くだけで揺れる胸を見比べて以来、アリアは一方的に理子を敵視していた。

今回もそのコンプレックスが原因でこんなことを言い出しているんだろうが、

「おいおい、アリア嬢。俺が胸なんぞで仕事相手を選ぶと思つてるのか? それはちょっと失礼だぞ」

「じゃあ! だつたらなんであんたはあたしのパートナーになつてくれないのよ!」

両手を振り上げて癪癩を起すアリア。俺はため息を吐いて、今にも泣き出しそうになつてているアリアの頭に手を置く。膝をまげて視線

の高さを合わせる。

いい子いい子とアリアの頭を撫でながら、言い聞かせるようにつぶやく。

「アリア。前にも言つたが、俺とお前は同じ本能に従つて動くタイプの武僧だ。理性的に動くことが苦手で、突つ走る傾向にある俺らには、自分とは違うタイプのパートナーが必要なんだよ」

「……でも、あたしには……」

赤紫色の瞳に涙をいっぱい溜めながら、片手で俺の制服の裾を掴んでくるアリア。

「おまえに急がないといけない事情があるのは知つてるよ。——けどな、それでも俺はおまえのパートナーにはなれないんだ」

「——っ」

俺の拒絶に、制服の裾を掴んでいる手にぎゅっと力が込められる。フローリングの床へ向けてポタポタと涙が落ちていく。

俺は小さくため息を吐いて、その場でしゃがむ。下からアリアの顔を見上げ、指で涙を掬い取りながら言葉を続ける。

「ま、パートナーにはなれないが……協力はしてやるよ」「……きょう、りょく？」

涙を拭いながら訊ねるアリア。俺はアリアの手をしつかりと握り、うなずく。

「ああ、協力してやる。おまえひとりでは無理なとき。おまえと、そのパートナーでも解決できない事件が起こつたら俺に依頼しろ。この俺が、『キング・オブ・ハート』がおまえを助けに駆けつけてやる。例え、相手があのイ・ウーであつてもな」

俺はアリアに向つて威勢よく笑いかける。アリアは涙で潤んだ赤紫色の瞳に俺の顔を映したまま、

「…………」

なんのリアクションもなしに、固まっている。

「……おーい、アリアさん？ 何でもいいから反応を返してくれないと、俺、ものすごく恥ずかしいヤツになるんだけど……。あんまり名乗りたくない2つ名まで言つて決めたのに、放置ですか？」

「アリアー？」

—

アリアさん？」

やた！

「おれー！ あ、危ねえな……いきなり蹴りなんか放つてくるなよ」

三に壁のシジマが就るのか。辯士は之

たよな、おまえ。

「もう寝るわ！ おやすみ！」

「はあ
……

込んでるあいつより、目標に向つて一直線なあいつのほうがいつものアリアらしいからな。

「じゃあ、俺は白雪さん特製の夕ケノエご飯でも食べるとするか」

『島君用』と書かれた紙が挟まれた方を手に取り、テレビのバラエティ番組を見ながら夕飯を食べ始めた。

「う……ん？」

あー、さすがは白雪さん。タケノコご飯もサイコーに美味いつ！

おかげで、ひどく喜んでいた。おかずひとつにデザートを渡してきた武藤の野郎にも食わせてやりたが、残念。これは俺が全部、いただく。あー、美味い。

「――つ。……ああクソ、そういうえばアリアのヤツに……ん？」レオ
ン？　ああ、そういえばおまえ、帰つてきて……」「む？　おー、キンジ。起きたのか」

……まあな。それで、あのデコチビはどういつたんだ?」

捗す金次。

「もしかしてかえ——つて、ないな。あいつが大人しく帰るとは思えん」

顔に手を当て、金次は長いため息を吐く。俺はタケノコ^ゾ飯を一気に搔きこみつつ、金次に教えてやる。

「アリアならもう寝るつてよ。今頃使つてない部屋——はないだろうから、寝室だろうな」

「マジかよ……。あいつ、本気で家に泊まつていく気なのか？」

「ここまで来ればそうだろうなー」

「他人事みたいに言つてんじゃねえよ……。お前はアリアが家に泊まつても平氣なのか？」

「まあ、何かあるわけでもないからな。キンジも、アリアに何かするつもりは——いや、あるのか。お前、アリアのシャワー中に洗濯籠のなかから下着盗もうとしてたもんなあ」

わざわざ白雪さんを帰してまでアリアの下着が欲しかったんだよな？ そなうなんだよな、^{変態}金・次

「なつ！ それは誤解だ！ 俺はあいつから武器を取り上げようと……」

「ほう、つまり武器を取り上げた上で何かをしようとしていたと？」

「すつ、するわけないだろがっ！ 俺は、女嫌いなんだから！」

「…………。あー…………そ、うかい」

「おい、なんだその眼は？ 信じてないのか？」

「いや、信じてるよ。うん。お前、女、嫌いだもんな。アリアに何かするわけがないよな」

「当然だろ。誰があんなデコチビなんかに……」

吐き捨てるようにつぶやき、金次はソファに座りなおす。……女嫌いでもなんでもいいから、ホモだけは止めてくれよ、金次。

「まあ、それよりなんだ。どうしてアリアが泊まることになつたのか、説明してくれないか？」

「……あいつから聞いてないのか？」

「一応聞いたけど、おまえの口からも聞いておきたいんだよ。とりあえ

えず、今朝起こつたチャリジャックの被害者つておまえか？」

「……ああ。 そうだよ」

大きなため息を吐きながら金次はうなづく。……俺以上にため息が多いヤツだな。

それから金次は、アリアに「奴隸になれ」と言われて付きまとわれていることを話し始めた。

「俺は武偵を辞めるんだ。強襲科なんかに戻つて、女なんかとパーティなんて組めるかよ。ああクソッ、あと少しで一般の高校に転入できるのに、なんでこんな目に……」

……話し始めたというか、もはや独り言だな。チャリジャックやアリアのことでもたまりに溜まつたストレスを吐き出そうと盛大に愚痴つてる。

……まつ、とりあえずこいつらの話を客観的な視点からまとめてみる。

金次はアリアとパーティを組む以前に、武偵なんか辞めたいし、一般高校への転校の手続きが済むまで安全に過ごしたい。そもそも女嫌いだから近づいてくるなよ、デコチビ。

——と、思つていて。

アリアは金次とパーティを組みたい。できればパートナーになつて欲しい。奴隸というのは照れ隠しであり、最大限の譲歩なんだよ。それぐらい言わなくともわかりなさいよ。

——と、思つている。

相反する2人の考えに、ある事情から余裕がないアリア。武偵への情熱をなくし、惰性で生活している、事なきれ主義の金次。

これはちょっとやそつとじや動かないだろう。

何かキツカケがないと、こいつらはずつと対立し続ける。

俺がキツカケになつてやつてもいいが……

「なんだよ？」

「いや、なんでもない。じゃ、俺ももう寝るから」

それはアリアと金次……2人のためにはならないだろう。



白雪さんの弁当箱を洗い、自室で寝間着であるジャージに着替えてから寝室へ向う。

俺と金次が住んでいるこの探偵科の寮は元々4人部屋なので、寝室には2段ベットが2基ある。俺と金次は2段ベットのそれぞれ下段を使用していたわけだが、

アリアが2段ベッドの中央にトラップを仕掛けようとしていた。アリアはお泊りセットが入れられたトランプ柄のトランクからリード線と対人地雷（おそらく見かけだけ）をせつせと取り出し、黒のマジックを手にとつて床に――

「おい、それは待て」

マジックで床に何かを書こうとしていたアリアを呼び止める。こちらを振り返ったアリアに近づき、マジックを取り上げる。

アリアが頬を膨らませて抗議の声をあげた。

「もう何するのよ、レオン」

「それはこつちの台詞だ。床に直接マジックで文字書こうとしてただろうが、おまえ。それに、そのトラップの山はなんなんだよ」

「もちろん、痴漢対策よ」

「痴漢対策って……」

男子寮に自分から乗り込んでいて何言つてんだよ……。

「ほら、返してよ。これから境界線を書くんだから」

アリアがマジックへ手を伸ばしてくる。

「境界線はいいとして、床に直接マジックで文字を書くのは止めろ。誰が掃除すると思つてんだよ。あと、トラップ仕掛けるのもやりすぎだ」

「…………だけど……それだとあいつが……」

「そりゃあ、シャワー浴びてる最中に自分が脱いだ服探られて、下着盗まれそうになつたんだから不安になるのもわかる。……わかるが、男子寮に押しかけてきたのはおまえだろ？」

「…………」

「自衛することは結構なことだが、住人である俺たちにあまり迷惑のかからない方法でやれよ」
「うー……わかつたわよ」
しぶしぶながらもうなずいたのを確認して、マジックをアリアに返す。

アリアはA4サイズの用紙に『これ以上入つてこようとしたら殺す』と何とも物騒なメッセージと拳銃のイラストを書いて、2段ベッドの上段の手すりにテープで貼りつけた。

「次はトラップな。全部仕舞えよ？」

「……わかつたわよ」

しぶしぶと、不安げな表情でトラップを片付けていくアリアの頭に後ろから手を乗せてる。

「そう心配しなくても大丈夫だつて。キンジは一応女嫌いで通つてゐるヤツだし、女の寝込みを襲おうとするヤツはここにはいないからよ」

「……でも、もしものときは？」

「そのときは、お前に触れる前に俺がキンジをぶん殴つてやるよ」「ま、そんなことはまずありえないと思うがな。

アリアは全部のトラップをトランクに仕舞い込んで立ち上がり、「レオンは……あんたは、どうなのよ？」

そんなことを訊ねてきた。

訊ねられた俺はアリアに向つて肩をすくませ、自分のベッド……アリアが紙を貼り付けたベッドの下段に入り、

「じゃあ、おやすみ」

そう言つて布団に潜り込んだ。

「ちよつと！ さつきの反応はどういう意味なのよ！ ねえ、レオン

！ レオンつてば！」

揺らしてくるな、アリア。

俺は、今、すつぐく眠たいんだ。

第3話

翌朝。いつものように6時前に目覚めた俺は、日課の早朝のランニングに行こうとして思い出す。

「そいや、アリアがいたんだつたな」

仰向けになつて寝転んだまま、自分が使つている2段ベッドの上段を見上げる。そちらに向つて耳を澄ますと、アリアのものらしい小さな寝息が聞えてくる。まだアリアちゃんは夢のなかのようだ。

「じゅるる……あつちにももまん、こつちにももまん、たくさんのももまん……うふふふ……」

……夢の中までももまんかよ。さすがももまん中毒者。だてに毎日食べてないな。

上で寝ているアリアから視線を横へ移すと、もう片側の壁にある2段ベッドの下段で寝ている金次の姿があつた。こちらも熟睡しているようで、まつたく起きる気配はない。

（なら今のうちにシャワーでも浴びるか）

昨夜アリアに対し金次が寝込みを襲い掛かるようだつたら殴ると言つた手前、長い間部屋を開けることはできないのでランニングは諦めるが、シャワーライはいいだろ。

金次を信用していないわけではないが、アリアのことを考え、一応2段ベッド間に警報が鳴るタイプのトラップを仕掛けながら風呂場へと向つた。

いつもより手早くシャワーを浴びて、武値高の制服に着替える。脱衣所の棚に置いたバスタオルで体を拭き、洗濯機を回す。いつもなら金次の分の洗濯物もまとめて回すが、昨日風呂に入らなかつたのか、洗濯物は自分の分だけだつた。……ちなみにアリアの洗濯物が昨日のまま脱衣所の隅に置いてあつたが、こちらは無視することにした。見掛けは幼児でも同い年だからな。あいつも同い年の男に洗濯物なんて洗われたくないだろう。

洗濯機が回つている間に、マンションの下にあるコンビニで全員分の朝食を購入する。朝食の入つた袋をまとめてリビングのテーブル

に置いて、寝室に戻る。

(気の使いすぎだと思うが……一応な)

まだ2人が寝ているのを確認して、自分のベッドに座る。ベッドの下に置いている自分のノートパソコンを取り出す。

ノートパソコンを起動させたところで、

「あ、そうだ」

ある悪戯を思いついた。

俺はケータイのカメラを使ってアリアのマヌケな寝顔を激写し、ノートパソコンに画像を送る。

メールボックスを開いて、イギリスにいるあいつに画像を送り付ける。

すると、ものの数分もしない内に返信メールが返ってきた。イギリストと日本の時差は約8時間で、日本のほうが進んでいるから、あつちは今頃夜の10時を越えた辺りなんだがなあ……お早い返信だところで。

『これは、どういうことかしら?』

返ってきたメールにはそのたつた一文だけ。たつたそれだけの文章だけでも相手の怒りの感情が簡単に読み取れる。

これは……早まつたか?

俺は軽い悪戯のつもりだったんだが……、

『返答しだいではあなたを抹殺するわ』

『お姉さまと必要以上に接触しないという、私との約束を破つたわね』
『お姉さまに何か不埒なことをしていたらどうなるか分かつていてるでしょう?』

『あなたは私を怒らせた』

怒りの感情が込められたメールが続けざまに送られてくる。俺は慌てて弁解のメールを送信する。

『アリアとは何もない。単なる悪戯だ』

『悪戯? 悪戯でなぜお姉さまの寝顔なんてものが撮れているのかしら?』

『パートナー探しの一環。って言えば伝わるだろ?』

『そのパートナー候補はあなたじゃないでしょうね?』

『違う。俺の同居人が候補だ。まあ、相変わらず俺にもパートナーになつてくれつて頼まれてるがな』

『ちゃんと断わつてるんでしょうね?』

『ああ。あの事件に関して協力するとは言つたけど、パートナーの件はちゃんと断わつたぞ』

『そう。ちゃんと断わつたのね』

ふう……何とか怒りを納めてくれたか。

『それはそうと、お姉さまの寝顔を盗撮するなんて最低ね』

……うつ。

『武偵には武偵3倍法なんてものがあるんでしょう? 盗撮であなたを告発してあげましょくか?』

『それは止めてもらえると助かる』
幼児体型の盗撮で逮捕されるのはさすがに嫌だぞ。

——と、ここで洗濯機から洗濯が終わつたことを告げる音が聞えてきた。

『洗濯が終わつたみたいだから、メールを止めるぞ』

『お姉さまの衣服まで洗濯してないでしょうね?』

『するわけがないだろ……。じゃあ、そつちじやもう遅い時間なんだし、おまえも早く寝ろよ』

『あなたに言われなくともちゃんとわかつてるわ』

『そうかい。——あと、最後に。今月の中ごろぐらいからヨーロッパの武偵局に応援に行くことになつてるから、日本のモノで欲しいものがあれば言つておいてくれ。それじやあな』

返信を待たずにノートパソコンを閉じる。スリープモードにして、洗濯物を干しに行つた。

◆
洗濯物をベランダに干してリビングに戻ると、丁度アリアが起きて

きたところだつた。

「ふあああ……」

かわいらしいあくびをかみころし、ソファに座るアリア。低血圧なのかまだ寝ぼけているようだ。寝間着にしてるキャミソールの肩紐がずれているのも気にせず、ボケ一つどどこかを見つめている。

俺はアリアの目覚まし代わりに砂糖とミルクをたっぷり入れたインスタントのコーヒーを作つて手渡してやる。

「ほら、アリア」

「ん……？　ああ、ありがと、レオン」

俺からコーヒーを受け取つたアリアはカツプに口を付けてちびちびと飲み始めた。これで少しは目が覚めるだろう。

「じゃ、俺はキンジを起してくるからな」

「ん」

アリアにそう言つてリビングを出る。寝室へ向つて仕掛けたトラップを解除し、金次を起す。

「おーい、キンジ。そろそろ起きろー。もう7時だぞー」

何度か呼びかけると、目を擦りながら金次が目を覚ました。こいつも朝は低血圧で寝起きはだいたい機嫌が悪いんだが、アリアのこともあつてか普段よりさらに機嫌が悪いようだ。

睨むようにアリアが寝ていたベッドを見上げ、ため息を吐きながら金次が俺に訊ねてくる。

「あいつは……？」

「アリアなら少し前に起きてきて、今はリビングでコーヒー飲んでるよ」

「…………まだ居やがるのか……」

「ああ。当分はずつと、おまえの周りに付いてまとうつもりなんだろうさ」

「…………はあ、勘弁してくれよ……」

閉まつているカーテンを開けて朝日を部屋に取り込む。窓を開け放つて空気を入れ替える。

「まあ、とりあえず制服に着替えてリビングに来いよ。お前の分の朝

「……ああ、助かる」

……そういえば。アリアのヤツ、制服はどうするつもりだ？ 昨日と同じモノ……は女の子として着ないと思うだろうし、持ち込んだトランクの中に替えの制服が入っていたりするのか？

……。

……一応、トランクを持つていくか。

トランプ柄のトランクを手に、俺は寝室のドアを開けながら金次のほうに振り返り、

「アリアの着替えシーンを見たいなら脱衣所カリビングの扉を開ける際、気配を殺してノックをしないで开けろよ」

「誰があんなデコチビの着替えなんか見たがるかつ！」

マジギレで返す金次。おいおい、単なるジョークだろ。女のことになるとほんと余裕がないヤツだぜ。



アリアと金次がそれぞれ武偵高の制服に着替え、リビングに集まつたところで今朝方買つてきた朝食をテーブルに用意する。

今朝の朝食のメニューは皆別々で、

金次が、白雪さん特製のタケノコ弁当。

アリアが、今朝俺が下のコンビニで買つてきたももまん（もものかたちをしたただのあんまんで、アリアの大好物）5つ。

俺が、サンドウィッチ3パックにハンバーグ弁当がひとつ、アメリカンドッグ1本に、から揚げ棒2本、肉まん3つ。

——というラインナップだつた。

ちなみに今朝、俺が金次へと買つてきた『ウナギまん』は白雪さんの弁当が残つていたので、昼食に回された。

俺と金次が並んでテーブルの片側につき、その反対側にアリアが座つて朝食を食べているわけだが、

「いつ見ても胸やけしそうになる光景だな」

休むことなくももまんを次々に口へと放り込んでいくアリアを見るのは、結構くるものがある。よくあんな甘つたるいモノをいくつも続けて食えるものだ。見てるだけで口のなかが甘く思えてくる。

「……毎食フードファイター並みに食べるおまえが他人に言つていいようなセリフじゃないと俺は思うぞ」

「ん？ まあ、それもそうか」

ジト目の金次にそう言われ、自分の目の前に置かれた朝食を見る。確かに、ひとり分を遥かに超える量の食料だ。自分でも、よくこんな大量に食べれるな、と思うが、全部訓練で消費するエネルギーだからなあ。食わないと動けないし、一応まだ成長期だからな。1ヶ月の消費はかなりかかるが、こればっかりは仕方がない。

そんな大量の食事を摂取する俺だが、食べるスピードも早く、比較的に普通の量を食べている金次やアリアとほぼ同時に食べ終わつた。いつものようにコンビニ袋の中にゴミをまとめ、ゴミ箱へと捨てる。

「さてと……じゃあ、俺は先に学校行くな」

あらかじめ用意していた武僧高の学ランをシャツの上から羽織り、壁に立てかけている日本刀が入った竹刀袋を肩にかける。ソファの上に置いた学生カバンを空いているほうの手に持つて、リビングのドアを開ける。

「お、おい待てレオン！ このデコチビも持つていけ！」

「なっ!? 誰がデコチビよ！ このバカキンジ！」

「誰がバカだ！ つて、それよりほら、レオンに付いて先に登校しろよ」

「なんですよ」

「なんでも何も、この部屋から俺とお前が並んで出てつてみろ？ 見つかつたら面倒なことになる。ここは一応、男子寮つてことになつてんだからな」

「うまいこと言つて逃げるつもりでしょ！ 男子寮で見つかることが面倒なら、あたしとレオンが一緒に行つても何もかわらないじやない！」

「それは……ほら、レオンのヤツは巨乳好きで有名だから……。おまえと一緒に見つかったてもクエスト受けてる関係だとかで誤魔化しやすいだろ」

「それどういう意味よ！　あ、あたしの胸が小さいつて言いたいわけ!?」

「そ、それは……」

……背後で金次とアリアの言い争う声が聞えているが、無視して足を前へ踏み出す。

「あ、おい！　レオンっ！」

「まだ話は終わってないでしようが！　このバカキンジ～！」

「ちよつ!?　銃は……！」

「すきゅぎゅん！」

……7時半のバスには乗れそうだな。



金次が疲れた顔でアリアと一緒に登校してきた、その日の午後。午前中に行なわれる一般教科を終えた俺は、探偵科の施設へと向ついた。

本来なら今月中に行なわれるクエストのために強襲科で訓練しなければいけないのだが、金次からの依頼があつたからだ。

探偵科の施設内にあるコンピュータルームに入室する。探偵科のコンピュータルームは依頼の内容流出などといったトラブルを防ぐため、席は防弾性能がある強化プラスチックの仕切りで区切られ、簡単にはパソコン画面を覗き見れないようになっている。

見かけこそネットカフェに近いそこで、一番奥の席に設置されるパソコンを起動させる。すぐにネットを開いて、グーグル先生に教えを請う。

グーグル先生が見つけ出して着てくれた、アリア関連のサイトをひとつクリックする。

「……むむ、すごいな」

アリアの写真一枚3000円からで、高いものとなると軽く数万円を越えるらしい。特にフィギュアスケートやチアリーディングのポラ写真は人気があるようで、万単位で取引が行なわれているようだ。この前開催されたオークションではスク水姿の写真に11万円の高値がついているそうだ。

一緒にパーティを組む武偵としては人気のないアリアだが、その他ではかなりの人気があるらしい。特に男子生徒から人気があり、一部後輩の女子生徒からも高い人気があるとか。

「それにしても、フィギュアスケートとかチアリーディーリングの授業つて……この学校は大丈夫なのか？」

しかもその授業風景を普通に盗撮して売りさばいてるし、犯罪を取り締まるべき武偵が犯罪を起してるじゃないか。

まったく……けしからんヤツらがいるものだ。

……いや、それにしてもよく撮れてるな。この写真を撮ったのは諜報科の生徒だろうか？ なかなかいいアングルで撮れている。しかし、麗のチア写真とは……。これは戦兄として買っておかないといやいや、ネット上から削除しないと……。だが、それにしても大きな胸だ。これで高1だなんて信じられない。戦兄という立場じやなかつたらこの乳の魔力の前に俺は屈していただろう。……あいつを戦妹にしたのもそれが少しだけ関係しているわけだし。

「ヤツホー、レオポン！ 何熱心に見てるのかなあー？」

「——つ！」

背後からの声に俺は即座に戻るボタンをクリックする！ そして丁度画面が切り替わったところで、後ろから覗き込まれた。

「えーっと、なになに……神崎・H・アリアについて？ むー……理子りんという美少女がありながらアリアのこと調べるつてどーいうことなのかなあー？ ねえ、レオポン」

「頬っぺたを抓つてくるな、理子。アリアを調べてるのは、あくまでキンジからの依頼だからだよ」

「キーくんの？」

「ああ。なんでも付きまとわれて困つてゐるそうでな。探偵科でも強襲科によく行く俺に、アリアについて調べてきて欲しいつて頼まれたんだよ」

そう説明しながらアリアが所属しているロンドン武偵局のサイトをクリックする。アリアの項目を捜してクリックし、公式で公開されている情報をパソコン台の下に設置された印刷機で印刷していく。
……何とか誤魔化せたようだ。

理子が俺の首に両手を回しながらつぶやいてくる。

「へー、そなんだ。じゃあ、理子も調べるの手伝つてあげようか?」「それは……俺としては助かるし、おまえのパソコン技術は勉強になるが……いいのか?」

「うん! 一緒に受けてるクエストはもう洗い出しも終わつて作戦考えてるところだからねー。この理子りんにとつてアリアを調べるぐらいなんてことないんだよ」

大きな胸を前へ突き出して得意げにそう言うと、理子は仕切りと椅子の間を通つて俺の前へやつて来くる。椅子に座つている俺の膝の上に腰を下ろしてきた。

「おい」

そこは彼女だけの特等席だぞ。……まあ、俺に彼女なんていたことないけどさ。

「えーとね、アリアを調べるなら彼女の出身であるイギリスのサイトでググるのが1番効率的でねー」

膝の上からどくつもりのないらしい理子は俺の声を無視して検索をかけていく。英語で書かれたサイト名をクリックし、次々にアリアの情報を表示していった。

本来、俺が受けた依頼なので、俺が解決しなければいけないのだが……まあ、いいか。どうせ金次からの依頼だし。理子の技術を見るのは勉強になる。時間短縮にもなるしな。

膝からどかすことを諦め、俺は理子の細い腰に両手を回す。シートベルトの代わりのように理子の腹の前で軽く手を組んだ。

これで落っこちたりしないだろ。……他意はほとんどない。あつ

ても多くて3割程度だ。

理子は左右に体を揺らし、鼻歌を口ずさみながらノリノリでパソコンを操作していく。

「じゃあ、アリアの情報印刷していくねー」

「ああ、キンジのヤツは英語読めないから日本語のヤツも印刷してくれよ」

「んーっ、つまり英語で書かれてるヤツも一緒に混ぜていいくことだよねえ？ レオポン、キーくんが英語読めないのわかつて渡すとかひひどーい」

「読めないあいつが悪いんだよ。それに、そういう理子だつて俺に言われる前から英語で書かれてる資料印刷してるじゃねーか」「だつてそつちのほうが面白そうでしょ！」

ニッコリ笑つてポチッとマウスをクリックする理子。ふつ、さすがは俺のパートナー。よくわかつてやがる。

「これもキーくんに見せたらどうなるかなあ？」

「喜ぶだろうな、あいつなら。いや、喜んでもらわないと俺が困る」「むむつ？ それってどういう意味で？」

「は？ どういう意味？」

聞き返された意味がわからず理子に訊ね返すと、理子は俺のほうを振り返り、正面から顔を見据えてきた。

「どうしたんだ、いきなり」

「ねえ、レオポン」

いきなり、マジな表情になる理子。その突然の変化に俺は戸惑ってしまう。

「……なんだよ？」

「レオポンは、アリアのパートナーにならないかつて誘われたんだよね？」

「ああ。断わつたけどな」

「どうして？」

「どうしてつて……。前にも話したと思うが、あいつと俺は同じタイプの武僧で、アリアが求めてるパートナーには該当しなかったからだ

けど……？」

「……だったら。該当してたら？ レオポンはアリアのパートナーになつた？」

「それは……まあ、なつたかもしれないし、ならなかつたも知れない。出会い方とかでそのつど変わるもんだし。そもそもその話はもう終わつた話だろ？ 今さら考えてなんになるんだよ」

ポンと理子の頭に手を置く。……なんだか今日は変だな、こいつ。手触りのいいハチミツ色の金糸をなでていると、理子は顔を上げ……あ、これ昨日のデジヤブか？

「アリアが好きなの？」

「……は？」

昨日アリアに訊ねられたこととまつたく同じ質問を理子にされて呆ける俺。理子はそんな俺から視線を外し、これまた昨日のアリアのようにつぶやき始めた。

「レオポン、強襲科行くときはよくアリアの訓練に付き合つてるし、しつこく付きまとわれても本気で突き放さなしたことないし……さつきだつて、アリアのファンサイトなんか見てた」

み、見られてたのか！？

「あ、あれは……こんなもんもあるんだなつて興味本位で見てただけで……」

「でも理子が声かけたらすぐに閉じたよね？ それってやましいことがあつたからじゃないの？」

「それは……」

言い訳したいが後輩……しかも戦妹の盗撮写真を見ていたからだなんて口が裂けても言えるわけがない。というが、今日の理子は本当にどうしたんだ？ いつもはこういうことをマジなテンションで聞いてくるヤツじやないのに……。

「レオポンはアリアのことが好きなの？」

「す、好きが嫌いかで聞けば、好きの分類に入る……が、あくまで人間的にだぞ？」

「じゃあ、恋愛対象としては？」

恋愛対象つて……おいおい。

「それはないな。俺は口リコンじゃないし、アリアはタイプじゃない」
「いうなれば俺にとつてアリアは手の掛かる妹のような存在だと思う。性欲の対象としては大きく俺のストライクゾーンから離れてるし、実際に全裸見てもほとんど反応しなかつた。やつぱり胸だよな、胸。AAはいくらなんでも性欲湧かない。

「へえ、そなんだ」

「……なんでニヤニヤしてるんだよ？」

「べつ、別にニヤニヤしてないよ。もうレオポンつたら、ふんふんガオーダぞ？」

「いや、それは意味わからない」

「むふふー、じやあちやちやつと印刷していくねー」

くるんと回つて画面に向き直ると、理子はゞ機嫌で印刷を開始していつた。

「……さつきのはいつたい何だつたよ、おい。

「あーそれとレオポン」

「今度は何だよ？」

「アリアの情報は理子が調べたんだから、キーくんから貰う報酬、理子も貰つていよいよね？」

「……ちやつかりしてやがるな、まつたく……」

「むふふー」

ゞ機嫌で微笑んでやがる理子の頭をぐりぐりと髪型を乱すように撫でまくつてやつた。



翌日の放課後。俺は金次を連れて女子寮の温室へと向つていた。

「なんで女子寮なんだよ？」

「昨日説明しただろ。おまえに引っ付いて寮の部屋にいるアリアの前じや情報を渡せないし、持つて帰れないから、情報まとめたファイルを理子に預けて他の場所で渡すつて」

「だからって女子寮はないだろ。見つかつたらどうするんだよ？」

不機嫌なことを全面に出して歩いてる金次。待ち合わせ場所が女子寮の温室であることが気に入らないらしい。

「心配しなくてもそう簡単に見つかねえよ。いつも人けがない場所なんだからさ」

「むう……」

やつと黙ってくれた金次だが、相変わらず不機嫌そうな顔で周囲を警戒していた。健全な男子高校生なら一度は憧れるだろう女子寮訪問なのに、おまえはなんでそんなに嫌がってるんだよ……。

「理子」

前もつて待ち合わせしていた通り、女子寮の前の温室に理子はいた。

「レオポン！」

バラ園の奥で、理子がくるつと振り返り、俺の隣に立っている金次を見つけて手を振った。

「ヤツホー、キーケン！」

「相変わらずの改造制服だな。なんだその白いフワフワは」

「これは武偵高の女子制服・白ロリ風アレンジだよ！ キーケン、いいかげんロリータの種類ぐらい覚えようよお」

「キッパリと断わる。つたく、お前はいつたい何着制服を持つてるんだ」

指を折り折り改造制服の種類を数え始めた理子を金次は呆れながら見下ろしつつ、鞄から紙袋で厳重に隠したゲームを取り出した。

「理子こっち向け。いいか。ここでの事はアリアには秘密だぞ」

「うー！ らじやー！」

びしつ。

理子はキヲツケの姿勢になり、両手でびしつと敬礼のポーズを取る。

苦い顔になつた金次が紙袋を差し出すと、理子は袋をびりびりと破いていった。ふんふんふん。荒い鼻息。まるでケモノだな。

「うつづつわあーー！ 『しろくろつ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』

だよおー！」

ぴょんぴょんと飛びはねながら理子が両手でぶんぶん振り回しているのは、R—15指定、つまり15歳以上でないと購入できないギャルgeeだ。

そのギャルgeeを持って飛びはねているところを見てわかるとおり、理子はオタクだ。それも、世間一般的のオタク女子と違い、女の子なのにギャルgee好きのマニアという趣味の持ち主なのだ。中でも特に自分と同じようなゴスロリ系のヒロインにかなりの関心を示す。もちろん理子も俺たちと同じ年なのでR—15歳以上であるこれらのゲームも買うことはできる。できるのだが理子は背がアリア並みに低いため、店員さんには中学生ぐらいだと判断されてしまい、R—15歳以上のゲームを売つてもらえないことが多いのだ。先日も理子はゲームショップも兼ねている学園島のビデオ屋でR—15のゲームを売つてもらえなかつたとぶつぶつ言つて、今度俺が代わりに購入してやる予定だつたのだが、今回はアリアの情報を調べた報酬として金次に買つてもらつたというわけだ。

それにしてお姉さんにお姉さんに、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながらギャルgeeを差し出す金次を少し離れた位置から眺めるのは楽しかつたなあ。某動画サイトに『初めてのギャルgee購入』という名でアップしてやりたいと思つてしまつたぐらいだ。

「あ……これと、これはいらない。理子はこういうの、キレイなの」

そう言つて金次に『妹ゴス』の2と3を突きかえす理子。

「なんでだよ。これ、他と同じようなヤツだろ」

「違う。『2』とか『3』なんて、蔑称。個々の作品に対する侮辱。イヤな呼び方」

不機嫌そうにつぶやく理子。金次はまつたくわけがわからないそ
うにしているが、

「じゃあこれは俺が貰うな」

かくいう俺も理子と同じオタクだ。アメリカ人と日本人のハーフとしてアメリカで暮らしていた頃、日本のアニメに触れて以来、オタク文化に足の先まで毒されてしまつていたのだ。ひと昔前は本当に

酷い中二病患者で、『キング・オブ・ハート』という2つ名もその名残であった。

「……レオポン」

ゲームを取った俺を見上げてくる理子。

「ん？ 理子はいるないんだろ？」

「そーだけど……」

口を尖らせる理子。俺も理子の続編嫌いの理由は知らないが、まあ、

「俺は続編でもなんでも自分が気に入ればそれでいいからな。ワン1はあとで買うとして。理子がいるって言うならこれは俺が貰つとくよ。キンジもいいだろ？」

「ああ。どうせ返されても俺はしないしな。理子に渡した分も含めて全部くれてやるよ。そのかわり、こないだ依頼した通り、アリアについて調査したことときつちり話せよ？」

「……うん」

……お前がいるないゲーム受け取つたぐらいでテンション下げられても俺が困惑するだけだぞ、理子。

「よし、それじゃあととどとしろ。俺はトイレに行くフリをして小窓からベルトのワイヤーを使って脱出してきたんだ。アリアにバレて捕捉されるのは時間の問題なんだからな」

金次はそう言うと、周囲を警戒してから近くの柵に腰を下ろした。「トイレに行くフリつて……確實にもうバレてるだろ。たとえバレてなくても便秘扱いされんじやねーか？」

「う、うるせえ！ 俺だつて四六時中付きまとわれてなかつたらおまえみたいに連絡取り合つて外で合流したわ！ それが出来なかつたからわざわざトイレに行くフリして脱出してきたんだろうがつ」

「ああ、はいはい。俺が悪かつたからそういう怒鳴るな」「ちつ……」

そういうストレス溜まつてやがるなこいつ……。

理子はゲームをなぜか服の中にしまいつつ、ちょっとジャンプしながら金次の隣に腰を下ろした。金次は柵に腰を下ろしても足がつい

てるが、理子は足がつかないらしく膝下をぶらぶらさせている。

2人が座つたところで、俺は金次から1番遠い理子の隣側に腰を下ろした。……亦モ疑惑が出ているヤツの隣にはあまり近づきたくないんだよ。

「ねーねー、キーくんはアリアのお尻に敷かれてるの？ カノジョなんだからプロフイールぐらい自分で直接聞けばいいのに」

「カノジョじゃねえよ」

「えー？ 2人は完全にデキてるつて噂だよ？ 朝、キンジがアリアと腕を組んで寮から出てきたっていうんで、アリアファンクラブの男子が『キンジ殺す！』って大騒ぎになってるんだもん。がおー」

「指でツノをつくらんでいい」

心底疲れた様子で大きなため息を吐く金次。昨日と同じで今朝も家出るときはアリアとケンカしてたみたいだったのに、そのあと腕組んで出てきたのか。仲がいいのか、悪いのかよくわからないヤツらだ。

「そういうや俺のところにもお前の暗殺依頼が入つてたなあ」

「なつ!? それはちゃんと断わったんだろうな?」

「当たり前だろ。……報酬もそこまでよくなかつたし」

「確か新作のゲームソフト5本だつたけ？」

「そうそう。さすがにゲームソフト5本じゃ同居人をころ……いや、誰に頼まれようと親友を殺すはずがないだろ」

「おい、報酬がよかつたら受けてたように聞えたぞ」

「む？ そんなこと言つたか理子？」

「んー？ 言つたような言つてないような？」

「なら言つてない、だな」

「そーだね。言つてないね」

「あはははは」

理子を一緒に声を出して笑う。

「おまえらなあ……」

手を顔に当てて長いため息を吐いてる金次を横目で見ながら楽しんだあと、理子がニヤニヤしながら金次に訊ねた。

「ねえねえ、それでアリアとはどこまでしたの!?」

「どこまでつて」

「えつちいこと」

「バカ！ するか！」

「嘘つけえー！ 健全な若い男女のくせにいー！」

理子は満面の笑みで、金次のわき腹を肘で突く。

「……おまえはいつも話をそつちの方向に飛躍させる。悪いクセだぞ」

「ちえー」

金次の返答につまらなそうに理子は口をすぼめる。つまらなそうな理子に話題提供として金次のヤツがこの前アリアのシャワー中に服を漁つていたことを話すのもありだが、それだとアリアの全裸を俺も見たことがバレるのでここは黙つておこう。

「それより本題だ。アリアの情報……そうだな、まずは強襲科での評価を教える。資料はお前が持つてるんだろ、理子」

「はーい。んと……まずはランクだけど、Sランクだつたね。2年でSつて、片手で数えられるぐらいしかいないんだよ。理子よりちびっこなのに、徒手格闘もうまくてね。流派はボクシングから間接技までなんでもありの……えつと、バーリ、バーリ……」

「バーリ・トウード」

「そうそうそれ。それを使えるの。ありがとね、レオポン」

「どういたしまして。あと、ちなみにイギリスではバーリ・トウードを縮めてバリツと呼ばれてるそうだ」

「そうか……。じゃあ、他にアリアの得意なことや特技はどうだ？ レオンはよく強襲科でアリアと訓練してるつて不知火から聞いたぞ」「まあ、してるな」

……先日、そのことを理子にマジなテンションで突っ込まれたばかりだからここでは蒸し返して欲しくなかつたが……仕方がないか。「とりあえず、拳銃とナイフは天才の領域。どつちも二刀流で使って、生まれたときから両利きだそうだ」

「それは知つてる」

「……黙つて聞いてろ、バカキンジ。——アリアはその優れた二刀流の腕前から『双剣双銃』という2つ名が付けられてるほどの実力者で、所属はロンドン武偵局。14歳の頃からプロの武偵に混じつて仕事をこなしていく、その間に関わった99もの事件をすべて1回目の強襲で解決してるヤツなんだよ」

「なんだ……それ……」

アリアの経歴に信じられないという表情を浮かべる金次。

「双剣双銃のアリア。笑つちやうよね。双剣双銃だつてさ」

「理子……おまえの笑いどころはよくわからないが……アリアがすごいヤツだつてことはよく理解した」

そう言つて頭を抱える金次。金次からしたらバケモノにストーカーされてるようなものだからなあ。これは力づくじやどうにもならないことを悟つたか。

「あー……他には。そうだな、体质とか」

あからさまに話題を変えてきた金次に、理子は資料をパラパラと捲りながら言う。

「うーんとね。アリアって、お父さんがイギリス人とのハーフなんだよ」

「てことはクオーターカ」

「そう。イギリスの方の家がミドルネームの『H』家なんだよね。すごく高名な一族らしいよ。おばあちゃんはDame……まあ、本物の貴族様つるんだつて」

「ちなみにDameはイギリスの王家が授与する称号で、叙勲された相手が男性ならSir、女性ならDame……まあ、本物の貴族様つてことだな」

「マジかよ……あいつ、貴族だつたのか」

「うん。でもアリア自身は『H』家の人たちとうまくいってないらしいんだよね。だから家の名前を言いたがらないんだよ。理子は知つちやつてるけどー。あの一族はちよつとねえー」

「教える。ゲームやつただろ」

「理子は親の七光りとかそういうの大っキライなんだよお。まあ、イ

ギリスのサイトでもググればアタリぐらいはつくんじやない?」

「……レオン」

「渡す資料にちゃんと書いてあるから安心しろ、キンジ」

「理子」

「ほいほーい」

ファイルにまとめられた書類を金次に手渡す理子。金次はファイルから書類を取り出してパラパラと捲り、

「おい、なんで英語で書いてあるんだよ」

「そりゃあイギリスのサイトから情報を引き出して印刷したヤツなんだからしようがないだろ」

「嘘つくんじやねーよ! タイトルに『H家について』って日本語で書いてるくせに内容が英語って確実におまえらの悪戯じやねえかっ!」「悪戯つて……。俺たちは英語が苦手なお前のことを心配してわざわざ英語で印刷したというのに……」

「うえーん、酷いよキーパン」

「あークソ。ワザとらしく泣きまねしてんじやねえよ……」
「……む、まるでノッてこないか。

「まあ、英語の文章でもネットに打ち込んで翻訳かけば読めるし、勉強にもなるだろ?」

「そうそう。サイトに直接翻訳かけるのもいいしねー」

「……英語が得意なお前らだつたら問題ないだろうが、英語が苦手な俺は探したり打ち込むだけでもかなり疲れるんだよ」「そこはがんばれやー!」

と、金次の背中を叩こうとしたらしい理子の手が——
ぶんつ。

思いつきり空振り、ばし、と金次の手首をぶつ叩いた。

「うおつ?」

がちや。

その勢いで金次の腕時計が外れて足元に落ちた。

金次が拾い上げると、金属ハンドの三つ折れ部分が外れていた。
あーあー壊れてら。

「うあー！　ごつ、ごめえーん！」

「別に安物だからいいよ、台場で1980円で買ったヤツだ」

「だめ！　修理させて！　理子にいっぱい修理させて！　依頼人の持ち物を壊したなんていつたら、理子の信頼に関わっちゃうから！」

そう言つて金次から腕時計をむしりとると、理子はセーラー服の襟首をぐいーっと引っ張つて開け、すっぽと胸の間にそれを入れてしまつた。

……ふむ、相変わらずのいい乳だ。理子のお気に入りであるハニーゴールドの下着も似合つてる。

「あー、レオポンが理子の胸ガン見してるー。もう、えつちなんだからー」

「こればかりは仕方がないんだ。男は、誰だつてエロいんだよ」「かつこよく言つてもかつこついてないよおー。まったくもお」

頬を膨らませる理子をかわし、金次のほうに顔を向ける。

「それでキンジ、他には何かあるか？」

「……あ、いや、もうそのぐらいでいい。じゃあ、俺はもう行くから」

そう言うと金次は立ち上がり、早足で温室から出て行つてしまつた。

金次のさつきの反応……まさかだとは思うが、理子の胸を見て男の部分が反応したのか？

「どうしたのレオポン？　急に考え込んだりして」

「ん……。いやな、ここ最近……というか、探偵科の寮で同室になつてから俺はずつと、キンジのヤツがホモだと警戒してたんだが……」

「ぶはっ!?　き、キーくんがホモお!？」

「おいおい、噴出してまで驚くことか？　見るからに怪しいってのに」「だつてキーくんがホモとか……。レオポンはいつたいどーしてキーキーくんがそだつて思ったの?」

「そりやあ、女を極力さけてるからだよ。健全な男子高校生のクセしてエロ本やエロビデオ、エロDVDといったものは本当に何一つ持つてねえし。恋愛ドラマを見ても濡れ場が始まつた瞬間チャンネルを変えやがる。ものすごく純情なヤツで、エロいのが苦手なヤツだとも

考えてみたが、あいつの場合は女を嫌つて遠ざけているように見える。1年のとき、武藤や不知火と話してるときに白雪さんやおまえがやつて来たらあからさまに金次は嫌な表情を浮かべていたからな。入学して強襲科のときに同じ寮になつて、探偵科の寮に移るまでに抱いていた疑惑が、また同じ寮になつたことで確信に変わりかけている……つて感じだ」

「そ、そなんだ……」

口を両手で押さえてぶるぶると震えてる理子に、俺は自分の推理を話す。

「おそらく、俺が推理するにキンジのヤツはホモだ。それもありかけている途中で、男子が気になつている途中といつたところか？ これで俺や武藤、不知火とか近しい友人が女子と仲良くしたり付き合つたりして、キンジの心に嫉妬が芽生えれば……そこから恋愛感情に発展してしまいそうで、俺は怖い！」

ホモになつた同居人を想像し、俺は思わず自分の体を抱きしめる。理子はそんな俺を落ち着かせるように腰を抱き、やさしくつぶやいてきてくる。

「だ、大丈夫……ぶぶつ……うん、だいじょうぶ……ぶぶつ……大丈夫、だよ、うははつ、う、うんん……。大丈夫だよ、レオポン」

「……理子、俺の尻は狙われないよな？」

「ぶはっ！ ……つ、……くつ、んんつ……はあーつ、はあーつ。だ、だいじょうぶだつて！ ね、狙われるとしても、さ。最初はあの2人だと思う、からね。だから、レオポンは大丈夫だよ。うん、よーし、よーし」

手を伸ばして理子は俺の頭をなでてくれる。……ああ、こうして頭をなでられながら理子のバニラのような甘い匂いを嗅いでると、金次_{ホモ}頭への恐怖心が薄れていくようだ。

「それにしても面白……いや、なんでもないよ、レオポン」

完全に落ち着いてから、俺は金次とアリアが待つ自宅へと帰宅した。

そして、帰宅してリビングの扉を開けると、

「……1回だけだぞ」

「1回だけ？」

「戻つてやるよ——強襲科に。ただし、組んでやるのは1回だけだ。戻つてから最初に起きた事件を、1件だけ、お前と一緒に解決してやる。それが条件だ」

……ソファに倒れたアリアに向つて、金次がそう言つていたところだつた。

え？ これなんて状況？

「……」

「だから転科じゃない。自由履修として、強襲科の授業を取る。それでもいいだろ」

アリアはソファから上半身を起こし、視線を合わせないよう窓の外に顔を向けている金次のほうを見て、何かを考え始めたようだ。

しばらく沈黙が続き、俺もリビングの扉に手をかけたまま固まつていると、ようやくアリアがうなずいた。

「……いいわ。じゃあ、この部屋から出てつてあげる。あたしにも時間がないし。その1件で、あんたの実力を見極めることにする」

「……どんな小さな事件でも、1件だぞ」

「OKよ。そのかわりどんな大きな事件でも1件よ」

「わかった」

「ただし、手抜きしたりしたら風穴あけるわよ」

「ああ。約束する。全力でやつてやるよ」

自信たっぷり金次がつぶやくと、アリアはソファから立ち上がりつた。そこでやつとりビングの扉に立つている俺に気がついたようだ。

「レオン……」

「よお、アリア」

「さつきの話、聞いてたんでしょ。泊まるのはやめて今日から自分の寮に帰るわ」

「ああ、そりやあよかつた。さすがの俺も女の子と何日も同棲なんてことになつたら気が休まらないからな」

「……迷惑かけたわね」

「なあに、女の子の寝顔やシャワーシーンが見れただけで十分元は取
れてるさ。おまえも、これで少しは落ち着けるだろ」

リビングのドアを開け、横に避ける。アリアは「ふんつ」小さく鼻
を鳴らして俺を横切り、荷物が置いてある寝室へと向った。

四六時中付きまとわれないために、あえて相手の条件の一部を受け
入れたか。条件決めの際に『どんな事件でも1件』という金次にとつ
て都合がいい条件を出してるし。意外と策士だな、金次。

まつでも、とりあえずは――

「おかえり、キンジ。強襲科はキミの宣戦復帰を心待ちにしていたよ
「……あくまで一時的だ。俺は戻らねえよ」

どんなかたちであれ、強襲科Sランク武僧の宣戦復帰はよろこばし
いことだ。

第4話

金次が一時的でも強襲科へ戻ると決めた翌日の昼。同じく自由履修で強襲科の訓練施設へ向つていると、後ろから声をかけられた。

「先輩～！」

「おお、間宮か」

声のほうを向き直つて視線を下へと落とすと、アリア並みの幼児体型で茶髪をツインテール結わえた間宮あかりがいた。いつもながら明るくて元気なヤツだな。

「今日も強襲科なんですか？」

「まあな」

間宮の問いにうなずいて片手で頭をなでる。……アリアといい、こいつといい、理子といい、ほんと丁度いい高さに頭があるよな。まあ、それはそうと相変わらずこのアホ毛は治らない。

「こ、こんにちは。レオン先輩」

「よお、ライカ」

間宮の後ろから挨拶してきた『火野 ライカ』に挨拶を返す。

ライカは間宮と同じ強襲科の武偵で、武偵ランクはBの生徒だ。女の子にしては高めの身長に、スタイルのいい体と……幼児体型のアリアや間宮からしたら何とも羨ましいだろう体つきをしている。髪型はクセのある金髪を強引にポニーtailで、瞳の色は澄んだエメラルド色。

「いつ見ても綺麗で羨ましい金髪だな、ライカ」

「――つ。そ、そんなこと……ないですよ」

顔を赤らめ、金色ponytailの尻尾を手で弄ぶライカ。俺もライカと同じハーフだというのに、俺の髪の毛の色は金色に黒をぶちまけて混ぜた、まるでプリンのような色をしている。顔を覚える前に死んだ両親からそれぞれ受け継いだ遺伝子がでたからといつても、髪色に関してはどちらか一方の遺伝子で統一して欲しかった。

「俺もライカみたいな金髪だつたらよかつたのになあ」

「あ、あたしは先輩の色……す、すすす……」

「あたしはプリンみたいで好きですよ！」

にぱーっと笑顔で言つてくれる間宮。

「ありがと、間宮。でも涎を垂らしながら俺の頭を見るのはやめてくれ」

「じゅるる……す、すみません」

「ちつ……あかりのヤツめ」

「どうしたんだ、ライカ」

「別に……なんでもないです」

ツーンとライカはそっぽを向いてスタッタを先に歩いていつてしまう。俺、何かしたか？



強襲科の訓練施設で決められたノルマをこなしたあと。筋力トレーニングをしに2階のトレーニングルームへ向つていると、通路で間宮とライカにばつたり出くわした。どうやらこいつらも筋力トレーニングをするらしい。

ライカは腕立て伏せをするための器具へ向い、間宮は自転車のような器具に跨る。俺も奥にある棚から30kgダンベルを2つ持つて、下から上へと上げて上腕などを鍛え始める。あー……昔はすっごく重かつたのに、少し力を入れるまつたく重さを感じない。

がしゃがしゃと音を鳴らしながら何度も繰り返していると、ライカの腕立て伏せの回数が100を迎えたようだ。

ライカはそこで一旦休憩するらしく、そのまま寝転がるように、床に仰向けになつた。

「ブハーッ」

大きく息を吐いて、自転車のペダルを回し続ける間宮を見る。

「まあ、志乃が戦姉妹試験でいない間。あかりはあたしが独占出来るけどな……。——ウヘヘヘエー」

「……？」

ライカの奇妙な笑い声に後ろを振り返る間宮。間宮が首をかしげ

ているのに対してもライカはカメラマンがよく行なう、両手の親指と人差し指をくつつけて四角の枠を作つて間宮のお尻へ狙いをつけ、

「うわー、白木綿。しらコットン ガキッぽ」

「!?」

「白木綿……」

「先輩!？」

「ああ、ごめん」

ギラツと睨まれ、すぐさま目を逸らす。つぶやいたのがマズかったけど、俺は見てませんよ。ライカの声に反応しただけ。俺は立つてからスカートの中身なんて見えないから。

「はははは！ こりや『パンツ』というより、『ぱんちゅ』だぜ」

「ぐー！」

真っ赤になつてスカートを抑える間宮。トレーニング器具から飛び降りて、両手を上へつきだし、「コラーー！」と逃げるライカを追いかける。

ライカも間宮をからかうのが楽しいのか。

「はんちゅーー丸見えーー。キイーン」

と、アラレちゃんのような走りで間宮から逃げる。

間宮……。追いかけながら『バカラライカ』とか『ローアングラー』って叫ぶのはいいけど、『金払え』はないだろ。

元気よく戯れる2人に、ため息を吐きながらダンベルを棚に戻していくと、

「おい聞いたか？」

「金次が強襲科に帰つてくるつて!?」

「マジかよ！ 金次つて、遠山金次だよな？」

「強襲科の首席候補つて言われてたアイツか！」

という話し声が聞えてきた。どうやら金次のヤツが強襲科へ一時的にでも戻るという情報を掴んだらしい。

ライカも金次について知つていたのか、走るのを止めて立ち止まつた。……急に立ち止まるものだから追いかけてた間宮が背中に顔をぶつけたことは、スルーするようだ。

「……ライカ？」

「遠山金次……。あの人気が帰つてくるのか」

独り言のようにつぶやいたライカに間宮が訊く。

「金次……？ 誰それ？」

「2年の先輩。任務でいつもいなかつたし、あかりがインターーンで入ってきた頃、探偵科に転科しちゃつたけど……」

ライカは言う。言葉に畏れを含ませながら。

「去年は強襲科でSランク武偵だつた。入試で教官を倒したらしい。伝説の男だよ」

……伝説の男ね。

「い……1年でSランク！」

声をあげて驚く間宮に、ライカは言う。

「……プロ武偵に勝てる中坊なんて、バケモノだろ」

「……。バケモノ……」

ライカの言葉を聞いて小さくなつて怖がる間宮。
俺はそんな2人に近づき、

「あのー……俺もね、よく忘れられてるみたいだけど、Sランク武偵だからな」

「あつ……そういえば」

「……間宮。本当に忘れてたのか……」

「あ、いえ、その……す、すみません！ えつと、レオン先輩つて強襲科に着てもいつも他の人の訓練に付き合はか筋力トレーニングしてるから……わ、忘れちやうというか、そのですね……」

焦りながら何とか弁解しようとする間宮。間宮の言葉を聞いて、まあ、納得する。確かに模擬戦とかほとんどアリアアグらいとしかやらないし、それも最近じやあまりやつてないからな。そう思われても仕方がないか。

これじゃライカにも忘れられて……、

「ばつ、バカかおまえ！ レオン先輩はなあ、アメリカ……いや！ 世界でも上から数えたほうが早いほどの強襲科武偵なんだぞ！ それ忘れるとか……まったく、お前つてヤツは……」

「……ごめん……」

……どうやら忘れていたようだ。というか、聊か過大評価されているような……。

怒りの表情で詰め寄るライカに、涙目になってしまった間宮。俺は間宮から視線で助けを求められたので、話題を金次へと戻すことになった。

「間宮は金次の顔、知らないよな？」

「はい！ 知りないです！ あの、誰がその遠山先輩なんですか？」

「あつ、あかり」

ライカを無視して2階の通路の手すりへと身を乗り出した間宮に、俺は1階の人だから指差す。

「……ほら、あれだ。あの今死ね死ね言われてるヤツだよ」

間宮は手すりに体を乗り出して指差した方向を見る。

それにしてもすごい人気だな。探偵科に転科したというのに、いまだに多くの強襲科の生徒から歓迎受けてやがる。

「なんか想像と違う……」

そんな金次を見て間宮が小さくつぶやく。……おまえはいつたい何を想像してたんだ？

「そう見えるんだよな。上勝ちすると大手柄だから狙っている1年もいるけど……なんか勝ちなきそうな気がするんだよなあ」

「まあ、そりやあそだらうよ。俺も入学試験のとき、あいつだけは仕留めきれなかつたからな」

「ええ!？」

「先輩が倒せなかつたんですか!?」

俺の言葉に大声をあげて驚く2人。俺はそんな2人のリアクションが面白く、笑顔でうなずいた。

「ああ。普段は精々CランクからよくてAランクぐらいに見えるが、一度本気になればSランクでも上のほうの実力者になるからな。上勝ち狙うのは止めたほうがいいぞ」

「そんなに……」

「はい、あたしは勝てないケンカはしない主義ですから！」

言葉を失つてしまふ間宮に、ハハツと笑つてうなずくライカ。

それにも、あいつ……挨拶を交わすだけで授業時間が終わつてしまふんじやなからうか？

金次死ね死ねコールがなかなか収まる様子ない。

強襲科での訓練を終えたあと。俺は学生寮近くの公園で理子と会つていた。なんでもこの前受けたクエストで、犯人たちを捕らえるための段取りが決まつたそうだ。

前もつて近くのコンビニで買ったアイスを食べながら、理子から渡された極秘と書かれたファイルを開く。

ファイルには捕らえる予定にある構成員の顔写真や簡単な経歴、行動パターンが詳しく記載されていた。

「よく短時間でここまで調べたな、理子。正直、月末近くまでかかると思つてたぞ」

「ふふーん、この理子りんさまを舐めてもらちや困るよ、レオポン。この理子りんにかかればこの程度の暴力団の情報集めなんてヌルゲーレベルなのさあー」

理子は得意げに言つて、アイスの実というアメ玉タイプのアイス（俺のおごり）をころんと口に含む。

「だけどまあ……とつておきの作戦があるって言つてたが、何とも大膽な作戦だな」

「そうでしょそうでしょ！ 理子りん、寝る間も惜しんですつゞく頑張つて考えたんだからあ、レオポンは褒めていいんだよおー」「ああ、はいはい。よしよし」

「うー……ん、心が全然籠つてなーい！」

「これでも籠めてるよ、十分な」

そう言つてポンポンと頭を軽く叩く。実際、心を籠めて褒めてるんだけどな。態度には見せてやらないが。

俺は理子の頭からファイルへと手を戻し、さらにページを捲つて読

み込んで行く。

「1, 2, 3と3つの施設に立て続けに強襲を仕掛けていく電撃戦。作戦行動におけるリーダーは理子で、現場のリーダーは俺。ん？　おまえは現場には出ないのか？」

「うん。今回は作戦が作戦だからねえ。理子は襲撃かける建物が見える高層マンションから目視とハッキングした監視カメラを使って、常に構成員たちの監視して指示飛ばすこととしたよ。そつちのほうが効率もよさそうだし」

「まあ、それもそうか」

現場で行動するメンバーも実力、人数共にゆとりもあるし。作戦の特殊さからいつても統括役は完全に後衛に置くほうが安全だな。

「だけど、それにしても女子のメンバーが多くないか？」

男性メンバーが俺と不知火ぐらいしかいないじゃないか。

「ハーレムだね！　うれしいでしょ、レオポン」

「強襲かけるメンバーじゃなかつたら嬉しかつただろうよ。——ま、俺も麗とその取り巻き姉妹を参加させたから言えたことじやないか」もう一度俺は資料へ視線を落とし、ファイルされた情報を頭に叩き込んでいく。

「つて、おい」

「んー？　なにかなレオポン」

「腕……組んでくるなよ」

「えーっ、いいじやんべつにいー」

そう言つてニヤッと微笑み、顔を見上げてくる理子。

「おまえな……。そんなことやつてると周りから誤解されるぞ。つか、胸が盛大に当たつてるからな」

「もう、レオポンはすぐそういうこと言う。ほんとにえつちいなあ、レオポンは」

「自分から胸に腕を挟んでおいて誰がエツチだ。むしろエツチはおまえだろ」

「ひどーい、理子はエツチなんかじゃないよお」

理子はそう言いつつも、さらに胸を押し付けてくる。……かなり機

嫌いいみたいだな、今日の理子は。

「……はあ、まあいいか」

胸を押し付けられても、俺は別に迷惑だとは思わないし。むしろ、この感触が味わえることを褒美だと思うことにして資料を読みすすめて行ことにした。

「うふふ、ふふ、んん～……」

「……」

「ふふ、んふふふ～……」

「……」

「あんつ……もう、急に腕動かさないでよ、レオポン。ブラと擦れて痛いでしょ」

「……ワザとらしく耳元で囁くな、理子」

気になつて資料がまつたく頭に入らねえじゃねえか。

「えへへつ」

「笑つて誤魔化すな……」

「だつてレオポンの反応がおかしくて……あれ？」

「ん？ いきなりどうしたんだよ」

理子は目を凝らして広場の中央に植えられている木を見ていた。俺も気になつてそちらへ視線を向けて見ると、

「あれは……キンジか？ 木の上にいる、くのいちの格好したあいつは……確かキンジの戦妹で1年の風魔だつたな。つて、なんで間宮がいて、キンジと銃を向けてんだ？」

三すくみ……というか、金次＆風魔 対 間宮で睨み合っていた。

「むー……」れは止めたほうがいいか？」

「ダメだよ、レオポン！ セつかくおもしろそうなのに！」

「いや、そう言われてもな……」

仮にも間宮はよく訓練つけてやつてる後輩だし……。

「キーくんは甘々だから戦闘にはならないって！ ……たぶんけど。それよりせつかくおもしろそうなことが目の前で起きてるんだから盗聴しよーよ！」

……ん、んー……まつ、それもそうか。

「OK。じゃあ、このまま静かに様子をうかがうとするか」

「うん！」

一応ファイルを立てて顔を隠して3人の様子を覗くことにした。



武偵高の寮の近くにある公園で、金次が銃を向けながら、間宮に声をかける。

「お前、出身どこ中だ」

……え？ 訊くことそれ？

金次とその戦妹の風魔、そして間宮の3人から少し離れた位置で覗いていた俺と理子は、金次の言葉に首をかしげる。

「キンジのヤツ、間宮をナンパするつもりか？」

「んー……？」 いくらキーケくんでも銃を向けられながらそれはないんじゃないかなあー？ キーケくんって女嫌いで有名なんだし。それに、レオポンは間宮つて子の面倒よく見てるんだし、わかるんじやないの？

「面倒見てるつていつても、プライベートでの関わりなんてほとんどないからわからねーよ。普段は人に銃向けたりするヤツじやないんだけどなあ。キンジのヤツがラッキースケベでもやらかして、間宮にセクハラしたとかじやないか？」

「あー……それはありえそうだねえー」

俺たちがすぐ近くでそんな会話をしているなんて夢にも思つてないだろう3人は会話を進めていく。

「い、一般出身です。中3の2学期に武偵高付属中に転入してきまし

た」

「一般中か……」

間宮の返答に、金次はなぜか安心したように銃をしまう。

「風魔いい。コイツは大丈夫だ」

「御意」

金次の指示に従つて、木の上に登つていた風魔がクナイをしまう。

相変わらず時代錯誤というか、くのいちっぽいやツだな。制服もくのいちっぽく改造してゐるし、武器もクナイや煙玉だし。

間宮はその対応に自分が舐められていると思つたんだろう。銃を持つたまま立ち上がり、

「ぱ……一般中ぱんちゅうがなんだって言うんですか！」

顔を真っ赤にして金次に怒鳴つた。

——が、それと同時に間宮の背後から突然強風が吹きあげ、間宮のスカートを盛大に捲りあげた。

それは、木を挟んでベンチに座つてゐる俺たちからも見えて——、

「……白、木綿コットン……。確かに。パンツつていうよりぱんちゅだな」

「——ブハッ!? ぱ、一般中ぱんちゅうだけに、ぱんちゅつて？ あはつ、あははつ……わつ、笑わせないでよ、レオポン！ バレちゃうじゃない！」

「ああ、すまんすまん」

——と、さらに金次と間宮がやりとりは続いてゐるようで、

スカートが捲れている事に気づいた間宮が真っ赤になりながらもスカートを抑え、もう一度……。

「ぱ……ぱんちゅーが！」

——くつ！ だ、ダメ……笑つちゃツ！ わ、笑うな、俺ツ！

「ブ……ブツ……」

隣に座つてる理子は、間宮の言葉にますます笑いのツボを刺激されたようで、悶絶している。俺の腕に顔を埋めて体をビクビクと揺らして笑い声を漏らしていた。

……くつ、隣で笑われると俺まで声出して笑いそうに……。

「——なつ、なんなんだお前は！」

……え？ 金次？

間宮のパンツ……もといぱんちゅを見た金次はなぜか両手で両目を隠し、目が潰れたムスカさんのごとく「うわああああ」と叫んでいた。

「し、師匠ししゃく!?」

「うおおおおお……」

「お氣を確かに！ 傷は浅うござる！」

目を覆い隠しながら逃げていく金次。それを風魔が心配して追いかけながら、間宮から遠ざかつていった。

公園にひとり取り残された間宮。何とか再起動すると、怒った様子でどこかへ歩いていつてしまつた。

「……理子」

「あー、おかしかつたあ……。——つと、なにかな、レオポン」

「キンジは……もしかしたら、ロリコンかもしれない」

「ふえつ!?

驚く理子。まあ、驚くのもわかる。——だが、しかしだな。

「俺は見たんだ。キンジが間宮のぱんちゅに顔を真っ赤にしてたところを。まさかとは思うが、あいつが白雪さんや同世代の女を遠ざけている理由は……キンジのヤツが幼児体型専門のロリコンだからなんじやないか?」

「…………」

俺の推理を聞いて真剣な表情になつて黙つてしまふ理子。

理子は口り巨乳に分類される美少女だからな。何か心当たりがあるのかもしれない。

「はあ……」

ケツを掘られる心配は少なくなりそ่งだが、同居人がロリコンだつたとは……。

第5話

クラスメートであり、寮のルームメイトでもある友人の遠山金次にホモ疑惑だけでなく、新たにロリコン疑惑が浮上して数日。週の間に存在する祝日に、俺はひとりでオタクの聖地といわれる日本一の電気街、秋葉原へとやつて来ていた。

秋葉原の最寄り駅から出てすぐに広がるビル街。大小さまざまで建ち並ぶビルには、アニメや漫画のイラストやゲームや日々放送予定の新作アニメの広告がいたるところに掲げられていて、道行く人々のなかにはアニメや漫画のコスプレしている人や、大きなリュックにポスターをいくつも装備した人の姿がちらほら。なかでも元気いっぱいの笑顔で客引きするメイドさんたちは目を引いていた。

1年前に日本へとやつて来てからずつと変わらない秋葉原独特的の空気を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

常に人で溢れかえり、入り組んだ路地が多いことから別名、「武蔵ヶ崎」と呼ばれている秋葉原だが、オタク趣味の俺にとっては疲れを癒し、明日への希望を抱かせるパラダイスだった。

「そういうや、ひとりでアキバに来るのも久しぶりだな」

いつもは理子と一緒に着ていたからな。ひとりで来るのは、だいたい1ヶ月ぶりぐらいか？ 確か今年のバレンタイン——メイドコスした理子と、理子の行きつけのメイド喫茶のメイドさんたちとお店でハーレム接待——のお返しに3月のホワイトデーにその逆バーションを企画して、執事喫茶にひとりで下見にやつて来たときぐらいか。……ちなみに執事喫茶にひとりで入店した際に周りの女性客たちからガチホモ疑惑をかけられ、薔薇で覆われた妄想の糧にされたために逆ハー企画は早々に断念して、『1日理子の執事券』なるものを渡して済ませた。

今回はクエスト前の息抜きもかねて、理子の分は全て奢るつもりで理子を自分から誘つたのだが、色々と忙しいからと珍しく断わられたのだ。

誘いを断わる際に俺の奢りだと聞いた理子はものすごく行きた

そうに数十秒うんうんと唸り続けたぐらいだから、どうしても外せない用でもあつたんだろう。

「——さてと、とりあえず今月の新刊からチェックしに行くか

そう呟いて歩き出す。

オタクの聖地と言われるだけあって、漫画やラノベをおいてるショッピングはいくつも存在するが……どこの店にするか迷うな。

別にどこのショッピングでも——とは言うなかれ。

ショッピングごとにポイントカードが存在していて、各ショッピングごとにそのポイントでしか貰えない激レアグッズが存在するのだ。しかも、ポイントを溜めた先着順で激レアグッズは引き換えられていき、その在庫数は日々減っていく。さらにショッピングごとに購入特典も違うので、それも考慮してショッピングを選ばなければいけない。欲しい購入特典が複数ある場合は同じ店や別の店で同じ物を複数購入しなければいけなくなつたりと——まあ、大変なのだ。ショッピング選びひとつ取り上げても。

そして今回買う予定なのは、いつもの漫画とラノベの新刊と新作のゲームに加えて、ロンドンにいる友人に頼まれた品だ。

脳内に各ショッピングのポイントカードと現在までに溜まっているポイント。ポイントで引き換えられる特典を思い浮かべ、笑顔で誘つてくれるメイドさんたちからの誘惑を振り切りながら秋葉原をひとり歩いて行く。



「ありがとうございましたー」

ショッピング店員のハキハキトした声を背に、俺はホクホク顔でショップをあとにする。片手には大きな紙袋。一見するとお洒落な紙袋に見えるが、アニメに登場するロゴマークがプリントされた品である。もちろんその中身は、今月の新刊や新作ゲームだ。

「ふふふふふん、次はどこに行こうつかなあ」

鼻歌混じりに秋葉原を練り歩く。

おつ、あのメイドさんすつごく綺麗だ。あつちのメイドさんはゴスロリメイド服が似合つてかわいいな。ああ、そういうメイド喫茶もいいな。理子が戸員にしてるメイド喫茶に行くか？ でもなあ、あそこはよく理子と行つてるし、ひとりで行くのはなあ。それに忙しくて来れなかつた理子が、俺ひとりでメイド喫茶に行つたことを知つたら面倒くさいことになりそらだし……。

「ん~……たまにはフイギュアでも見に行くかな？」

たまたま日に付いたショットを見ながら呟く。

これまで興味はあつても購入したことは一度もなかつたんだよなあ。かさ張つて処分に困るから。これを期にひとつ買って見るのも良いかもしね。どうせあと1年間は日本にいるんだし。

「行つてみるか」

そう結論を出して歩き始めようとした俺に、後ろから声がかけられる。

「——あれ、レオン先輩？」

ややハスキーナ女の子の声。その聞き覚えのある声のほうを振り返つて見ると、強襲科の後輩、火野ライカが立つていた。

「お、ライカか？」

今のライカの服装はいつもの武値高の防弾制服ではなく、珍しい私服姿だった。

黒と白の縞模様のTシャツにキャミソール。ショートパンツに黒のジャケットというボーアイツシユなスタイル。いつも無難作に後ろでまとめている髪も下ろしてストレートにしていた。そして顔には目元を隠す大き目の色つきサングラスを付けていて、ひと目ではライカとは気づかれにくくなっている。お忍び、という言葉が浮んできそうな格好だ。

「ほお、武値高の制服着てないライカは新鮮だな」

「へっ！ えつと……似合い、ませんか？」

「いや。よく似合つてるとと思うよ。髪下ろすと結構雰囲気変わるんだな」

「そ、ですか？ へへっ」

照れくさそうに小さく笑つて金髪を弄るライカ。

俺はそんなライカを見て、素直に感想を呟く。

「ああ、かわいいよ」

「かわつ……!? あたしが!」

突然顔を真っ赤にして、その赤い顔を左腕で隠すようにして半歩後ろに仰け反るライカ。そのあまりのオーバーリアクションに咳いた俺のほうが驚いてしまう。

「そんなに意外なことか?」

「それは——そうですよ。あたしなんか男女がかわいいなんて、あり得ないですよ」

……いや、いきなり暗くなられて断言されても困るんだが。

いきなり表情ごと雰囲気を暗くしたライカは、笑顔を振りまきながら呼び込みをしているメイドさんたちのほうに視線を向け、どこか羨ましそうに咳いた。

「かわいいってのは、あんな風に笑顔を振りまけて、かわいい服が似合う子のことをいうんですよ。——だから、あたしなんかは……」

——かわいくない。

なんて、口の中で小さく咳いたライカだが、

「俺はライカにもああいう格好は似合うと思うけどなあ」

「……え? ああいう格好って、あのひらひらしてるメイド服ですか?」

「それ以外に何があるんだよ? まあ、白のワンピースとかも似合いそうではあるな」

しかし、いいよなあ。金髪のメイドさんって。きっとライカが着れば高レベルのツンデレ金髪メイドさんになれると思う。つーか、純粋に見てみたい。ライカのメイド服姿。きっとすぐ似合つててかわいいと思うし。

「メイド服に白のワンピースって、そんなわけないじゃないですか。もうからかわないでくださいよ、レオン先輩」

そう言つて困つたように笑うライカ。……今日は本当にどうしたんだ? いつもの元気はどこに行つたよ?

普段とは違つてどこか影のあるライカに戸惑いつつ、腕時計の時間を見てハツと思いつく。

「——あ、そうだ。ライカ。今、暇か?」

「今は……。えーっと……」

気まずそうにどこかに視線をやるライカ。

「何か予定でもあるのか?」

まあ、それもそうか。秋葉原にひとりでやつて来てるぐらいだし。何か予定があつても不思議じやない。待ち合わせとかの可能性だって——

「だ、大丈夫です! 別に今日どうしてもやらなきゃいけないことじゃないですし、気にしないでください!」

「ん、そうか? じゃあ、これから俺が——」

昼飯奢つてやる——じゃあ、色気も何もないな。

俺はライカと視線を合わせて、改めて呟く。

「——俺とデートしようぜ、ライカ」

「はい! ……へ? デート?」

おお、まさかの突然誘つたデートを二つ返事でOKが貰えるなんて驚きだな。これはライカの気が変わらない内に行動したほうが良さそうだ。

俺は片手でライカの手を取つて、

「じゃあ、行こうか」

「ええつ!? セ、先輩いい!?」

顔を真っ赤にしたライカを連れて、再び秋葉原を歩き始める。

昼飯奢るにしても昼にはまだちよつと早いし……さて、どこに連れて行くか。



「せ、先輩……。やつぱりあたしにこういうのは無理ですよお」

「大丈夫だつて。ほら、こつちもどうだ?」

「なつ——こんなの無理! 絶対無理ですつて! 絶対着たとこ見て

笑うつもりでしょ、レオン先輩っ」

ここは秋葉原に存在する雑居ビルに入つた洋服店。俺はライカに似合いそうなかわいい服を選んでいる最中だつた。

しかし、入店からすでに30分近く、俺が勧めるかわいい服はことごとくライカにNGを出させていた。さつき勧めたメイド服も、ライカは「うわあ」つと一瞬瞳を輝かせるもすぐにブンブンと首を横に振り、自分には似合わないと試着も拒否してしまうのだ。

「いやいや、笑わないから着てみろつて。こういうのもいい経験になると思うしさ」

「けど……」

渋るライカに俺は別の衣装を手に取つて渡す。

「む～……だつたら、こつちはどうだ？」

「これですか？　これならまあ……つて、これゴスロリ衣装じゃないですか！　こんなのがたしが着れるわけ……」

そして、今度も先ほどと同じように衣装を見てすぐNGを出そうとするライカに、俺は続けて別の衣装を見せる。

「なら巫女服か？　ピンクのナース服や白スク水なんてのもあるぞ。それとこの店、ネコミミカチューシャもあるから一緒に付けてみたらどうだ？」

「スク水にネコミミ？　……あ、あ～……もう、わかりました。これを着ます。着ればいいんでしょ、もうつ……」

「おお、そうかそうか。ようやく着てくれる気になつたか。――で。ネコミミはどうする？　きつとゴスロリ衣装と相まつてかわいいと思ふぞ」

「いつ、いりませんっ！」

ライカはぴしゃりと言つて、店の奥に設置されてる更衣室へ向い、シャツと更衣室のカーテンを閉めた。

――よし、作戦成功。

やつぱり消去法つて使える手だよな。

露出の少な目のゴスロリ、コスプレ仕様の巫女服、なんだか犯罪臭がする白スクの3択なら、ライカはゴスロリを選んでくれると思つて

たよ。いやー、全部嫌だつて拒否されなくてよかつた。自然な形で試着するよう誘導することも成功したし、楽しみだなあ。

「もう、こんなひらひらした服……あたしに似合うわけないのに……」更衣室の入り口として付けられた分厚いカーテンなかから、ブツブツと呟かれる文句と一緒にライカの服を脱ぐ音が聞えてきた。

「ううう……せめてもの救いはミニスカじやないことか。けど、ロングスカートってあたしに似合うのか？……へ、へえ。結構良い……かもしけねえな、へへへ……」

姿が見えないつてのも色々と想像が膨らんでなかなか……。しかもカーテン越しに同世代の女子が着替えをしてるつてシチュエーションがまたなんとも言えない。……音からしてまずは上から脱いで、次に下を……

——高校2年生の春。青春も思春期も真っ盛りで、簡単に脳内がピンク色に染まる自分を残念に思いつつも、嫌いになれないことに愛おしさを感じていると、

「うー……」

カーテンの隙間から恐る恐るライカが顔を出した。

「どうした？ サイズが合わなかつたのか？」

「いえ、そうじやなくて……。着替え……終わりました」

「そうか！ なら、さつそくお披露目して見せてくれよ」わくわく、ドキドキ。

期待を胸に待つていると、ライカは恐る恐るカーテンに手を伸ばして、

「ええいつ、どうにでもなれ！」

豪快に、一気にカーテンを全開にした。

「おおつ……！」

ボーアイツシユなスタイルから一転、黒を基調にした白のかわいらしいゴスロリ衣装に身を包んだライカを見て、俺は思わず目を大きくして感嘆の息を漏らしてしまう。

「どう、ですか……？」

恐る恐る顔を見上げてきたライカ。元々発育の良い胸元が深い谷

間と作り、清楚でどこか近寄りがたい高貴な雰囲気をかもし出すロングスカートが普段とは違った雰囲気を演出する。

しかも元々素材がいいだけに、その破壊力はバツグンだ。

もうつ、ギャップ萌え！ たぶん、今の俺の感情や興奮を言葉で言い表すならギャップ萌えが1番相応しいだろう！ いつもは強気なライカが弱々しく、しかも頬を赤らめて恥らつてている。時折スカートの裾を両手で握つたりするのも高得点だ！

「これは……本当にすごいな。正直予想以上だよ。まさかこんなに似合うなんて」

「に、にあつ……!? ～～つ！」

ジロジロと観察するように見つめると、ライカはボフンと小さな爆発音が聞えてきそうなほど一瞬で顔を真っ赤に染めた。そして陸に上げられた魚のように口をパクパクして、

「ほ、本当に、似合つてます？」

そんなことを確認してきた。

……またこの問い合わせかよ。何度目だ、いつたい。いい加減、面倒くさくなってきたぞ。

俺は小さく息を吐いてライカの両肩に手を置く。「え、ええつ!?」とライトグリーンの瞳を大きくして顔を見上げてくるライカの体をくるつと反転。更衣室の壁についている姿見のほうを向かせて呟く。「ほら、ちゃんと鏡見てみろよ。すぐ似合つてんだろう」「…………

「いや、俺じやなくて。鏡を見ろって」「は、はいっ！」

慌てながらようやく姿見を見たライカは「う……」と、ゴスロリ衣装に身を包んでいる自分の姿を見て、一瞬苦い顔になるが、（せ、先輩の言う通り、意外と、似合つてんのかな？）

しだいに表情を緩めていき、姿見に映る自分の姿を受け入れ始めてくれたようだ。

「ほら、俺の言つた通りだつただろ」

「——つ！ そ、そんなこと……」

また急に影を背負い出して言いよどむ。いつたいどうしたつてんだよ、今日のライカさんは。

俺は大きく息を吐いて、姿見^{ミラ}しにライカの顔を見つめる。

「ライカ。何かあつたか？」

「——っ」

ライカの体がビクツと跳ねる。姿見に映っているライカの顔も「なんでそれを……!?」とでも言いたげに驚愕している様子が見て取れた。……なんとも分かりやすいヤツだ。

「やつぱり何かあつたんだな？」

「…………」

無言は肯定つてな。やつぱり何かあつたのか。

俺は俯いてるライカの頭にポンツと手を乗せて、「よかつたらでいいから、話してみないか？」

と呟いた。

ライカは俯いたまま、小さく頷いた。

後輩の悩みを聞くのも先輩の役目つてな。

◆

普通の洋服よりもコスプレ衣装のほうを豊富に取り揃えている秋葉原の洋服店から移動すること十数分。デパート内に存在するメイドさんがいらない普通の喫茶店へとライカを連れてやって来ていた。

「あの……こゝつて、先輩の行き着けの店だつたりするんですか？」

「ん？　いや、別に行き着けってほどじゃないかな。着たのもこれが3回目ぐらいだし。けど、こここの料理……とくにデザートはどれも絶品だから期待していいぞ」

「へえ、そうなんですか！　じゃあ、何かおススメとかありますか？」
「おススメは……。んく……どれも本当に美味しいからなあ。強いて言えばチョコレートケーキか？　けど、今は持ち帰りで食べれないパフエ系のデザートがおススメだぞ」

「パフエもあるんですねか!?　へえー」

期待にライトグリーンの瞳をキラキラさせながら、案内された奥のテーブル席へと座る。ほどなくして置かれたお冷で喉を潤す。

——で。

かわいい後輩であるライカのお悩みを聞いた俺は、

「アハハハハツ！　まさか、そんなことで悩んでいたのか。くくつ……！　ああ、まさかライカがそういうことで悩むなんてなあ」

打ち明けられた悩みの内容に大笑いしていた。

大笑いする俺に、俺の向かい側の椅子に座ったライカの顔がカーツと顔を真っ赤になる。

「あたしには……あたしにはショックなことだつたんです！　何もそんなんに笑わなくともいいじゃないですか」

「あー……そうだよな。悩みを聞いて置いて笑うのはあまりにも失礼だつたな。謝るよ、ゴメン」

誠意を見せるように姿勢を正して頭を下げる。大笑いは本当に失礼すぎたな。

「——けど、まさかライカが『男女』って呼ばれていることをそんな気にしてたなんて思わなかつたからさ」

「——」

再びライカの顔が赤くなるが、今度は笑われた怒り——というか、羞恥心が原因のようだ。顔を合わせないようそっぽを向いて、ふんっと息を吐く。

そして、横目で俺の方をちらちらと窺うように見ながら、

「……レオン先輩もあたしのこと、『男女』って思つてますよね」

恐る恐るそんなことを聞いて——いや、断言してから違うか——言つてきた。

俺はそっぽを向き、どこか遠い目になつて何か嫌なことでも思い出しているのか、暗い表情になるライカにため息を吐く。

「なんで思つてること確定なんだよ？　俺は別にライカのこと、『男女』だなんて思つたことは一度もないぞ」

「え……!?　一度もですか？」

「ああ。むしろ好み……ゴホン。スタイルもかなり良いし。俺には女

にしか見えねえよ。……なんだよ？　そんなに信じられないことか
？」

「……で、でも、皆あたしのこと『男女』だつて。昨日だつてクラスの
男子たちが……火野はないって」

火野はない？　何が？

言葉の意味が分からずに首を傾げると、ライカは言い難そうに表情
を歪めながらも補足するように呟いた。小さな声で。

「か、彼女にするなら」

「彼女？　それって……ああ、そういうことか」

火野はないって、彼女にするならライカはないってことだつたの
か。

けどなあ……この場合、結構な確立でアレだよな。思春期の照れ隠
しどか、その場のノリとか、周りが言つてるから自分も言つておくと
かいう、まあ、特に深くもない考え方から呟かれた軽口だよな。……言
われた本人はすごく気にしてるみたいだけど。

「まあ、俺だつたらライカみたいな女が彼女だつたらすぐ嬉しいと
思うけどな」

「えつ！　なつ……ええつ！」

今日1番のすげえオーバーリアクション。もしもお冷に口を付け
てる最中だつたらぶつかけられてたな。

「先輩の彼女つて、あたしがですか！」

「もしもライカが彼女だつたら嬉しいって話だよ」

告白はしてないからなー？

「けど、それでも……。あたしみたいな男女が彼女だと嬉しいだなん
て……。そんなこと……」

とても信じられない、という様子のライカ。

……今日のライカさんは本当に面倒くさいな。

まあ、男勝りで自分に女としての自信がないのは——この1時間
ちよつとでわかつたけど。実際にはスタイルがよくて美人なのに「自
分はかわいくない」つて何度も呟いて暗くなるのは、正直嫌味に聞え
る。俺の髪色もライカみたいな綺麗な金髪だつたらどんなに良かつ

たか……いや、これは今考えるのはよそう。それよりもネガティブライカさんのほうをどうにかするのが専決だ。

「——まつ、とにかくだ。ライカ自身が自分のことをどう思つてようと、俺には——俺から見た火野ライカは美人でスタイルの良い、ちゃんとした『女』に見えてるから。そんなに自分のことを『男女』だなんて何度も卑下しないでもいいんじゃないか?」

「レオン先輩……」

ライカは俺の顔を見つめ——ゆつくり、じわつとライカのライトグリーンの瞳が輝きを増して始め、
——ポタツ。

小さな滴が机に落ちて跳ねた。

……へ?

「……あ、ありがとうございます……。あたし、今までずっとそんなこと言われたことなくて……」

——ポタツ、ポタポタツ。

いくつもの滴がおち始め、机に落ちては跳ねる。

ずずう、つと鼻を啜る音がライカのほうから聞えてくる。
ちよ……!? え……。

「す、すみません……あたし……」

そう言つて手で目元を隠すライカ。

手の隙間からは滴が頬を伝つて机へと——、

な……泣いたあああああああ!? ええつ!? ど……いきなり、え

……!? なんでだ!? 俺の所為? 俺の所為だよな? 俺の所為か。俺の所為なのかあああ!

と、とりあえずどうする? 謝るか? とりあえず謝るのはてつどり早くて良い手だが、何について謝るんだよ! 俺の今までの会話で謝るところなんてねえだろ。……ないよな? えー……つと。そもそもライカが泣いた理由は、アレでアレがアレなんだから……謝るのはやっぱりおかしいよな、うん。

——そうすると、この場合は、

「——ほら、使えよ」

ポケットからハンカチを取り出してライカへと渡す。

「あ、ありがとうございます」

濁点が付きそうなお礼を言われた俺はライカの頭へと手を伸ばし、ポンツと手を置いた。ちょっとクセはあるが、サラサラとした細い女の子の髪だな。つーか、綺麗に色が統一されてて綺麗だし、羨ましい。「——っ」

目元に当たたハンカチの間から、少し赤くなつたライトグリーンの瞳がこちらを窺うように視線を向けてきた。

俺はその視線を正面から、微笑という名のポーカーフェイスで受け止め、ライカの頭をやさしく撫でる。

「よしよし……」

「…………」

……うん。

俺の行動にライカはポカーン、無言からの涙大量排出＆鼻を啜る回数増加コンボが発動しちまつた……。

ラノベ主人公しかり、エロゲ主人公しかりの「撫でボ」なんて高等テクは狙つてなかつたけど、さらに状況が悪化するとは……。

あー……でも、よく思い出せば、泣いてるところを慰めると気と一緒に涙腺も緩んで決壊するのが自然だつたな。ライカが号泣してしまつたのも当然のことだろう。

「ううう……レオンぜんばいいい……」

「よしよし」

——しかし、だが、

お冷を貰つて注文もせず、店の奥の席で女の子を号泣させた男として、店員、客問わず周りからの視線が痛い。嫌悪感を通り越して殺氣みたいなものも向けられてる気がする——が、今は耐えるしかねえんだよなあ。……号泣については俺が原因みたいなものだし。

ほらほら、もうこの際だ！これまで溜め込んだストレスとか不満とか、負の感情をもうもう全部吐き出しちまえ！最後までこのレン先輩が付き合つてやんよ！



号泣すること数分。ようやく落ち着きを取り戻したライカが恥ずかしそうに頭を下げる。

「……すみませんでした、レオン先輩」

「別に気にしてないさ」

そう言つて俺はすっかり氷も解けてしまつたお冷を傾ける。……まあ、ライカの号泣で周りからの視線は痛かったけど、半ば自業自得みたいなものだからな。気にしてないのは本当だ。むしろリアなライカの泣き顔が見れただけでも……と、蒸し返すのはさすがにマズいか。

俺は話を切り替えるようにメニューを取り、テーブルに広げた。

「じゃあ、飯でも食べるか。今日は俺が全部おごつてやるから、なんでも好きなもの食べて良いぞ」

「ほんとですか！ よつしやー、ごちになります！」

爛々と、少し赤くなつてライトグリーンの瞳を輝かせてメニューを見つめるライカ。椅子から身を乗り出して「どれにしようかなあー？」なんて鼻歌混じりに料理を選んでいる。

……相変わらず切り替えが早いというか、もう大丈夫そうだ。

「これに、これもいいなあ……。先輩、いくつまで頼んでいいですか？」

「ん？ ああ、俺のお財布事情なんて気にしないで食べられるなら食べられるだけ頼んでいいぞ。これでもSランク武僧として高給取りだからな。懐は暖かいんだ」

「ほんとですか！ ジャア、これも頼もうかなあー」

嬉しそうにメニューからいくつかの料理を選択したライカは、近くにいた店員を呼んで料理を注文し始める。俺もライカに次いで、あらかじめ決めておいた料理を注文した。

そして、しばらく。

たて続けに、ところ狭しにテーブルの上へと置かれていく料理た

ち。5人……いや、6人前はありそうな量ではあるが、これで全部と
いうわけじゃない。まだいくつかの料理が残っていた。

「じゃつ、食べるか」

「はい、先輩！」

料理が並んだところで俺はライカと一緒に手を合わせ、あらゆるものに感謝を捧げ、

「いただきます」

料理を食べ始めた。



「いいなあ、すごく美味しそう……。しかもあんなにたくさん。あたしも食べたいなあ……」

「涎が出てますわよ、あかりさん。それより、あの男ですわ……ッ！
お姉さまを泣かせた上に今度は餌付けするなんて！　ああ、なんて卑怯で下劣な男なんでしょう！」

「じゅるる……。で、でも、麒麟ちゃん。レオン先輩は卑怯でも下劣な人でもないと思うよ。強襲科での評判もいい、面倒見の良い先輩だし……あたしにもたまにお菓子とか、ご飯おごってくれてね……」

「お姉さまもあかりさんも皆さんも、あの男に騙されてるんですね！」

面倒見の良いのは強襲科の女子生徒を手筈めにするための作戦！

あの霧島レオンがこれまで何人の女を泣かせていると思うんですの！？」

「ええっ？　泣かせてるって……ええーっ！　あのレオン先輩が！?
……あ。で、でも……レオン先輩が誰かと付き合ってるなんて聞いたことないけど……？」

「なにも付き合ってる付き合ってないだけが関係じゃありませんでしょ。私の戦姉……元戦姉のお姉さまは、あの男に毎回のようにこき使われるだけこき使われたり、貢がせるだけ貢がせていつもボイツ、なんですよ！　そのクセ高千穂麗という戦妹のアプローチを

受けていたり、クエストだと理由付けて『なごじょ』に通つてハーレム気分を満喫しながら『なごじょ』の方々と乳くりあつてたんですよ！しかも、理子お姉さまを放置して！ ムキーツ！ 絶対に許されることではありませんわ！」

「お、落ち着いてよ麒麟ちゃんつ。さすがにバレちゃうよつ」

「バレたときはバレたときですわ！ 今度という今度こそは理子お姉さま仕込みの拳法での男のを潰し、二度と私のお姉さまたちや他の女子生徒たちにも手を出せなくして差し上げますわ！」

「うわわわ……麒麟ちゃんからどす黒いオーラが溢れちゃってるよお……」

◆

昼食を終えて、店を出る。

「ふはあーつ、食つた食つた」

「な？ 結構美味かつただろ」

「はい！ 先輩の言つた通りデザートもほんと美味しかつたです」

上機嫌で嬉しそうな笑顔を浮べるライカ。 そうまで喜んでもらえると、こつちも奢つた甲斐があつたというもの。俺も笑みを浮かべて「それはよかつた」と頷いた。

ライカと2人、秋葉原を歩きながら、ふと俺は口を開く。

「——さてと。これからどうする？ 昼飯は食べたし、このまま一緒にどこか行くか？ 別に予定があるのなら解散でもいいが」「ど、どこかって……えーっと、もしかしてその……それってデートのお誘い、ですか？」

言い難そうに、気まずそうに視線を逸らしながら呟いたライカ。

正直、俺からしたら最初からデートのつもりだつたんだけどなあ。ハツキリとデートに誘つたわけだし。まあ、これからデートつてことでもいいか。

「ああ、デートのお誘いつてやつだよ。ライカが行きたいところならどこでも付き合つてやるぞ」

「——っ！ ほんとにいいんですか？」

「もちろん。——ああけど、下着売り場とかは勘弁してもらえると嬉しいな。さすがにそこはハードルが高すぎる」

「下着売り場つて……何言つてるんですか、レオン先輩つ」

「ハハハツ、冗談だよ、冗談」

「もうつ……」

ライカは頬を赤くして拗ねる。そんな子供っぽくてかわいらしいライカに笑みを浮かべていると、ライカは俺を置き去りにするように早歩きで進み、数歩分進んだ辺りで不意に立ち止まつた。

視線の先に存在する雑居ビルを思いつめたように眺め、数秒——。

ライカは深呼吸を繰り返し、真剣な眼差しで俺を見つめてきた。いきなり、どうしたんだ？ 何かあの雑居ビルにあるのか？

正面からライカを見つめ返したまま戸惑う俺に、ライカはゆっくりと口を開いた。

「本当にどこでも……いいんですね？」

恐る恐る、確認するように呟いたライカに「ああ」と頷く。

それを確認したライカは「じゃあ、付いてきてください」と言つて、歩き出した。向う場所は先ほどライカが見つめていた雑居ビルだ。

話しかけるのもばかられるような真剣な雰囲気を身に纏い、俺の数歩先を歩くライカから視線を外し、雑居ビルに掲げられたいくつの看板を見上げていく。

雑居ビルは7階建てで、1階は本屋、2階は人形売り場、3階は同人誌売り場、4階は漫画に使うトーンやファイギュアに使用する塗料などを扱う雑貨売り場で、5階からはイメージカラーがピンク色な店が最上階まで続いていた。

……いや、まさか、な……。

下着売り場とか、冗談でも俺が言つた所為か？ や、元々ライカが行きたかった場所なんじや……。しかし、あのライカが行くか？ ……むしろ行けるのか？ 18歳以上しか入店できないのに。けど、今のライカの服装は武僧高の制服じやないし……。あつ！ この帽子に顔を隠すデカいサングラスつて年齢を誤魔化すためのアイテム

だつたりするんじゃないか？ 元々ライカは同世代の女子と比べて身長も発育もいいから、18歳以上に見られないこともないし、俺が店員として、今のライカの格好ならスルーしてしまうと思う。しかし、ピンク色な店って……。ライカには早過ぎないか？ ……いや、武僧に限っては早いも遅いもないか。CVRの生徒はそういうことを専門に教育させられ、クエストでもやつてるし。CVRの生徒じやなくとも麗はエロい……。万年盛つてるウサギのようにつもベッドに誘つてくるからな。年齢なんてのは武僧には関係ないだろう。

「——って、そんなことあるはずがないか」

顔を左右に振つて今までの考えを否定する。

そもそも、どこの世界にデートでピンクな店に連れていく女子高生がいるというんだ。一緒に大人のおもちゃ売り場を見学とかあります。20を超えたラブラブカップルでもそんなことしねえよ。するやつは特殊な性癖の持ち主かハイテンションのバカぐらいなものだろ。それに、うちのライカに限つてそんなエロい場所にデートで連れ込んだりするわけが……

「……で、出来れば、引かないでくださいね、レオン先輩」

……え？ なに？ 連れて行つたら引くだろう場所に連れていくつもりなの？

「これまで誰にも話してなくて、自分では恥ずかしいとか似合わないつて思つてた趣味なんですけど……」

目的地へと向うエレベーター内のボタンを押して、頬赤らめてるライカ。

おい何番を押した？ 何階のボタンを押したんだよー！ 恥ずかしい場所つて、おい、おいおいおいおい！ アレか？ アレなのか？ 僕の予想通りの場所なのか！ ……それはそれで――

周りをモザイクで覆われた、イメージカラーがピンク色の店で大人しか買えないおもちゃを恥ずかしそうに勧めてくるライカ。

ワインワインとモーター音が鳴るおもちゃを片手に「へえ、結構激しいんだな」とニヒルに呟くライカ。

喫茶店で言つた「男女には見えない」っていう俺の発言を証明する

よう求め、「これを使つてみてくれませんか」と正方形の小さい包装紙に包まれたアレを渡してくるライカ。

「ある意味下着売り場ですよね」と悪戯っぽく微笑み、俺の精神をガリガリと削るような布切れを見せてくるライカ。

——これ、どんなエロゲのシチュユ？

下半身に血液が集まり始め、前かがみになりそうになるが、済んでのところで堪える！

確かにおいしいシチュエーションだが、ダメだ！　俺にもライカにあまりにもこのイベントは早すぎる！　つーか、逮捕されるぞ！

スコア900越えのクエストでもしないような緊張を感じ、全身からだらだらと汗を流す。

恥ずかしそうにボタンを隠すようにして入り口前に立つてのライカの後姿を見つめ、

静まれ俺！　妄想するんじゃない！　相手はお前が面倒見たこともある後輩なんだぞ！　先輩として後輩に手を出すのは……しかし、それはそれでおいしいシチュ……ああクソツ、考えないようにするとむしろ考えちまう！

数秒を数分、數十分にも感じながら、頭のなかで両手で頭を抱えて身悶えていると、チーンという音に次いでエレベーターが停止した。ゆっくりと左右に開かれていくエレベーターの扉。

扉の向こう側が俺には輝いて見え、緊張で表情を硬くしながらも光りに向つていくライカが、吹つ切れたような笑顔を見せたライカが、いつもより綺麗に見えた。

「——これが、あたしの趣味です」

そして、その言葉と共に見せられたものは——

「……ん、ぎょう？　フィギュア、なのか？」

オタク趣味が染み付いた俺には馴染みの深い、フィギュアや人形がところ狭しに並べられた店内だった。

ライカは店内を見つめ、恥ずかしそうに咳き始めた。

「こんなあたしには似合わないだろうけど……。あたし、人形とかかわいい服とかが好きで、少女漫画とかも読んだりするんです」

「そう、なのか……」

「はい……。やっぱり、似合わないですよね？　あたしには……」

無理矢理笑顔を作るライカだが、俺は正直これまでくる間に予想していた店じやなかつたことに安心していた。

いやー、やっぱりライカが年齢制限のある店に俺を連れ込むわけないよなあー。アハハハハ、なんてバカな予想してたんだろ。だから俺は探偵科でもランクが低いままなんだよ。

——つと。

無言の俺にライカが泣きそうになつてゐる。早く弁解しないとまた厄介なことになつちまう。

俺はエレベーターから出て、ライカの隣に並んで咳く。明かされたライカの趣味を前にして感じたことを、素直に。

「まあ、確かにいつものライカのイメージには合わないけどさ。別にそんなこと気にしないでいいと俺は思うぞ。そもそも趣味つてのは、似合う似合わないってことで選ぶものでもないし。俺だつてほら」

俺は片手に持つた紙袋からゲームを取り出してライカに見せる。ゲームのタイトルは『妹ゴス』、パッケージには美少女の絵が描かれていた。

「こんなナリでもオタク趣味で、ギャルゲーもエロゲーも大好きだしな」

「レオン先輩……」

「ま、人様に迷惑が掛からないなら趣味は人の自由だと俺は思つてゐるから。ライカがどんな趣味をしていようと、俺は受け入れるつもりだ」

……まあ、さすがにピンク色やモザイクで見せれないような趣味だつたら、受け入れるまで多少時間が掛かつたと思うけど。「ありがとうございます……」

その言葉と共に再び涙を浮べるライカだが、俺も学習している。俺はライカの手を取つて、

「ほら、行こうぜ。見て周るんだろ」

フィギュアや人形がところ狭しに飾られた店内を歩き出した。

第6話

秋葉原に存在するデパートの屋上で、ライカが徒手格闘するためには長い髪をリボンで縛る。ライカの視線の先には、武偵高の制服に身を包んだ金髪の少女——島 麒麟(きりん)が不敵な笑みを浮かべて立っていた。

数メートルほどの距離を開けた2人のほぼ中央に審判、進行役を勤めることになった間宮あかりが確認するように口を開いた。

「じゃあ——時間無制限、武偵柔術ルールで投極打、全部あり。銃、ナイフ以外の道具使用はあり。ギブアップするか、背中が地面についたほうが負けだよ」

間宮がルールを読み上げると同時に、2人が本格的に戦闘態勢へ移行する。

「アタシが勝つたら二度と近づくな」

「あの男とお姉さまが2人で居たことは予定外でしたけど、今日戦う事は予定済みでしたのよ」

手を鳴らしながら凄むライカに対し、麒麟は独特の構えをとった。体を半身にして左腕と左足を相手に向ける構え、

「——中国拳法(クンフー)か」

「前の戦姉から教わりましたの」

ライカの予想を肯定する麒麟。構えは立派だが、いかんせんライカと麒麟では体格差がありすぎる。

おまけに麒麟は武偵でも専門はCVR——ハニートラップ専門であり、見るからに非力。年齢もライカより下で、本来なら後方支援や参謀役がメインの、直接戦闘を苦手とする武偵だ。しかも今ライカに見せている中国拳法も所詮は1年ほどしか鍛錬していない付け焼刃で、たいした戦闘経験もない。戦闘能力はほとんど皆無に等しい、根っからの後衛タイプの武偵である。

そして、そんな麒麟と相対するライカといえば、武偵高でも荒事を専門とする強襲科のBランク武偵。持ち前の高い身体能力に加え、近接格闘術にも優れていて、あの蘭豹が一押しする将来有望な女性武偵だ。

子供でも命中させる技術があれば大人にもダメージが与えることのできる拳銃やナイフの使用が認めらないこのルールなら、もはや麒麟の勝ち目は皆無。仮に俺の予想よりも中国拳法の鍛度を高めていようとも、ウエイトやリーチの関係でまともにダメージも与えられずにやられてしまう可能性が高い。……まあ、俺のような不思議肉体をもつていれば別だが。麒麟の場合は見た目通りの華奢で非力だ。筋力や体力ではライカに遠く及ばない。

ライカも俺と同じように自分の有利と勝利を確信している様子で余裕の笑みを浮かべ、

「いいんだぜ、銃とナイフ以外なら何使つてもよオ！」

真っ向から麒麟へと向つて駆け出し、様子見とばかりに蹴りを放つた。

麒麟はそれに回避ではなく、膝を上げて蹴りを受け止める。

……む？ 麒麟なら今のは避けただろ。なんで避けなかつたんだ？ 体格を含めて近接系は総合的に劣つてるんだから下手に足を止めるところぞとばかりに追撃が――

「くくっ！」

——こなかつた。

それどころかライカの蹴りを受け止めるために上げた膝と、膝を上げたことでふんだんにフリルがあしらわれた改造ゴスロリ防弾制服のミニスカートが捲れ――中身が見えそうになり、その光景を前にしたライカが追撃することも忘れて立ち止まつてしまつたのだ。

蹴りを受け止ても膝を大きく上げたままの姿勢を保つ麒麟。その姿に顔を赤くして戸惑うライカ。そんなライカの様子を麒麟は満足そうに眺めて、ここぞとばかりに口を開いた。

「これ、私なりに備えをしてきましたの」

ミニスカートを両手で摘まみ、

「お好きなんでしょう？ こういうの」

ちっこい外見にそぐわない妖艶な微笑みをライカに向ける。

言われたライカはというと、

「くくくくっ！」

——湯気が幻視できるほど顔全体を真っ赤にしていた。

……さらに、言われてない間宮まで赤くなつてた。

間宮つてやつぱり百合……だよな？ 前にアリアのポスターを諜報科から購入してたし、最近はアリアの戦妹になつて一緒に風呂に入つたとか強襲科の訓練場で永延と嬉しそうに語つてたからなあ。

……間宮の親友といい、百合かもしれない。

そして、麒麟に頬を染めてるライカも百合——なのか？ むく……ライカは正直判断に困るな。今日明らかになつた少女趣味といい、別に女が好きつてわけでもなさそうじやないし。純粹にかわいいものが好きなヤツだと思う。いや、そう思いたい。間違つてもすでに手遅れっぽいヤンデレてる間宮の親友、ガチ百合の佐々木のようになつて欲しくはない。だから、俺はお前信じてるぞ、ライカ。

——あと、ちなみに。

俺は年下の幼児体型にいまいち性欲が湧かないでの、麒麟がスカートを捲り上げようとまったく気にならない。精々はしたないなあと思うぐらいだ。スカートの奥に白い布切れが覗けていようとノーリアクション。

まあ、それに加えて去年麒麟は理子の戦妹だつたから、その性格や趣向。男＝汚物や害虫などと考えているガチ百合の腹黒幼女だということを俺は嫌というほど知つたり、被害に会つたりしているのでさらには性欲は湧かなかつたりしているのだが。

だがしかし、それを全く知らないライカは麒麟の術中に見事に嵌り、激しく動搖。動きが見るから悪くなつていて、攻めることすら忘れて混乱していた。

「す、すきつ、すきつ……」

「——なんですか？ お姉さま？」

動搖している隙に距離を詰め、挑発するように顔を近づけて微笑む麒麟。微笑みを向けられたライカはさらに動搖して、

「……く、隙だらけだ、お前は――！」

無理矢理、力任せに麒麟の腕をとつて1本背負いを仕掛けた。

あーあ、重心も崩していないし、力任せで色々甘い。いくらなんでも動搖しそうだ。せつかく持つてる技術がまるで発揮されてない。

なので、屋上の床に叩き付けるほうが明らかにダメージを与える上での勝負にも勝利する方法があるというのに、ライカはそれを忘れて考えなしに投げ飛ばそうとし——麒麟は投げ飛ばされる途中の拘束が緩み始めた瞬間を狙い、試合前から机身離さず片手で持つていたキリンのぬいぐるみを地面に向つて投げる。

「いきなさい！ ジョナサン3号！」

そんな声と共に投げられたキリンのぬいぐるみは、錘が入っていたのか、ゴトンと大きな音で地面に着地する。

「——つ」

その確かに普通のぬいぐるみとはちがう着地音に、ライカが表情を引き締め、ただのぬいぐるみではないと警戒した瞬間——。

その隙を狙い、麒麟が背負い投げから完全に脱出。

そのままひらりと宙を舞い、キリンのぬいぐるみの頭へと片足で着地した。

そして、その上でくるりと1回点してライカを見ると、

「麒麟は、背高のつぽですの、お姉さま」

微笑んで、ライカの唇の端にキスをしながら足を掛け、ライカをそのまま押し倒した。

バタンと、抵抗もしないで倒れてしまうライカ。

それを見た間宮は遅ながら呆れながらも勝者の名前を呼んだ。

「…………えと、1本。島麒麟の勝ち」

「…………えつ！」

いや、そう何度も見なくても背中が地面に付いてるから。ていうか、これが決着なのか……。そもそもどうしてこんなことになつてるんだ？ ライカと人形店でデートしてたはずなのに……。

◆

ライカと麒麟の突然のガチバトル。そのすべての始まりは、人形店

でのことだった。

人形についてすごい知識量を有するライカに案内されながら2人で人形店を見て周っていると、間宮と麒麟がエレベーターから出てきたのだ。

——間宮と麒麟と秋葉原の人形店で遭遇。

これだけならただの偶然だと済ませられるかもしれないが、エレベーターから出た2人は急いで物陰に隠れ、俺たちの様子を遠目から観察するように見つめてきたのだ。しかも、片方はレースのハンカチを口に咥え、歯軋りしながら。……いわなくても麒麟である。

この時点では片方——ガチ百合の姉系好きの麒麟がライカを性的に狙つてストーカーしていることに気づいた俺が、人形が並べられた棚の後ろに隠れていた間宮と麒麟に話しかけ、それから……それから……。

見つけられた麒麟が「少女趣味……ふふつ」「尾行（ストーカー）に気づかないほうが悪いんですね」とライカを挑発して、挑発されたライカはそれに面白いぐらいに乗っかり、戦妹試験に移行。

戦闘モードに移行したライカと策を巡らせているだろう麒麟を尻目に、麒麟に付き合わされて一緒に尾行していた間宮に詳しい事情を聞くところ。ライカは数日前から戦妹にしてくれと麒麟に付きまとわれていたらしい。ちなみに戦姉妹契約を持ちかけられたライカはというと、高校1年の未熟者が、しかもCVRの戦妹を持つ意味や理由が分からず戦姉妹契約を拒否していたそうだ。

間宮は「戦姉妹契約ぐらいしてあげればいいのに」と、あまり深く考えることなく麒麟に味方しているようだが、この場合、ライカの判断のほうが正しいだろう。

そもそも高校1年になつたばかりのヒヨツ子、しかもBランク武僧がまったくジャンルが違う科目の生徒と戦姉妹契約を結ぶ必要も利点もあまりない。戦姉妹契約を結んで戦妹を育てる暇があるなら自分のランクを上げたほうが有意義である。

そして、何よりもライカは生まれて初めての戦姉妹契約。初めての戦姉妹契約の相手がCVRの武僧なんて、教える側にとつても学ぶ側

にとつてもハードルが高すぎる。最悪、どちらかの専門科目に引きずられ、これまで築いてきた戦闘スタイルに歪みが出来かねない。

なので俺は正式に記録として残つてしまふ戦姉妹契約よりも、普通の友達だつたり、パートイメンバーでいるほうを押したいところだが——時はすでに遅し。

「戦姉つ、戦姉つ」

デパートの屋上で行なわれた戦姉妹試験に見事（？）勝利し、麒麟は正式に戦姉妹契約を結んで戦姉になつてしまつていてる。

これを覆すことは、実質俺には不可能だつた。

晴れて正式にライカの戦妹となつた麒麟はデパートの屋上からメイド喫茶へと場所を移してもライカの腕に抱きつき、ニコニコ笑顔を浮べていた。俺が向かい側の席——正確には正面ではなく、斜め左の席——に座つているというのに笑顔を崩すことなく、まるで視界にさえ入つてないようライカの腕に体をすり寄せる。

思わず見ているほうが苦笑いを浮べてしまふ麒麟の擦り寄りつまりに、当のライカは疲れ様子でされるがままになつていて。どこにも視線を合わすことなく、時折疲れた様子で息を吐く。

ちなみに現在座つている席は、俺と間宮が並んで座り、その向かい側の席にライカと麒麟。俺の正面には当然、ライカが座つている。ガチ百合で、男＝害虫と思っている麒麟が男の正面に座つたり、隣に座るなんてあり得ないからだ。

俺の隣に座つている間宮が、苺のショートケーキにフォークを付きたてながらライカに言う。

「初めて見ちゃつたよ。ライカが徒手格闘で負けるの」「…………

間宮を無視して、視線を逸らしたままジュースを飲むライカ。そんなあからさまな対応に、間宮は意地悪な笑みを浮かべてある指摘する。

「でも、倒された時、ちょっとヘンだつたぞー？」

「——ツ！」

ギクツとライカがジュースを噴く。

濡れた口元を袖で拭きながら、

「…………。ぐるつせーな！」

と、さらに間宮から視線を逸らすライカ。相変わらず分かりやすいライカのリアクションに、間宮は確信を得て笑みを深めた。

「へへへっ、やつぱりね」

「え!? ど、どういうことですの?」

意味深な間宮の笑みに、何かを感じた麒麟が訊ねた。間宮は苺を刺したフォークを揺らしながら得意げに、本来のライカなら最後の麒麟の足技をかわして投げに入っていたと説明する。

間宮の話を聞いて、目に見えて落ち込む麒麟。

そんな見るからに落ち込んでいる麒麟を見かねて、ライカが大声で言う。

「い……『いい』って思つたんだよ！ あのときは！」

「…………？」

「お前を戦妹いしてやつてもいいかつ……て」

「だからしょぼくれんな」

「キヤツ！」

強引に麒麟の頭を撫でるライカ。

そんな姿を微笑ましく思つたのか、それとも落ち込ませる原因を作つた罪悪感からか、間宮が麒麟を励ますように呟いた。

「ライカにそう思わせたのは麒麟ちやんだよ」

「えつ」

「すごく頑張り屋さんだし、かわいいし」

「間宮さま……！」

「麒麟ちゃん。ライカをよろしくね」

「はいですの！」

「——バ！ バカ！ 余計な事言うなよ！」

間宮と麒麟のやり取りに真っ赤になるライカだが……2人とも、何か忘れてないか？ 麒麟はCVRの生徒なんだぜ。最初からライカに勝てないことは織り込み済みだつただろうし、さつきの戦姉妹試験でも最初から実力で勝とうとはしていなかつた。つまりは全部麒麟

の作戦なんだよ。

ライカの性格や趣向を読み取り、弱点を調べてあげて。あえて相手の土俵で勝負するように見せかけ、余裕と油断を大きくさせる。体力でも格闘技術でも劣ることは分かりきつていたから最初からライカには何もさせるつもりなんてなく、短期決戦のつもりで動搖したところをここぞとばかりに攻め立て、混乱させて選択肢を減らし、あえて無防備に近づくことで行動パターンを単調にさせ、ワザと投げられた。鉛入りの人形にライカが警戒することも当然織り込み済みで、最後の言葉とキス、どさくさに紛れて足をかけて倒したこと、すべて麒麟の計算通り。

当然、ライカの得意なコンビネーションや足技の豊富さも調べ上げていて、それをさせないための策略なんだから、

今こうしてライカに慰められていることも、麒麟の計算だつたりするんだよなあ……。

「あっ、そういうえばレオン先輩はなんでライカと一緒にいたんですか？」

「ここでそれを訊くのか、間宮……」

「うつ……」

どうやら本人も聞くタイミングが悪いことはわかっているらしい。散々放置していきなり話題振ったんだからな。

「まあいいけどな。——今日はライカと2人でデートしてたんだよ」

「ちよつ!? 先輩ツ!?

「なんですってつ!? お姉さま、嘘ですわよね!? こんな優柔不斷の鬼畜なんかとデートしていたなんて、嘘なんですわよね!? ねえ、お姉さま！」

「あ、う……そ、それは……」

間髪入れない麒麟からの問いかけに、ライカが顔を真っ赤にして言い淀む。間宮はそんなライカを見て、からかうような笑みを浮べて呟いた。……2人とも俺に対する麒麟の扱いにはスルーのようだ。

「へえー、やっぱりそうだったんだね、ライカ」

「あっ、あかりまで……。ていうか、やっぱりってなんだよツ!?

「だつてライカとレオン先輩、駅で会つてからずつと一緒にデートの定番っぽいところ見て周つてたし」

「そ、それは……レオン先輩が……。つていうか、駅からずつとつけてたのかよ!？」

「それはまあ……今はいいでしょ。それよりもほら、途中色々あつたみたいだけど、結局ライカも楽しんでたじやん? それにさ、男の子と女の子が2人つきりで買い物すること事態がデートでしょ」

「あ……うう……」

すごい、あの間宮が怒濤の責めを見せてライカがなす統べなく追い詰められてる……。

「そうですわ、お姉さまッ! 途中立ち寄つた喫茶店でこの鬼畜男に泣かされてましたわよね!? あれはいつた……」

「わーっ! わああああー! 何言つてやがんだ、お前えええええ!?

「——むぐつ!?

ボフンと顔を真っ赤にして急いで、無理やり手で麒麟の口を閉じさせるライカ。麒麟はライカの手を両手で剥がそうとしながら、口が塞がれた状態で無理矢理呟く。

「ふえふええふえふあ、ふえふふえいふえてくふあふあいふあふえ!

(お姉さま、説明してくださいませ!)」

麒麟から真っ直ぐ向けられる視線にライカは顔を赤らめ、こちらへ助けを求めるよう、アイコンタクトをしてくるが、

ここで俺が加わつたらさらにこじれるだろ、と注文したコーヒーに口を付ける。

「先輩い……」

情けない声を出すな、ライカ。まがりなりにも後輩を指導する戦姉になつたんだろう。あ、麒麟が強引にライカの手を振りほどいた。

「とにかく、男はもとより、こんな鬼畜男が恋人なんてこの麒麟が認めませんからねつ! 泣いてるところを慰められてデレるのは私だけにしてくださいまし!」

「泣いてねえし誰もデレしてねーよつ! つか、あたしはツンデレでもねえ! そもそもあたしが誰と付き合おうがおまえにはかんけーね

えだらうがつ！」

「麒麟はお姉さまの戦妹です！」

「うつ……。つて、それが何か関係あるのかよ!?」

「当然ありますわ！ 戦妹には戦姉が間違いを犯そととしたとき、止める権利がありますわ！」

「間違いつてそれとこれは別の話だらうが！」

「いいえ、一緒ですわ！」

うおー、ヒートアップしてる。ていうか、麒麟。鬼畜男って。先輩だからもう少し、なあ？ 確かに理子にライカと、お前が狙つてる『お姉さま』の側にいるから敵視するのも分からぬでもないがよお……。俺は仮にも1年先輩だぞ？

しかし、ここで俺が麒麟を注意して直るわけがないので、黙つてコーヒーを飲む。

「あの、レオン先輩」

ヒートアップして言い争いを繰り広げているライカと麒麟に気づかれないよう、間宮が小声で話しかけてきた。

「ん。どうかしたか、間宮」

「本当のところはどうだつたんですか？ ほんとはライカと付き合つてたり……？」

「いや、別に付き合つたりとかしてないぞ。あくまで俺とライカの関係は強襲科の先輩後輩だ」

「でも、今日はデートしてたんですね？」

「まあな。偶然駅で会つて、デートしたよ」

「…………

「……どうかしたか？」

間宮のヤツが急に黙り込んで、俺を睨み始めたんだが。何か悪いことでも言つたか？

戸惑う俺に、ゆっくりと間宮が口を開く。

「付き合つてないのにデートしたんですか？」

「？ それが何か悪いのか？」

「悪……くはないんですけど、デートつてのは付き合つてる人たちがす

るものであつて付き合つてない人たちがするのはデートとは言わな
いんじやないかなと私は思つてですねライカは曰ころからレオン先
輩を尊敬してて、そもそもレオン先輩には2年の……」

「——待つた。その辺りでストップ」

これ以上は長くなりそうだ。つーか、ブツブツ呟く姿が地味にホ
ラーで怖い。

俺は不満げに頬を膨らませる間宮に視線を向けて、弁解するためには
口を開く。

「別にお互い誰かと付き合つてるわけでもないんだ。デートぐらいし
てもいいだろ」

「へ？ 誰とも付き合つてないって……レオン先輩つて2年の峰先輩
と付き合つてたんじゃなかつたんですか？」

意外そうに目を大きくさせて驚く間宮。

「……またそれかよ。なんで皆、俺が理子と付き合つてるつて思つて
んだ？ あいつと俺はよくコンビを組む相棒であつて、おまえらが想
像してるような男女の関係なんてないぞ」

「で、でも。峰先輩とよくほ……ホテルとか行つて、あ、朝帰りしたと
か……」

「それは一緒に受けてるクエストの作戦を確認したり、現場の下見
だつたりで、そのまま徹夜でゲームしたりつてのが理由だよ」

「じゃあ、よく腕組んで帰つたり、き……キスしたりつてのは？」

「あいつからしたら全部スキンシップの範疇。ちなみにキスはしてな
いぞ」

……たまに、頬つぺたはあるが。それは普通だろ。……いや、理
子のキスは故郷のアメリカでもないのか。軽くじやないもんな。

「じゃあ、本当に付き合つたりとかはしてないんですね？」

「まあな」

頷いてコーヒーを飲み干す。

……ん？ どうしたよ、ライカ。顔に生クリームつけてる間宮と

違つて俺の顔には何も付いてないだろ。

こちらを窺うように見つめてくるライカに俺は理由を訊ねようと

するが、

「お姉さま！ ダメですわ！」

ライカの隣に座っている麒麟が、絶妙なタイミングで大声を上げて邪魔をする。

「こんな朴念」でフラグメーカーな鬼畜男なんか、お姉さまには相応しくありませんわ！ そもそも、お姉さまにはこの麒麟という戦妹がすでにいるじゃありませんか！ 恋愛したいのなら私が……」

「う、うるさいっ！」

胸を張る麒麟が全て言い終わる前にライカがアイアンクローが顔面を捉える。

「ひぎゃんっ！ いたたたた……痛いですわ、おねえさまああ……」

ギリギリと小さな麒麟の顔にライカの指が食い込み、麒麟が悲鳴を上げる。それを見た間宮は「あわわわわわわわ……ライカ、さすがにやりすぎだよお～」と口元に両手を当てて怯えているが、こいつは麒麟を舐めすぎだ。あの麒麟だぞ。打たれ弱く見せておいて実は打たれ強く、極めて狡猾。こいつのおかげで俺が何度痴漢やセクハラ容疑で逮捕されかけたことが……。

「あああんっ、痛いですわああ……。んつ、んんつ、あああ……お姉さまあ……」

「——っ」

案の定、麒麟の聲音が艶かしいものに変わり始め、それを聞かされたライカの顔が真っ赤に染まり——その様子を麒麟は顔を捉えている指の隙間から覗き、愉しみ、

「ああんっ、痛い、いたあーいですわああ……」

ライカの腕を掴もうとするように見せかけ、ライカの胸に触れた。

「——っ！ どこ触つてやがる！」

「ひぎゅっ！ いた、いたたたた……っ！ ど、どことは……？ どこを触つてるとおっしゃってるんですの？ ……あらら？ これは

……」

むにむに、もみもみ……。

胸に当てていた手。その手の指を動かして感触を楽しむように揉

む。

「～～～～～！」

胸を揉まれたライカは麒麟の顔面から手を離し、麒麟に拳骨を食らわせる。

「ひぎゃんっ!? うわ……うわあああん、痛いですわああ！」

殴られた麒麟は両手で目元を押さえて泣き真似を開始、それを騙されやすい間宮が本当に泣いてると思い、「酷いよ、ライカ。やりすぎだよ。麒麟ちゃんに悪気はなかつたのに」なんて麒麟を非難する。ライカは間宮に非難され、泣き続ける麒麟を見ることで罪悪感を感じ、麒麟に優しい言葉をかけたり謝罪して、

「お姉さまああああ！」

「こ、コラ、麒麟！ くつづくな！」

この最終的に仲直りするというパターンで麒麟は毎回ライカの胸に顔を埋め、欲望を満たして、さらに距離を縮めようとしているみたいだ。

……はあ……。

俺だけ先に帰つていいかな？

目の前で百合百合されるのはものすごい疎外感を感じるんだが。しかも、男1人に対して女3人。しかも全員に百合疑惑があるメンバーだし。

「あのー、レオン先輩。これ、注文していいですか？」

「ん？ ああ、いいぞ。ライカにも結構奢つたし。あと、妹さんの分も持ち帰りで頼んでいいから」

「え、本当ですか!? ありがとうございます、レオン先輩！」

そうお礼を言つた間宮は二パターという効果音が似合いそうな笑顔を浮かべ、店員に向つて手を上げる。……これで1こ下なんて信じられないな。小学生でも通用しようだ。

「えへへへ、パフエ頼んじやつた。本当にありがとうございます、レオン先輩」

「どういたしまして」

嬉しそうに笑う間宮の頭に手を置いて撫でる。普通の1つ下の女

の子にするには軽率な行動だが、

「えへへへへ」

間宮の場合は女の子は女の子でも異性を意識し始める前とあまり大差がないので、心配がない。間宮も嫌がることなく、嬉しそうに目を細めていた。

「ほら、ご覧くださいお姉さま。あれがあの男の本性ですわ。朴念仁でフラグメーカーで優柔不斷な鬼畜。しかもロリコンなんですわよ。お姉さまが恋慕を抱くに値しない低俗な男ですよ」

「バツ……レオン先輩がロリコンなわけないだろうが！ 先輩はあたしみたいな……」

「あたしみたいな？ なんですか、それは？」

「え……あ……それは……なんでもねえよつ。とにかく、先輩はロリコンなんかじやねえ！」

「ですが間宮さまの頭を撫でて笑顔を浮べてましたわ！」

「それは……間宮は……ほら、ああ見えてもあたしと同い年だろ？ だから、ロリコンじやなえんだよ」

「でしたら、幼児体型好きの変態ですわね！」

「なんでそななるんだよ！」

再び言い争いを始めるライカと麒麟。そろそろ店の店員から周りの迷惑追い出されそうなんだが……。いや、それより、

「あたしの頭を先輩が撫でただけでロリコン疑惑が出て、今度は幼児体型好きの変態なんて……。あたしは麒麟ちゃんよりも年上で、ライカと同い年なのに……」

間宮が影を背負つて今にも泣き出しそうになつていてるんだが、それはいいのか？ 2人とも。

「間宮……」

「……レオン先輩」

「強く……生きろ。いつかはきっと、おまえにも成長期がやつてくるはずだ」

「——つ！ ……う、うう……。レオンせんぱあああい！」

涙腺決壊。腕にしがみついて泣き出し始める間宮。

しかし、ライカと麒麟の言い争いは止まることはない。むしろさら
に加速する。

「先輩は口リコンじゃねえし、朴念仁のフラグメーカーでも……ゆ、優
柔不斷でも……くつ……き、鬼畜男じやねえ！」

「あらあら。朴念仁とフラグメーカー、優柔不斷は認めたようですが
ね、お姉さま。この調子で口リコンと鬼畜も認めてもらえませんか
？」

「くううつ……」

「それでは、霧島レオンに対する口リコン疑惑と鬼畜疑惑を確定させ
るためにデイベートを始めましょうか、お姉さま。もちろん、口リコ
ン鬼畜男を信じているお姉さまは逃げませんわよね？」

「——つ。上等だ！ 受けてやるよ、その勝負！」

ライカと麒麟との間で突然開催されたデイベート。

皮肉にも先日俺が金次にかけた口リコン疑惑が主題に入っていた。



そして、ライカと麒麟の間で繰り広げられたデイベートの結末は、
麒麟が口リコン疑惑を強めるために用意した材料、「お姉さまは同一
年だから口リコンではないと主張しますが、間宮さまは正真正銘の
幼児体型！ 胸もほとんどない A A カップで、スリーサイズも同一年
であるお姉さまと比べると悲惨の一言」と、言つたところで間宮が号
泣して、今度こそ店から追い出されたため、強制終了。勝負は無効と
なつたが、間宮の心には傷が刻まれたようだった。

ちなみに、関係に亀裂に入るかもしれないと危惧された間宮と麒麟
だが、麒麟のフォロー——理子も使用しているらしい、バストアップ
の健康器具（7980円）と間宮の妹へのお土産用お菓子をプレゼント
したことでの何とかなったようだ。……相変わらず安いな、間宮。そ
して騙されてるぞ、間宮。理子の巨胸は天然だ。あいつの部屋にあん
な健康器具はなかつたし、育ちすぎてバランスが取りにくいくと愚痴つ
てたぐらいだ。

しかし、まあ、何とか円満にまとまってよかつたよ。疲れたけど。

休日なのに疲れが増した俺が、麒麟と間宮と別れ、ライカを武僧高の女子寮まで送つてひとりで帰つていると、突然ケータイの着信音が鳴つた。着信を知らせる画面には理子の名前が表示されている。

受話器を上げるボタンを押して耳にあてると、

『理子がデートのお誘い断わつたからつて後輩ちゃんたち3人とデートなんて最低だよ、レオポン。理子りんはお休み返上して働いてたのにい……』

第一声でいきなりこんなことを呟かれた。

「それは……つて、なんでおまえがそれを知つてるんだよ？　どこかで見てたのか？」

『クエストの下見してるときに偶々見えたの。もう、楽しそうにしちゃつて。ブンブンがおーなんだぞ』

『用事つてクエストの下見だつたのか。それはすまなかつたな。けど、それなら俺も付き合つたのに』

『というか、下見するときはいつも理子から誘うのに、なんで今回は誘わなかつたんだ？』

『だつたら、これから理子りんの部屋で——つて、あううう……。そういえば夜にも予定があつたんだ。むうくく……じゃあ、今度！　今度デートしよ！　もちろんレオポンのおごりでね』

『はあ……わかつたよ。じゃあ今度な』

『うん！　なら、許してあ、げ、る♪——愛してるよ、レオポン』

『はいはい、俺も愛してるー』

『むう、心が籠もつてないぞおー？』

『これでも十分心込めてるつもりなんだが、伝わらなかつたか』

『つもりじやだめなんだよ！　「理子おおおお、好きだあああ！」愛

してるうううううう！』つて叫ぶぐらいしないと全然伝わらないね』

『……それを実際に俺がやつた場合、お前絶対引くだろ』

つーか、そんなキヤラでもないだろ……。

『理子はぜえーたい、引かないよ。むしろレオポンにメロメロになつて一気にフラグ起つちゃつたりするよ！　ほらほらあ、試しに言つて

みよ？ ねえ、ちょっとだけ。先っぽだけでいいから、ね？ いいでしょ？』

『いきなりそのネタをぶつ込むなよ……。はあ……じゃあ、先っぽ？ だけな』

『うんうん、さすがレオポン。ノリがいいねえー』

う、る、さ、い。前言撤回するぞ。

俺は受話器から耳を離してマイクを正面に持ってきて、咳く。なるべく心を込めて。

「——理子、好きだ」

……。

……ああ、ノリで言うには結構……いや、かなり恥ずかしいな、これ。

名前呼んで、好きだって言うだけで、顔が熱くなる。

遊びでも、その場のノリでも恥ずかしくて顔を覆いたくなる。

改めてアニメや漫画の主人公の凄さが窺えるな。レントン、君ほんとすごいよ。そりやあエフレカも惚れるわ。

『……』

……理子さん、そろそろ何か反応は返してくれないかな？

『……』

ほら、笑つてもいいんだよ？ いや、いつそのこともう大笑してくれ！ ノリに乗ったからってよくよく考えれば、あれはない。何雰囲気出して『好きだ』なんて言つてるんだよ!? うわああああああああ……物心付き始めた頃から15歳の始めまでアメリカだけではなく、世界中でも刻んだ黒歴史にまた新たな黒歴史を刻んだ気分だ。穴があつたら入りたい。海があつたら飛び込みたい。……もうこのままケータイの電源落としてなかつた事にするか。

そう思つてケータイの電源を切ろうとしていると、突然スピーカーから理子の声が聞えてきた。

『——私も、レオポンが大好き』

スピーカーから聞えてきた理子の言葉。

その言葉にはいつもの陽気でどこかふざけている感じはなく、心が

込められた、嘘が感じられない真剣なもののように、

「——つ」

思わず俺は少女漫画のヒロインのようにトキめいてしまった。

なんだこれ、ドキドキするぞ……。いつもの遊び……なんだよな？

「り……」

『えへへっ、じやあまたね。約束、忘れちゃパンパンがおーなんだから
ね』

「ん……あ、ああ。わかつてるよ。約束な

『じゃあね、レオポン』

そう言つて、受話器が下ろされる。

通話が終了した電話を片手に、俺はしばらくその場から動けなかつ

た。

なんだつたんだ、今のは……。